

# 青木原遺跡

平成9・10年度一級河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業

平成16・17・18年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第172集

# 青木原遺跡

平成9・10年度一級河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業

平成16・17・18年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡遠景（南側から撮影）

卷頭図版 2



土器集合

## 序

静岡県東部、伊豆半島の付根に当たる、北西側を愛鷹山、東側を箱根山脈、南西側を静浦山地によって囲まれた平野部への人々の進出は、弥生時代中期にまで遡ることが出来る。

その東側、現三島市域の中北部は、古代には、伊豆国の国府が置かれ、中世は、三島大社の門前町、近世においては、東海道の宿場町として、古くから地域の政治・経済・宗教・交通の中心地として発展・繁栄していた場所である。

三島市中央部にある富士山伏流水を源流とし、南東方向へ走る御殿川は、昭和45年以降、洪水対策として流路変更工事の計画が進められ、これに伴う発掘調査が断続的に下流側から行われており、その成果は、三島市教育委員会及び当研究所によりまとめられ、報告がなされて来ている。

御殿川中流域の蛇行帯が対象となった今回の青木原遺跡の発掘調査は、次第に三島の中心部へ迫ろうとする直前の地区において、古人の空間的・年代的な活動の広がりや内容を知る手掛りの獲得が期待されたものであった。

そして、従高地より、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓群や古墳時代後期～奈良・平安時代の集落域が検出され、旧河道中からは、上流部で使用・投棄され、この場所に埋蔵した、弥生時代から江戸時代に至る様々な年代・種類の遺物の出土を見ることが出来た。

当該地域の遺跡の展開に、新たな知見をえた今回の調査成長の一つ一つが、さらなる歴史復原の材料として役割を果たすことを切に望む。

最後に本遺跡の現地調査並びに報告書作成にあたっては、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会文化課、三島市教育委員会をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力・理解を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

平成19年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

# 例　　言

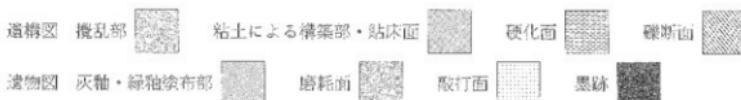
- 1 本書は、静岡県三島市二日町601-1他所在の青木原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成9・10年度一級河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業、平成16・17・18年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成10年2・3月に確認調査、平成10年10月～平成11年1月、平成17年11月から平成18年6月に渡り本調査を実施した。資料整理は、平成16年12月から平成17年3月、平成18年6月から19年1月まで行った。
- 3 調査体制は、以下の通りである。

平成9年度（確認調査）	所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事兼総務部長 三田村昌昭 総務部総務課長 初鹿野英治 会計係長 杉田智 副主任 大石真二 調査研究部長 石垣英夫 調査研究部次長兼調査研究一課長 栗野克巳 調査研究部調査研究二課長 佐野五十三 調査研究員 岩本貴
平成10年度（本調査）	所長 斎藤忠 常務理事兼総務部長 伊藤友雄 総務部総務課長 杉木敏雄 会計係長 杉田智 副主任 大石真二 調査研究部長 石垣英夫 調査研究部次長兼調査研究一課長 佐野五十三 調査研究員 岩本貴 漢田由美子
（保存処理）	主任調査研究員 西尾太加二
平成16年度（保存処理）	所長 斎藤忠 副所長 飯田英夫 常務理事兼総務部長 平松公夫 総務部次長兼総務課長 鎌田英巳 会計係長 野島尚紀 調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長 栗野克巳 保存処理室長 西尾太加二
平成17年度（本調査）	所長 斎藤忠 常務理事兼総務部長 平松公夫 総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 会計係長 野島尚紀 調査研究部長 石川素久 調査研究部次長 栗野克巳 調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三 調査研究員 原田利志美 日吉高幸
平成18年度（本調査）	所長 斎藤忠 常務理事兼総務部長 平松公夫 総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 調査研究部長 石川素久
（事業担当）	調査研究部次長 稲葉保幸 主事 望月高史
（調査担当）	調査研究部次長 佐野五十三 調査研究部次長兼調査研究課長 及川司 調査課係長 中鉢賢治 調査研究員 日吉高幸 岩名建太郎
平成18年度（資料整理）	所長 斎藤忠 常務理事兼総務部長 平松公夫 総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 調査研究部長 石川素久
（事業担当）	調査研究部次長 稲葉保幸 主事 望月高史
（調査担当）	調査研究部次長 佐野五十三 調査研究部次長兼調査研究課長 及川司 保存処理室長 西尾太加二 調査課係長 中鉢賢治 調査研究員 岩名建太郎

- 4 出土した木・金属製遺物の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
- 5 本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅳ章について、調査研究員岩名健太郎が行った。また、出土木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託し、小川とみ・鈴木三男両氏による分析結果を付録に掲載した。
- 6 現地での基準点測量を株式会社フジヤマ、空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 7 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 8 本調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

## 凡　例

- 1 測量については、日本測地系（改正前）を使用し、図上平面直角座標系のX=-98950.000、Y=+38700.000を原点（A=0）として、1辺10mの方眼（グリッド）を、東から西へ向かってA・B・C…、北から南へ向かって0・1・2…と設定している。また、方位は、座標方位を基準としている。
- 2 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産技術会議事務局監修1992）に準拠した。
- 3 本書の遺構表記は、下記のとおりである。  
SH 住居跡（住居内の一部施設のろが検出された場合を含む） SK 土坑 SR 自然演路  
これ以外の遺構・遺構群については、和名による表記を行う。  
なお、現地調査時に設定・記録されていた遺構表記については、本文中で対応関係がある遺構個別の記載項目に現地略号として表示する。
- 4 拝図の縮尺は、各図中に示したスケールのとおりである。また、写真判版の縮尺率は、任意である。
- 5 スクリートーンの表現で、図中に特に表記が無いものの内容は、以下のとおりである。



# 目 次

## 卷頭図版

序

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査概要 .....	1
第1節 調査の経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
第3節 調査の方法 .....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	5
第3節 基本土層 .....	7
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物 .....	9
第1節 旧河道の遺構と遺物 .....	9
1 近世以降の杭列 .....	9
2 旧河道出土の遺物 .....	12
第2節 微高地上の遺構と遺物 .....	23
1 古代以降の遺構 .....	23
2 古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構と遺物 .....	32
3 古墳時代中期の遺構と遺物 .....	62
4 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 .....	63
5 遺構外出土の遺物 .....	80
第Ⅳ章 まとめ .....	89
第1節 古墳時代後期～奈良・平安時代の集落 .....	89
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓の遺物の埋没状況について .....	90
付 編 香川県三島市青木原遺跡出土木材の樹種 (小川とも・鈴木三男) .....	92
写真図版 .....	
報告書抄録 .....	

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	遺跡調査区配置図	3
第3図	遺跡周辺地勢図	4
第4図	局辺遺跡分布図	6
第5図	1区 土層図	7
第6図	2・3区 土層図	8
第7図	1区 1~3号杭列 配置図	9
第8図	1号杭列 構成杭	10
第9図	2・3号杭列 構成杭	11
第10図	1区 旧河道 遺物検出状況	13
第11図	1区旧河道出土遺物（土器1）	14
第12図	1区旧河道出土遺物（土器2）	15
第13図	1区旧河道出土遺物（土器3）	16
第14図	1区旧河道出土遺物（瓦・土製品・金属製品・石製品・骨角製品）	17
第15図	1区旧河道出土遺物（木製品1）	19
第16図	1区旧河道出土遺物（木製品2）	20
第17図	1区旧河道出土遺物（木製品3）	21
第18図	1区旧河道出土遺物（木製品4）	22
第19図	青木原遺跡北半部遺構配置図	24
第20図	青木原遺跡南半部遺構配置図	25
第21図	1号小土坑群 平面・エレベーション図	26
第22図	2号小土坑群 平面・エレベーション図	27
第23図	2区古代以降土坑SK1~11 平断面図	29
第24図	3区古代以降土坑SK12~16・18・19 平断面図	30
第25図	3区古代以降土坑SK17・20~26 平断面図	31
第26図	SH 1 窯 平断面図	32
第27図	SII 1 窯周辺出土遺物	32
第28図	SH 2 窯 平断面図	33
第29図	SH 2 窯内出土遺物	33
第30図	SII 3 窯 平断面図	33
第31図	SH 3 窯周辺出土遺物	33
第32図	SH 4 窯 平断面図	34
第33図	SH 4 窯内出土遺物	34
第34図	SH 5 窯 平断面図	35
第35図	SH 6 窯 平断面図	35
第36図	SH 6 窯内及び周辺出土遺物	36
第37図	SH 7 平断面図	36
第38図	SH 7 出土遺物	37
第39図	SH 8 平断面図	37

第40図	SH 8	竈 平断面図	38
第41図	SH 8	出土遺物	38
第42図	SH 9	平断面図	39
第43図	SH 9	出土遺物	39
第44図	SH 9	竈 平断面図	40
第45図	SH10	平断面図	41
第46図	SH10	竈 平断面図	42
第47図	SH10	出土遺物	42
第48図	SH11	平断面図	43
第49図	SH11	竈 平断面図	44
第50図	SH11	出土遺物	44
第51図	SH12	平断面図	46
第52図	SH12	竈 平断面図	46
第53図	SH12	出土遺物	47
第54図	SH13・14	平断面図	48
第55図	SH13	竈 平断面図	49
第56図	SH13	出土遺物	49
第57図	SH15	平断面図	51・52
第58図	SH15	竈 平断面図	51・52
第59図	SH15	出土遺物	53
第60図	SH16	平断面図	53
第61図	SH16	竈 平断面図	54
第62図	SH16	出土遺物	54
第63図	SH17	平断面図	55
第64図	SH17	竈 平断面図	55
第65図	SH17	出土遺物	56
第66図	SH18	出土遺物	56
第67図	SH18	平断面図	57
第68図	SH18	竈 平断面図	57
第69図	SH19	平断面図	57
第70図	SH19	竈 平断面図	58
第71図	SH19	出土遺物	58
第72図	SH20	平断面図	58
第73図	SH20	竈 平断面図	59
第74図	SH20	出土遺物	60
第75図	SH21	平断面図 及び SH21 竈 平断面図	61
第76図	SH21	出土遺物	61
第77図	SK27	平断面図	62
第78図	SK27	出土遺物	62
第79図	1号方形周溝塗	平面・エレベーション図	63
第80図	1号方形周溝塗	北溝 遺物検出状況	64

第81図	1号方形周溝墓	北溝西部	出土遺物	.....	65
第82図	1号方形周溝墓	北溝中部	出土遺物	.....	66
第83図	1号方形周溝墓	北溝東部	出土遺物	.....	66
第84図	1号方形周溝墓	北東隅部～東溝	遺物検出状況	.....	67
第85図	1号方形周溝墓	北東隅部	出土遺物	.....	68
第86図	1号方形周溝墓	東溝北部	出土遺物 1	.....	70
第87図	1号方形周溝墓	東溝北部	出土遺物 2	.....	71
第88図	1号方形周溝墓	東溝南部	出土遺物	.....	73
第89図	2号方形周溝墓	平面・エレベーション図	.....	73	
第90図	2号方形周溝墓	遺物検出状況	.....	74	
第91図	2号方形周溝墓	西溝中部	出土遺物	.....	75
第92図	2号方形周溝墓	西溝南部	出土遺物	.....	76
第93図	2号方形周溝墓	南溝	出土遺物	.....	77
第94図	3号方形周溝墓	平面・エレベーション図	.....	78	
第95図	SR1	平断面・エレベーション図	.....	79	
第96図	2・3区遺構外出土遺物（土器1）	.....	81		
第97図	2・3区遺構外出土遺物（土器2）	.....	83		
第98図	2・3区遺構外出土遺物（土器3・瓦）	.....	85		
第99図	2・3区遺構外出土遺物（土器4・金属製品・石製品）	.....	87		

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

遺跡遠景（南側から撮影）

土器集合

図版1 1.1・2 A区 2.1区（南側から撮影）

図版2 1.2 A区 2.2 B・3区

図版3 1.SK5 2.SK6 3.SK8 4.SK9 5.SK10 6.SK27

図版4 1.3区 2.3区

図版5 1.SK12 2.SK13 3.SK14 4.SK15 5.SK16 6.SK17

図版6 1.SK18 2.SK20 3.2号小土坑群南側建物想定 4.2号小土坑群北側建物想定

図版7 1.SH1竪横断面 2.SH1竪 3.SH1竪煙道部構築材 4.SH5竪 5.SH8

図版8 1.SH8 竪 2.SH9 新段階 3.SH9 古段階

図版9 1.SH9 竪燃焼室内遺物出土状況 2.SH9 竪抽石 3.SH11古段階 4.SH11竪古段階

図版10 1.SH10 2.SH10竪 3.SH12竪燃焼室内遺物出土状況 4.SH12竪

図版11 1.SH13竪 2.SH13竪 3.SH16 4.SH16竪

図版12 1.SH17竪 2.SH17竪 3.SH18 4.SH19 5.SH19竪

図版13 1.SH20 2.SH20竪燃焼室内遺物出土状況 3.SH20 4.SH21内出土刀子 5.SH21

図版14 1.3区方形周溝墓 2.1・2号方形周溝墓遺物出土状況

3.1号方形周溝墓北東隅部遺物出土状況

- 図版15 1.1号方形周溝墓北東隅部遺物出土状況 2.SR1 3.SR1
- 図版16 1区旧河道の遺物（土器1）
- 図版17 1区旧河道の遺物（土器2）
- 図版18 1区旧河道の遺物（土器3）
- 図版19 1区旧河道の遺物（土器4・瓦・土製品・金属製品・石製品・骨角製品）
- 図版20 1.1号杭列構成杭① 2.1号杭列構成杭② 3.2号杭列構成杭 4.3号杭列構成杭  
5.1区旧河道の遺物（木製品1）
- 図版21 1区旧河道の遺物（木製品2）
- 図版22 1区旧河道の遺物（木製品3）
- 図版23 1区旧河道の遺物（木製品4）
- 図版24 1.SH1出土遺物 2.SH2出土遺物 3.SH3出土遺物 4.SH4出土遺物 5.SH6出土遺物①  
6. SH6出土遺物②
- 図版25 1.SH7出土遺物 2.SH8出土遺物 3.SH9出土遺物① 4.SH9出土遺物② 5.SH10出土遺物①  
6. SH10出土遺物②
- 図版26 1.SH11出土遺物① 2.SH11出土遺物② 3.SH11出土遺物③ 4.SH12出土遺物①  
5.SH12出土遺物② 6.SH12出土遺物③ 7.SH12出土遺物④
- 図版27 1.SH13出土遺物① 2.SH15出土遺物
- 図版28 1.SH13出土遺物② 2.SH18出土遺物 3.SH16出土遺物① 4.SH16出土遺物②  
5.SH17出土遺物
- 図版29 1.SH19出土遺物 2.SH21出土遺物 3.SH20出土遺物① 4.SH20出土遺物②  
5.SK27出土遺物
- 図版30 1.1号方形周溝墓北溝西部出土遺物 2.1号方形周溝墓北東部出土遺物  
3.1号方形周溝墓北溝中部出土遺物
- 図版31 1.1号方形周溝墓北東隅部出土遺物① 2.1号方形周溝墓北東隅部出土遺物②
- 図版32 1.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物① 2.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物②
- 図版33 1.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物③ 2.1号方形周溝墓東溝中部出土遺物
- 図版34 1.2号方形周溝墓西溝北部出土遺物 2.2号方形周溝墓西溝中部出土遺物①  
3.2号方形周溝墓西溝中部出土遺物② 4.2号方形周溝墓南溝出土遺物
- 図版35 1.2・3区包含層出土弥生時代後期～古墳時代前期土器（壺口縁部） 2.同（壺類～胴上位）  
3.同（小型壺・甕類） 4.同（高坏・器台類） 5.同（壺・小型甕類）
- 図版36 1.2・3区包含層出土遺物（土師器 坏・甕・壺） 2.同（土師器 甕または、壺） 3.同（瓦）  
4.同（支脚型土器） 5.同（土製模造品） 6.同（土師器片周辺加工円盤）  
7.同（土師器 ミニチュア土器） 8.同（土師器 坏類）  
9.同（土師器 脚高高坏類・耳皿・柱状高台）
- 図版37 1.2・3区包含層出土遺物（土師器 羽釜） 2.同（かわらけ） 3.同（須恵器）  
4.同（縄輪陶器） 5.同（灰釉陶器） 6.同（陶器片周辺加工円盤）  
7.同（金属製品 刀子・錢貨） 8.同（石製品 磨・敲打石）

# 第Ⅰ章 調査概要

## 第1節 調査の経緯

御殿川は、三島扇状地末端部の富士山からの伏流水を湧出する涌池を起源とし、三島市街地を南流し、大場川へと合流する流程約6kmの河川である。

御殿川が合流する大場川、及び大場川が下って合流する狩野川下流部は、河床勾配が緩やかであり、その背水影響とともに、御殿川自体、流路途中に多くの蛇行部を持ち、短時間の急激な降雨に対して、排水処理能力が追いつかない結果、市内流域に浸水・浸水被害をもたらして来た。

静岡県は、昭和45年より、排水能力の向上と流域面積確保を目的とした御殿川蛇行部の直進化及び護岸整備工事を断続的に実施してきた。同時に工事計画箇所にある埋蔵文化財包含地の発掘調査の必要が生じたため、静岡県沿岸土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会（平成2年以降、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究会）の間で協議のもと、昭和49年、中島（城内）遺跡調査を嚆矢とし、大場川合流部より御殿川を遡る方向で、昭和55年、中島地区分布調査、昭和56年、中島B遺跡下舞台地点発掘調査、昭和57年、鶴喰・八反田・中地区分布調査、昭和61年、中島B遺跡上舞台地点発掘調査（以上、三島市教育委員会）、平成2・3年、中島西原田・八反田前田、梅名大曲田遺跡発掘調査、平成6年、鶴喰前田遺跡発掘調査、平成7・8年、鶴喰広田・中手乱遺跡発掘調査（以上、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）が実施されてきた。

この上流部にあたる三島市二日町地先の蛇行部の直進工事予定地にて、平成10年1月、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した確認調査の結果、試掘坑より弥生時代後期から中近世各時期に渡る遺物包含層と、当該期の遺構が検出されたため、全般的な発掘調査が必要と判断され、平成10年10月より本調査が開始された。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 調査の経過

平成10年2月より3月まで、未買収用地部分を除く工事対象地内において、10基の試掘坑（ $2 \times 2\text{ m}$  テストピット）を南北方向へほぼ等間隔に設定し、人力掘削を行い、確認調査を実施した。結果、北部では、旧河道の土層堆積、中南部の一部では、堅穴遺構とみられる基盤層に対する上層の落込みが確認され、9基の試掘坑から、弥生時代後期から中近世に比定される土器の出土があり、ほぼ全面的に当該各時期の遺跡の広がりが予想された。

この結果を受け、同年10月より、本調査を行うこととなり、同月初から現地準備工を進め、同月中旬から北部調査区（1区）で人力掘削を開始した。12月上旬に入り、その南側調査区（2A区）にも調査が及ぶようになったが、この時点で工事対象地に未買収用地が残っており、翌平成11年1月、全調査対象の北部分（1・2A区）、旧河道部と河岸嵩高地上の一部範囲に相当する963m<sup>2</sup>についてのみ調査を終了させた。

この調査時に出土した木製品の実測及び保存処理作業は、平成16年12月から17年3月に行った。

平成10年度中に調査が及ばなかった対象地の中・南部（2B・3区）1679m<sup>2</sup>については、平成17年に調査を再開した。

9月より現地設営のための準備、手配、諸手続きを行い、11月から現地で搬入路の造成、整地、プレハブ設営、備品・機材の搬入、フェンスの設置などの準備工を進め、同月中旬より重機を用いて表土除去、下旬より人力による包含層掘削を3区で開始した。これに並行し、同月末には、測量基準杭の設置を行った。

12月から、遺構の検出作業が始まり、範囲把握のための試掘溝（トレンチ）掘削を実施した。翌18年1月中旬より、2B区でもトレンチ発掘を開始し、3月まで、包含層掘削と古代以降に比定される土坑群の検出、掘削、実測、写真撮影作業を進めた。4月より3区の古墳時代後期～古代に比定される住居群、6月より、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される方形周溝墓の掘削、実測、写真撮影作業を進めた。検出された遺構配置状況を記録するため、3月末と5月末にラジコンヘリコプター、6月末には、高所作業車を用いた空中写真撮影を行い、全現地調査は、終了した。

平成18年7月上旬、一部安全フェンスの撤去と現場養生作業を実施した。

一部現地調査に並行して、平成18年6月より報告書刊行に向け、資料整理を開始し、平成19年1月まで行った。

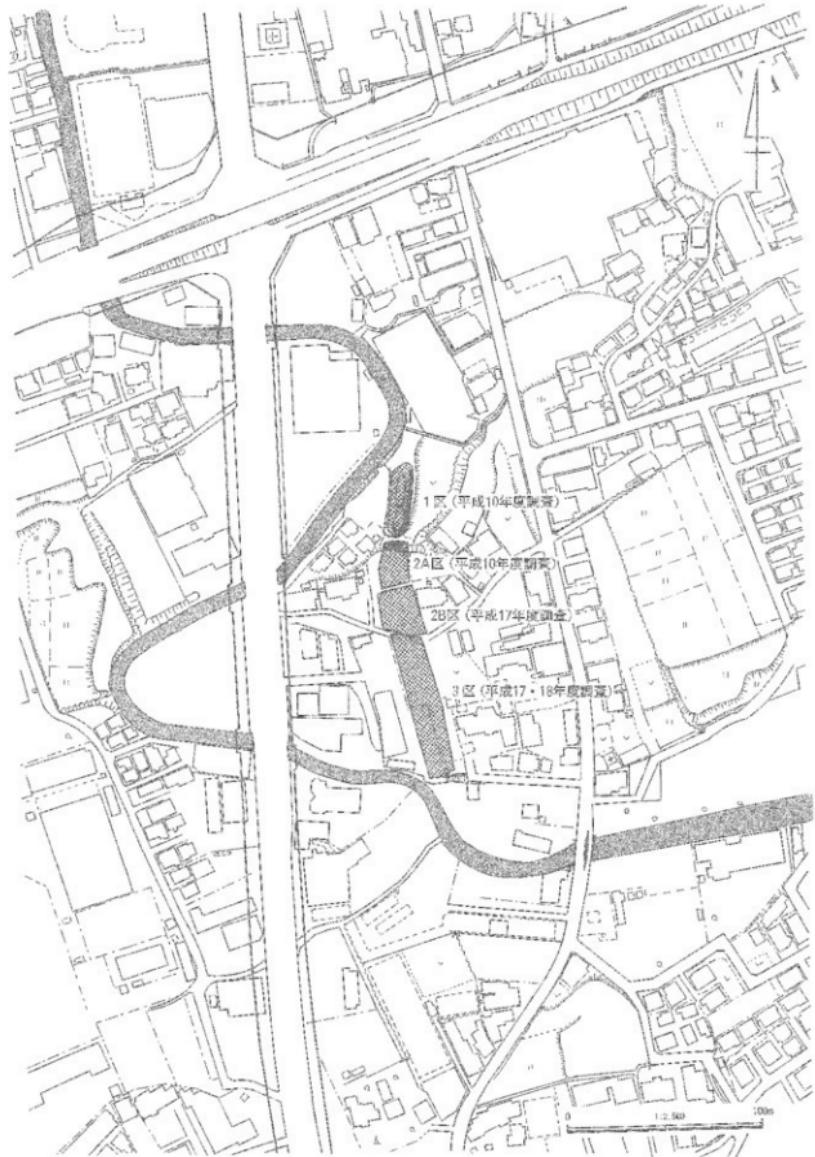
## 第3節 調査の方法

現地調査にあたり、測量基準点は、改正前の日本測地系WGS系に基づいて設置し、10m間隔でグリッドを設定し、南北方向は、北から順にアラビア数字を用い、東西方向は、東からアルファベットを用いた。

遺構図は、遺方測量法を用い、縮尺率1/20を基本とし、必要に応じて縮尺率1/10で作成した。また、一部図面については、光波測定器（トータルステーション）によって記録された3次元データを元にコンピューター上で作図した。

遺物の取り上げ方法については、地区・遺構別に出土層位毎の一括取り上げ、遺物検出状況図の作成、トータルステーションによる出土位置記録測定を状況により選択・併用した。

写真撮影は、現地調査では、6×7判モノクロとカラーリバーサルフィルム、35mm判モノクロ、カラーネガ、カラーリバーサルフィルムを使用し、資料整理では、遺物の撮影に4×5判カラーリバーサルフィルム、6×7判モノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。



第2図 沿面防護区画図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

静岡県の東部、北西側に愛鷹山、東側に箱根山、南側に静浦山地に囲まれた黄瀬川・狩野川下流域に広がる平野の形成は、およそ現沼津市東部から三島市街地の南北で二分される。

北側は、三島・沼津平野と通称される地域の東部にあたり、愛鷹山・箱根山間の谷に富士火山溶岩（三島溶岩／約1万年前）が流れ込んだのち、繩文海進・海退を経て、富士山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）である。

南側は、玉方平野または、狩野川平野と通称され、繩文前期の海進時に入江（古狩野湾）であった地域が、海退後に天城カワゴ平火山の降下軽石及び火碎流に由来する軽石質砂層によって埋められた谷底平野である。

堆積が先行した三島溶岩流の末端部は、静浦山地の手前まで延び、これに行き手を阻まれる形で狩野川の流れは、静浦山地に寄り添いつつ、北上から西走へと変化し、三島扇状地末端部の湧水と箱根山を源流とする小河川の合流を重ね、静浦山地の北側で南下して来る黄瀬川と合流したのち、静浦山地北西麓を廻り込むようにして、駿河湾に注がれる。

御殿場川は、三島扇状地末端部の湧水地である蘆池を起源とし、三島市街南部を南東方向に蛇行を繰り返しながら走り、三島扇状地の東端を流れる狩野川支流の大場川へ合流する。青木原遺跡は、御殿場川中流部に発達した蛇行帯の東岸部に立地し、標高は、およそ18~19mである。



第3図 遺跡周辺地勢図

## 第2節 歴史的環境

三島原状地の南部から田方平野北部にかけての狩野川及びその支流々域、さらに周辺の丘陵縁辺部、台地では、低地部の墳化に伴って、この地を生産域として進出して来た人々により営まれた弥生時代中期以降の遺跡群が展開している。

今回の青木原遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓と古墳時代後期～奈良・平安時代の集落跡が検出されているが、周辺の当該期の主な遺跡とその内容は、以下のとおりである。

御殿川流域に立地する弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺跡は、青木原遺跡より上流では、およそ0.8km北側に、集落遺構として住居跡16軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡、生産遺構として水田跡等が検出された西大久保遺跡がある。約0.5km南側、下流西岸に位置する青木B遺跡では、古墳時代初頭の方形周溝窓が3基ほか、溝、土坑が検出されている。約0.9～1.2km西東側の下流の蛇行帯内の旧河道部に位置する鶴崎前田・鶴崎広田・中手乱・八反畠前田・中島西原田遺跡では、当該期の遺物の出土をみている。さらに下り、約1.5km南東側に位置する中島B遺跡上舞合地点では、弥生時代の住居跡2軒、方形周溝墓6基、古墳時代の住居跡18軒が検出されている。

以下、図中に含まれていないが、南南西約2.5km先、御殿川合流後の大場川西岸～境川東岸間に数高地には、鞋形跡と土坑が検出された長伏上塙平田遺跡、西～南西方約2.5kmの柿田川流域部では、瀬戸川・岩崎屋遺跡、堂磨大龜・矢崎遺跡といった集落跡が立地している。

さらに平野の東縁、大場川東岸～箱根西麓部を俯瞰すると、青木原遺跡より北東約1.8km先には、住居跡2軒が検出された谷田天台遺跡があり、約1km東方の夏目木川～来光川間に延びる源平山丘陵上に立地する遺跡群では、源平山遺跡で1基、猪追面遺跡で4基、茶臼山遺跡で3基の古墳時代初頭に比定される方形周溝墓が検出されている。また、南東側約4kmにある、来光川～柿沢川間の台地～丘陵未端部にかけては、伊豆通信病院内・仲道・寺尾原・賀治ヶ久保・大土肥跡B・向原遺跡などが集中する。

扶桑略記によると、680(天武9)年、駿河國の内、田方・賀茂2郡を分離し、伊豆國が設置されたとされる。古墳時代後期～奈良・平安時代の青木原遺跡周辺の遺跡立地に関係深いと考えられる伊豆國府の位置は、特定されていないが、現三島市街中心部には、国府の周辺部に建立されていたとみられる古代寺院跡の比定地(国分寺・国分尼寺=六ノ乘遺跡・塔ヶ森廃寺・市ヶ原廃寺)が集中している。また、官衙関連では、塔ヶ森廃寺が近接する三島大社境内遺跡で大型の掘立柱建物の一部が検出されているほか、御殿川上流～大場川間に立地する上才塚遺跡で、砾石製石器が出土し、掘立柱建物3軒とともにこれを取り囲む柱穴・溝・道状遺構が検出されている。また、これらの遺跡を含め、芝町遺跡・三島代官所遺跡でも布目瓦が出土している。このほか、大場川東岸・夏目木地区の丘陵斜面部に当たる道下遺跡は、白鳳期の瓦窯跡であり、御殿川～大場川合流部手前に位置し、奈良・平安時代の住居跡44軒、掘立柱建物跡7軒が検出された中島B遺跡上舞合地点は、田方郡衙の候補に挙げられている。また、図中に含まれていないが、ここより約1km下流にあたる大場川西岸には、旧河道より大量の墨書き瓦土器、木製祭把具が出土した箱根田遺跡がある。

その他、奈良・平安時代の集落は、河川合流箇所の前後の微高地に多く見つかっている。御殿川流域では、その下流域で、古墳～平安時代の住居跡が35軒検出された金沢遺跡、奈良・平安時代の住居跡12軒が検出された中島B遺跡上舞合地点が分布し、大場川流域では、住居跡4軒が検出された御園川遺跡、同じく住居跡12軒が検出された岩町田遺跡のほか、図中に含まれていないが、下流部西岸に、奈良・平安時代の住居跡26軒・井戸2基が検出された間宮川向遺跡があり、境川下流部東岸では、平安時代の住居跡24軒が検出された長伏六反田遺跡、同住居跡5軒・掘立柱建物3軒が検出された桶田遺跡などがある。



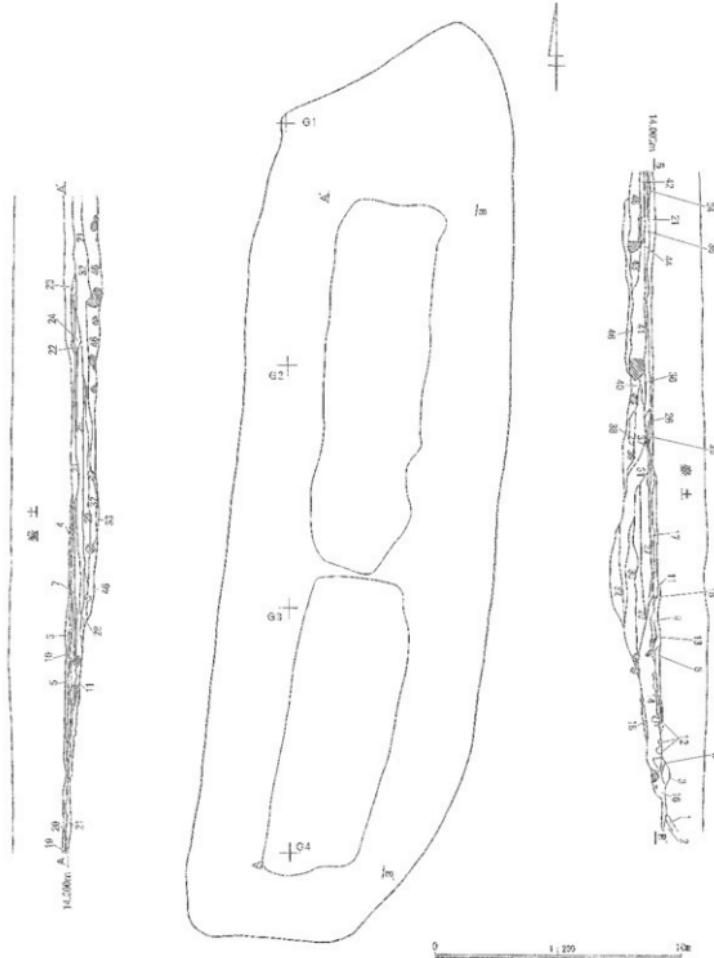
第4回 周辺遺跡分布図

1 青木涼道跡	11 茶臼山遺跡	21 中手乱遺跡
2 伊豆國分寺跡	12 御園川遺跡	22 中島西原田遺跡
3 芝本町遺跡	13 梅町遺跡	23 中島5遺跡上舞台地点
4 三島大社・塔ヶ森廃寺	14 蓬下遺跡	24 中島5遺跡下舞台地点
5 六人衆遺跡(国分尼寺比定地)	15 三島代官所跡	25 楠田遺跡
6 市ヶ原廃寺	16 西大久保遺跡	
7 上才屋遺跡	17 茜大遺跡	
8 谷田天台遺跡	18 金沢遺跡	
9 竹平山遺跡	19 鳥取荒田遺跡	
10 桜浦西遺跡	20 鶴鳴庄田遺跡	

### 第3節 基本土層

青木原遺跡の調査対象区の立地環境は、奥御坂川流路の両側に隣接する低湿地帯（1区）と、そのさらに南側の河岸上級高地（2・3区）の二つに大きく分けられる。

1区の基本層序は、盛土・棍乱層下、疊を含む砂・シルト層の地殻を基礎とする。調査区南部に位置する旧河道堆積土中に粘質土の集中が確認されている。



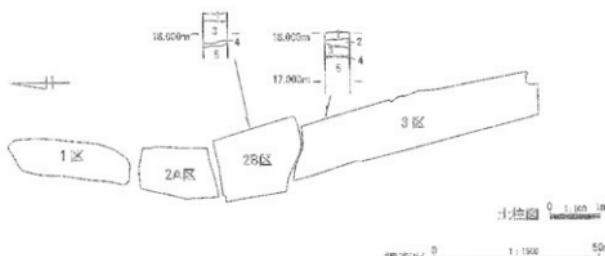
第5図 1区 土層図

## 1区土層

- 1層 深黄色土層 粘性無し。縫り有り。
- 2層 黄褐色土層 粘性有り。縫り有り。
- 3層 明灰～青灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 4層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。
- 5層 青灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 6層 浅灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 7層 暗灰色土層 粘性無し。縫り有り。灰色シルト風が混じる。
- 8層 青灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 9層 暗灰色土層 热性有り。縫り有り。少量の径10mm以下の礫を含む。
- 10層 青灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 11層 暗灰～深青灰色土層 粘性無し。縫り有り。径5～10mm程度の礫を含む。
- 12層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径5～10mm程度の礫を含む。
- 13層 暗灰色土層 粘性有り。縫り有り。径10mm程度の礫を含む。
- 14層 暗灰色土層 粘性有り。縫り有り。黑色細砂リミナが発達する。
- 15層 暗灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 16層 黑灰色土層 粘性無し。縫り有り。
- 17層 暗灰色土層 粘性無し。縫り有り。青灰色シルトラミナが発達する。
- 18層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。
- 19層 灰色土層 粘性無し。縫り有り。黄瀬川湖底地堆積物。通称マサ。
- 20層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。青瀬川湖底地堆積物。通称マサ。2・3区基本土層 5層に比定。
- 21層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。径20～30mm程度の礫を含む。
- 22層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。
- 23層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。
- 24層 淡褐色土層 粘性無し。縫り有り。径20～30mm程度の礫を含む。
- 25層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。

- 26層 淡灰色土層 粘性無し。縫り有り。少量の径20mm程度の礫を含む。
- 27層 黄褐色土層 粘性無し。縫り有り。少量の径10mm程度の礫を含む。
- 28層 暗褐色土層 粘性無し。縫り有り。暗褐色粘土層が混じる。
- 29層 暗褐色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径10～30mm程度の礫を含む。
- 30層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径10～30mm程度の礫を含む。
- 31層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径10～30mm程度の礫を含む。
- 32層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。径5～10mm程度の礫を含む。
- 33層 暗灰色土層 粘性無し。縫り有り。暗褐色粘土層が混じる。
- 34層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。
- 35層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。径10～20mm程度の礫を含む。
- 36層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。
- 37層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径10～20mm程度の礫を含む。
- 38層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。
- 39層 暗褐色土層 粘性有り。縫り有り。
- 40層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。
- 41層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径20～30mm程度の礫を含む。鶴岡赤土層が混じる。
- 42層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径10～20mm程度の礫を含む。
- 43層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径20～50mm程度の礫を含む。鶴岡赤土層が混じる。
- 44層 黑色土層 粘性無し。縫り有り。径5mm程度の礫を含む。
- 45層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径20～50mm程度の礫を含む。
- 46層 暗褐色土層 粘性無し。縫り有り。半大的礫を含む。

2・3区は、畑耕作のため、ある一定の深度まで削平・攪乱を受けており、2区の北部では、土取りの跡とみられる畝状の掘込みが深く及んでいた。表7下の遺物を包蔵する礫を含んだ砂・シルト層は、色調及び、礫の含有密度の差異により上下2層に分離可能であるが、出土した遺物の年代観は、上下層とも弥生時代後期から近世に及び、時代的境界として認識されない。



第6図 2・3区 土層図

## 2・3区土層

- 1層 黄土層。最近まで耕作されていた畠上で、弥生時代以降の遺物を包蔵する。
- 2層 淡褐色土層 粘性無し。縫り無し。径5～30mm程度の礫を含んだ砂。シルト層で弥生時代以降の遺物を包蔵する。
- 3層 黑褐色土層 粘性無し。縫り有り。多量の径5～30mm程度の礫を含んだ砂。シルト層で弥生時代以降の遺物を包蔵する。弥生時代以降の遺構を埋めている畠上と性質は、近似している。
- 4層 淡褐色土層 粘性無し。縫り有り。径5～10mm程度の礫を含む。一部マサ（5石相当）が混じる砂礫層。今回の調査では、この土層上面を邊縫隙面に設定している。
- 5層 淡褐色土層 粘性無し。縫り有り。1区基本土層の頂に相当する。特徴的な芦ヶ瀬川湖底地堆積物であり、土石の段送は、確かにシルト質で表面をなめらかに形成している。一般にマサ（真砂）と通称され、本遺跡では、ブロック状に切出されたものが、古代住居の邊縫隙材として利用されている。

## 第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

### 第1節 旧河道の遺構と遺物

調査1区では、南北方向の調査区境界壁面の土層観察から、最低3条の旧河道の重複が認識されるが、その方向は、明確でない。

#### 1 近世以降の杭列（第7図）

盛土直下、弥生土器から近世陶磁器を含む砂疊層上位に、直線的に並んだ杭列が合計3条検出されている。いずれも丸太材の端部を4面削り、横断面形正方形の尖端を作り出した杭を用いている。各々の杭の頭部は、失われており、設営された具体的箇位と時期は、不明である。

流水量の変化に伴う一時的な流路変更に対応した護岸施設の一郎と解釈される。

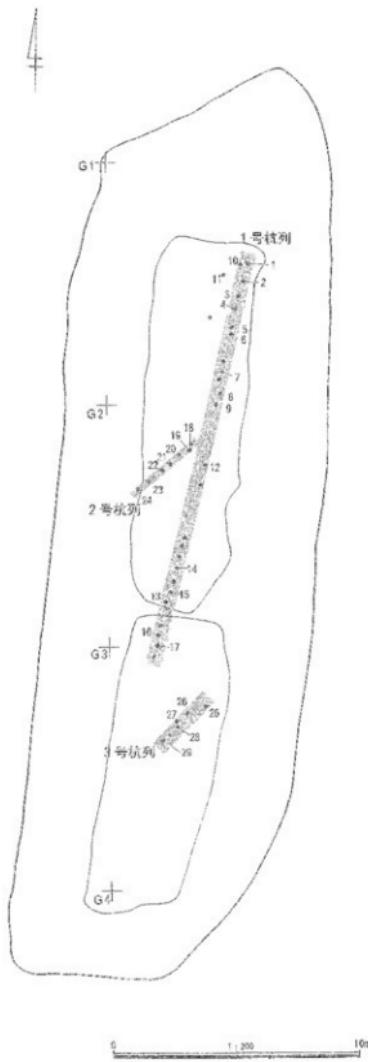
#### 1号杭列

F-1グリッド南部から3グリッド北部に位置する。途中約5mに渡り疊な箇所があり、その北側の杭列の方向は、およそN-15°-E、南側の杭列の方向は、およそN-15°-Eで、近接する現御殿川流路のおよその方向軸(S-50°-W前後=N-40°-E前後)と平行・直交関係はない。流路の東西どちら側に配置されていたかは、不明である。

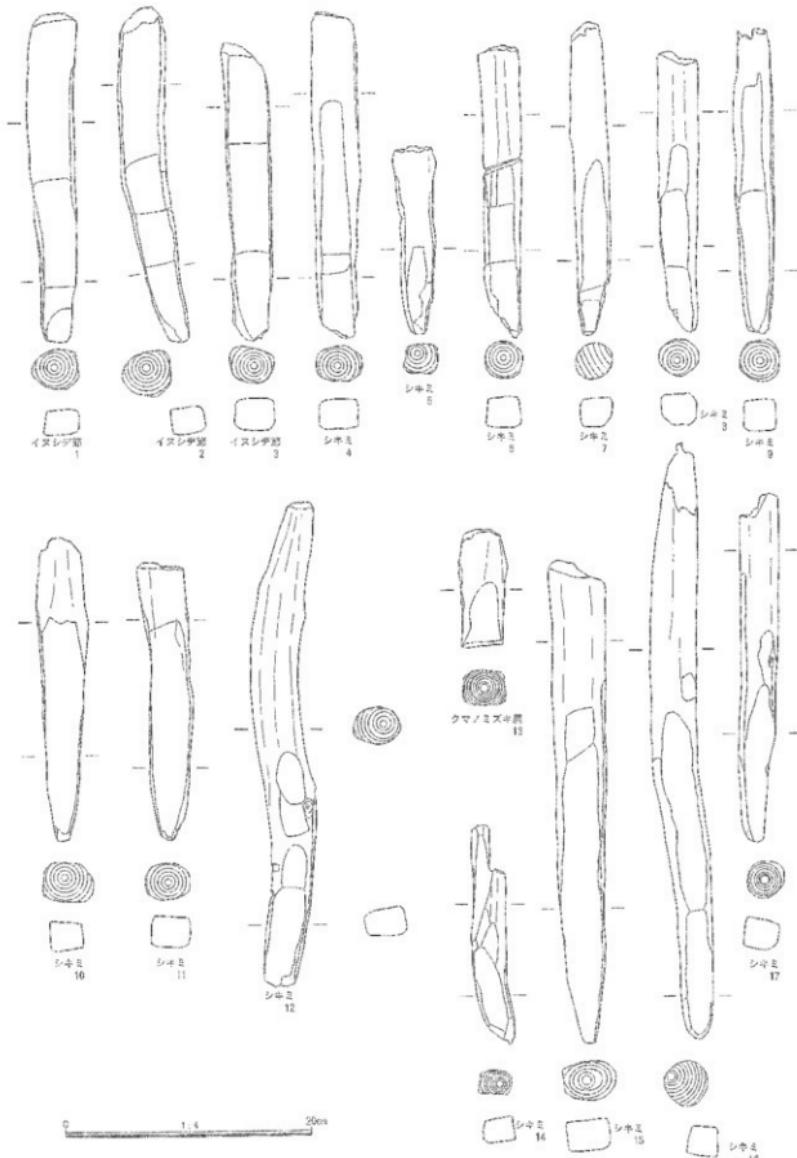
#### 2・3号杭列

2号杭列は、F-2グリッド北西部に位置し、方向は、およそN-49°-Eである。3号杭列は、F-3グリッド北西部に位置し、方向は、およそN-42°-Eであり、この2列の杭列は、近接する現御殿川流路の方向軸ともほぼ平行関係にある。

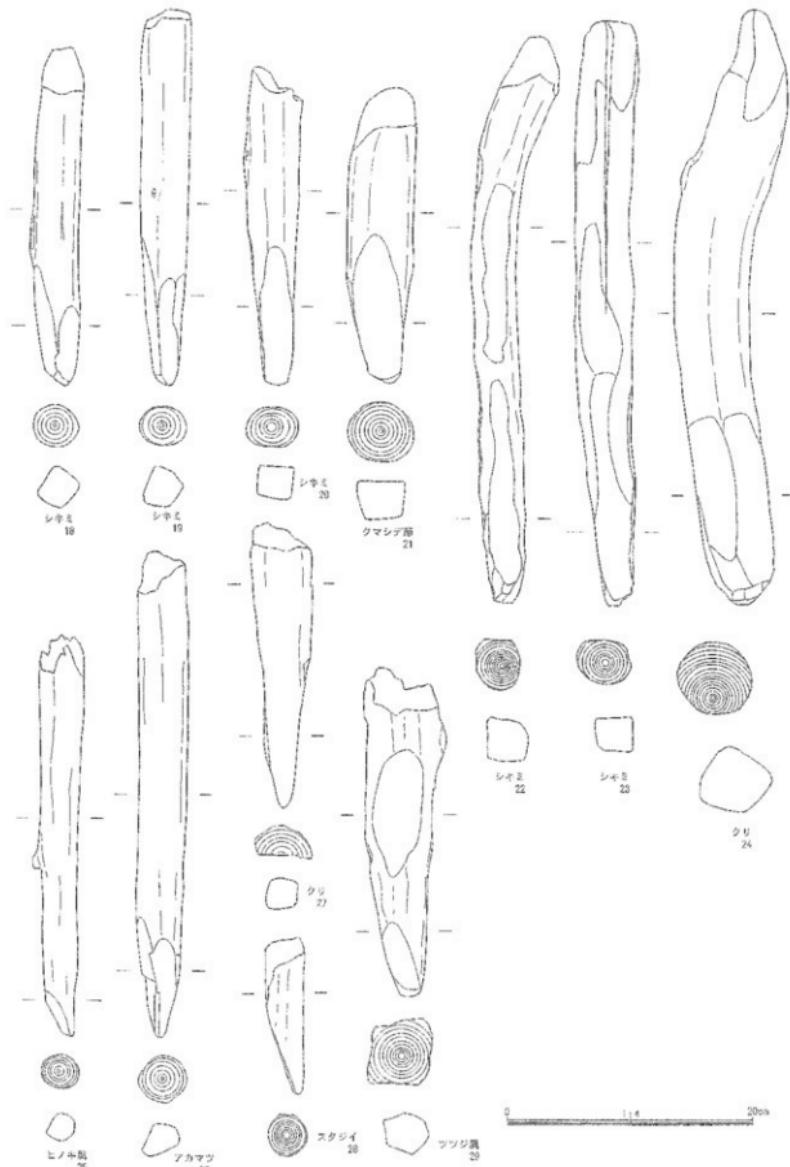
2号杭列と3号杭列の垂直方向の間隔は、およそ3mで、流路の南北岸に各々配置されていたものとみられる。杭は、1号杭列のものに比べ、若干太めのものが使用されている。



第7図 1区 1～3号杭列 配置図



第8図 1号試列 構成部



第9図 2・3号坑剖面成形

## 2. 旧河道出土の遺物

1区で検出された旧河道堆積土からは、弥生時代から近世に比定される遺物が出土した。遺跡の北側で御殿川の大きな蛇行があり、その方向に並行していたと考えられる調査区内の埋没前の河道部は、水害部周辺の落水しやすい箇所として、流物が集積したと推定される。

### (1) 土器（第11～13図 図版16～19）

出土した多くの土器表面が流磨し、同一土器内で異なる年代のものが出土していることから、当該調査区の遺物の埋没は、二次的なものであったことが窺える。出土物には、近世に比定される陶磁器片も含まれるが、図示に堪えるものが無いため、割愛した。

30～34は、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器である。

30～55は、壺で、口縁の種類は、単純口縁（30）、直立する複合口縁（31～33）、折り返し口縁（34～40・48）がある。37には、穿孔が施されている。頸部以下の器形は、肩下位に最大径を持った、いわゆる無花果形（48～53）を呈す。

口部、広く外反する口縁の内面、複合口縁の外面、肩下位から肩部にかけて設定される文様帶の種類は、横位の沈線文（41・42）、キザミまたは、ハケ工具（櫛歯状の）尖端の連続した押し付け（31・34・35・43～45・49・50）、横位の縞文（30・33・40・46～48）があり、後2者は、上下で工具の傾きや原体の燃りを変え、羽状文状のモチーフを作り出す（30・33・43～45・48～50）。32・33・37・38の口縁外縁には、縦位の突堤が貼付けされ、38・47には、円形の粘土粒が貼付けられている。

頸・肩部で文様帯が設定されていない器外部は、ミガキ調査される場合がほとんどであるが、53の胸中下位は、斜位のハケ調整されている。

54は、小型壺である。外面は、底面も含め、丁寧にミガキ調整がされている。55は、小型壺または、壺の底部である。丸底で、中央部にわずかな円形の凹みを削り出している。

56～76は、台付壺である。器底調整は、76を除き、外面は、ハケ調整され、個体により、各部位で工具使用方向に若干の違いがある。口縁内面は、いずれもハケ調整を共通するものの、胸内面については、ヘラケズリ（58・58～64）、ハケ（65～67・69）調整に2別される。76は、S字口縁壺の口縁部である。

77～83は、高环である。77は、外側へ開く折り返し口縁を持つ。口縁部にキザミ、环と脚の接続部にハケ工具を用いた疑似（羽状）縞文が施文されている。环上位外面は、斜位のハケ、环中下位・脚上中位外面は、縦位のミガキが行われた後、斜位のハケ調整、脚下位内外面は、横位のナデ調査、环内面は、ミガキ、脚上中位内面には、斜位のハケ調整がなされる。

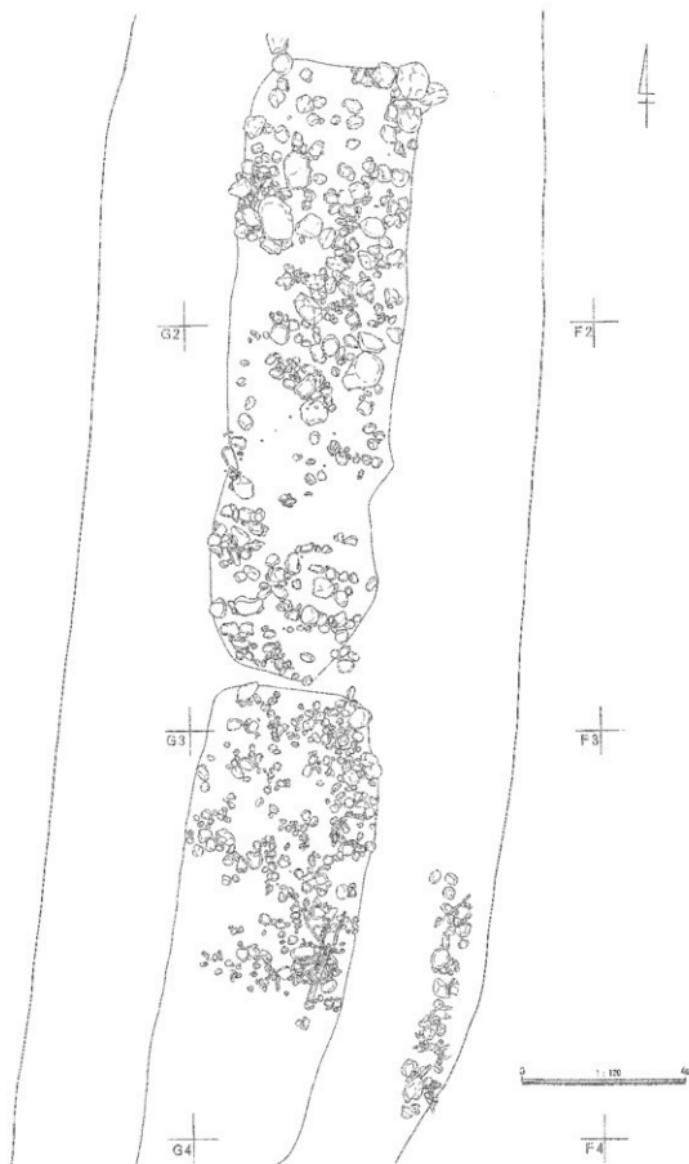
78～80は、环部のみの残存である。78・79の口縁は、外側に開き、80は、碗状に若干膨らむ器形をしている。78は、环下位に屈曲部を持つ。いずれも内外面ともに縦・斜位のミガキ調整がされる。

81～88は、脚部のみの残存である。81・82の外面は、流磨痕が観察される。ともに内面は、ヘラ状工具を回転させナデ調整がなされており、81の天井中央部には、あてられた工具尖端の回転によって、円形筒状の穴が生じている。83の下位は、複合し、段状を呈す。77と同様に环と脚の接続部にハケ工具を用いた疑似（羽状）縞文が施文されている。中位外面は、縦位のミガキ、下位外面は、縦位のハケ調査が行われ、内面は、ナデ調整がなされる。中位に1箇所、穿孔が土器焼成後に施されている。

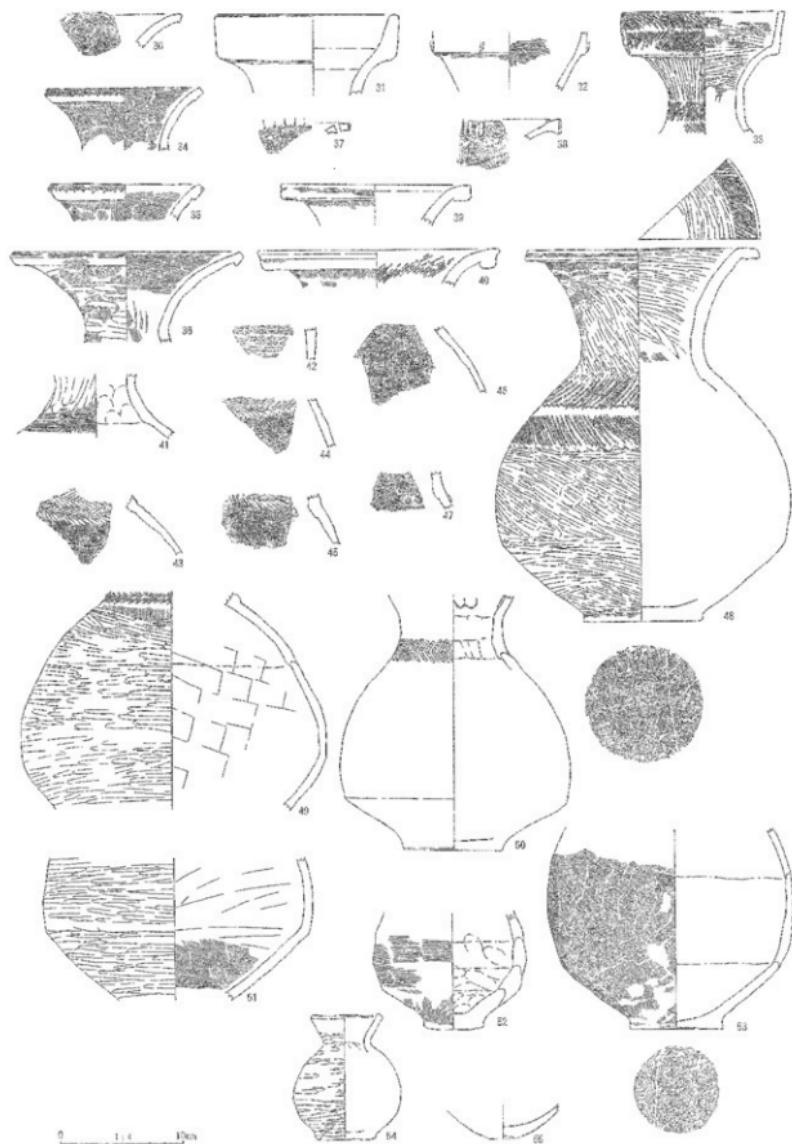
84は、鉢である。器形の作りを除いて、施文、器面の調整法は、同調査区出土の台付壺と同一で、口唇部にキザミが連続するほか、内外面とも、斜位のハケ調整がされる。

85～95は、須恵器・灰釉陶器の一部である。85・86は、大型壺の口縁から頸部であり、櫛搔きの波状文が巡る。87は、壺の肩～肩下位で、肩部の屈折が発達している。外面には、自然釉が付着している。88・89は、壺の肩下位から底部に当たる。90～95は、高台付环または、脚の肩下位から底部で、底面の範疇切り離し。調整は、90～92は、回転ヘラ切り、93～95は、回転糸切りで行われている。93～95の高台断面は、三日月形を呈す。

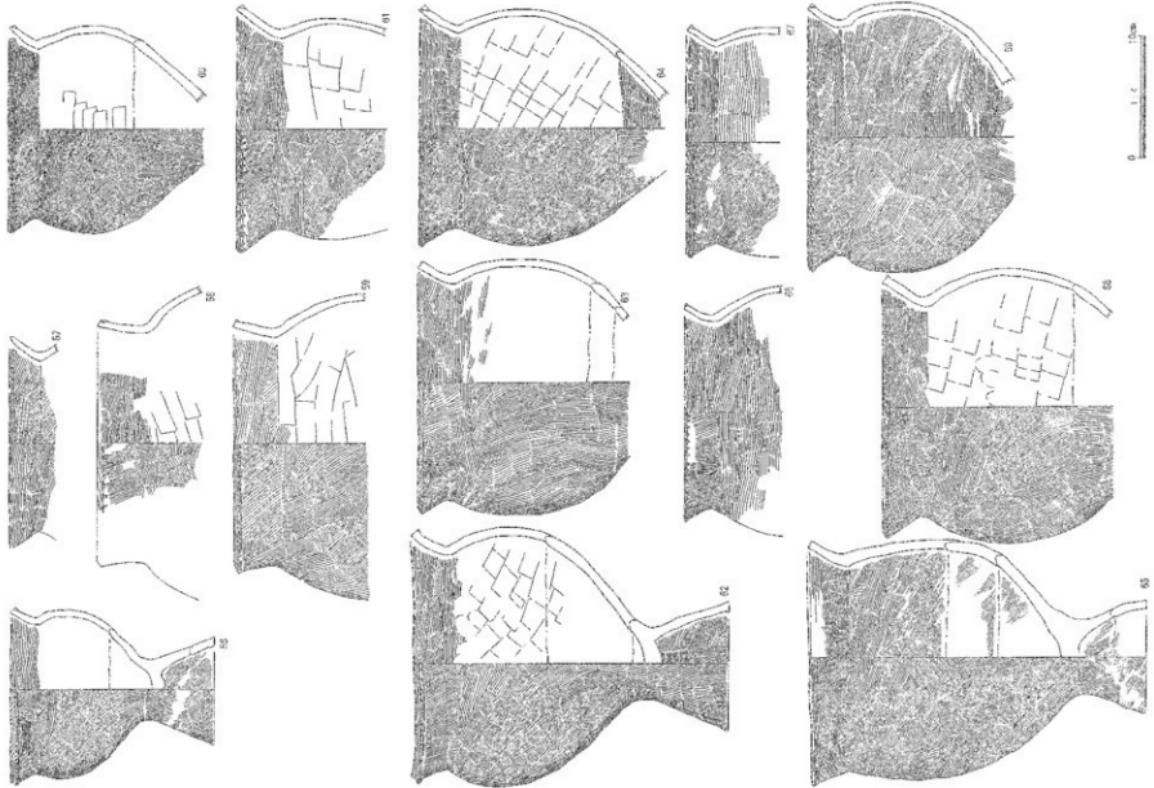
96～107は、中世に比定される土器類である。96は、12世紀代に比定される湯美産の大型壺の口縁か



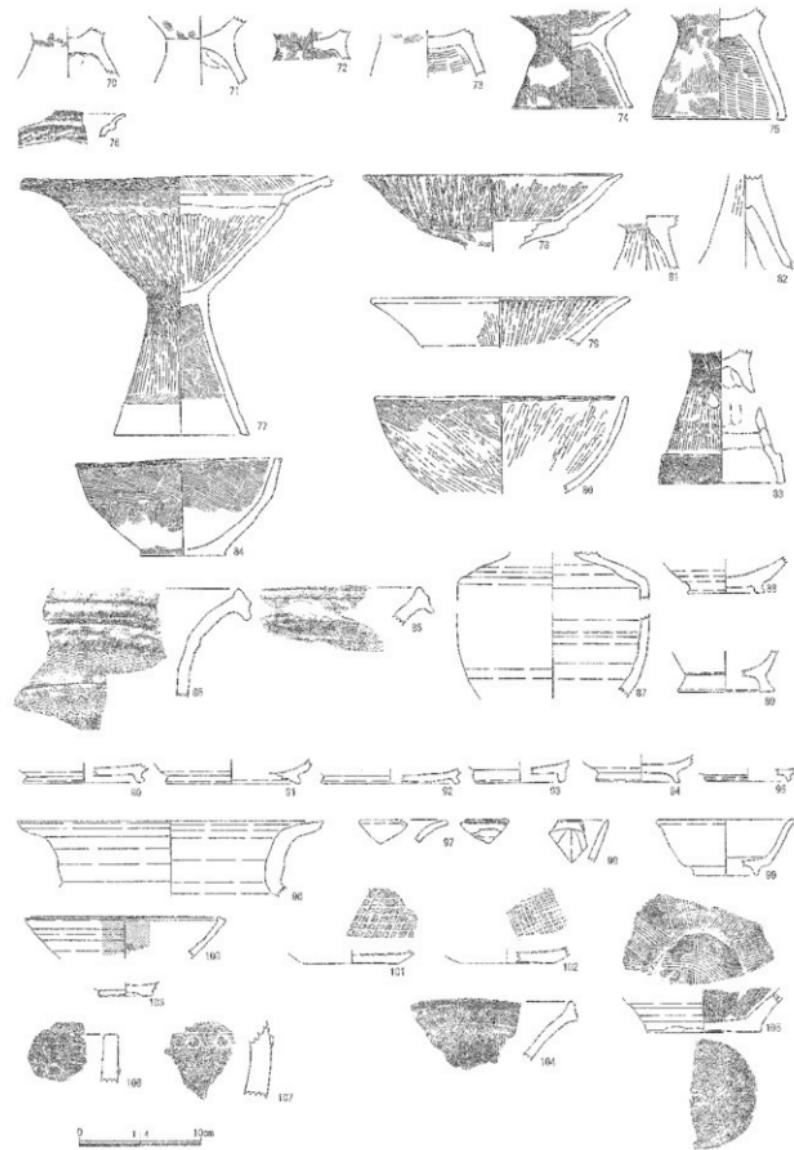
第10図 1区 沈河底 遺物出土状況



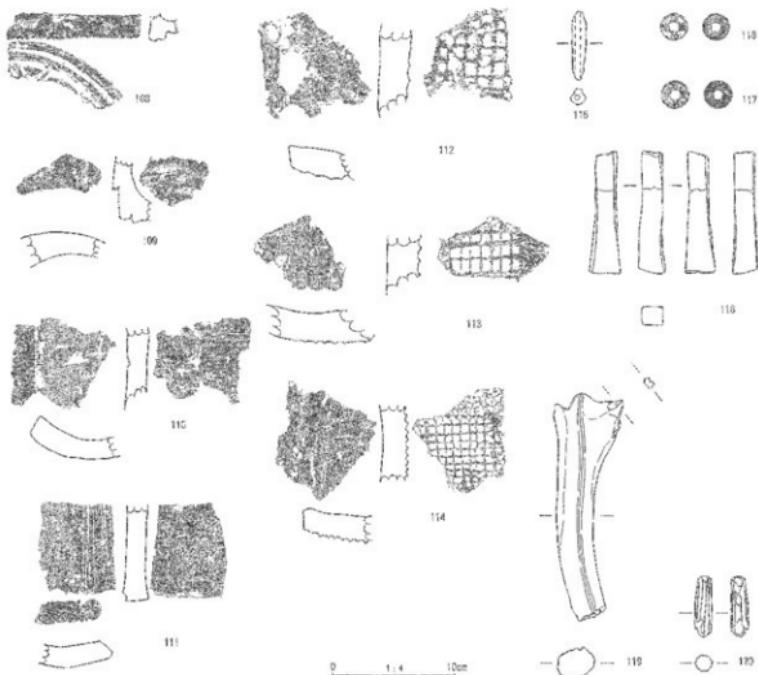
第11图 1区旧河灌出土遗物（土层1）



第12圖 1區五段河道出露地層 (土器2)



第13图 1 旧石器与遗物 (上部)



第14図 1区旧河邊出土遺物（瓦・土製品・金属製品・石製品・骨角製品）

ら頭部である。97～99は、中世に中國から輸入された青磁製品である。97は、稜花皿の口縁部で、内面側で口縁と体部に描き出された斜線文が認められる。98は、鶴連弁文碗の口縁部である。99は、端反無文碗の口縁から高台部であり、高台内面にも粧斑が塗布されている。100～102は、瀬戸系の陶器である。100は、古瀬戸戸後Ⅱ期に比定される、内外面に次輪が掛った、口唇部が受け口状になる壺鉢型小鉢の口縁部である。内面に備目が斜位に施されている。101・102は、鉢皿の底部である。103は、天目柄の底部である。104・105は、大窯1期に比定される壺鉢の口縁部と底部で、105の横目は、15本である。106・107は、瓦質の火鉢または、香かの一部で、型押しによる連続する円文、5つの菱形を組んだ花形文が施されている。

## (2) 瓦・土製品・金属器・石器・骨角器（第14図 図版19）

田方平野北部の狩野川支流域の遺跡で古代に比定される瓦が包含層中より出土することは、少くない。御殿川の上流域は、伊豆国府推定地に接してあり、國府周辺に建っていた寺院（青木原遺跡と同様大場川西岸・御殿川東岸間の微高地に立地する古代寺院に市ヶ原廃寺、塔ヶ森廃寺が挙げられる）で使用されていたものが、流されて来たと考えられる。

出土している瓦の胎土は、焼成による色調差があるものの、いずれも軽石粒を多く含んでいる。108・109は、軒丸瓦の一部である。108の瓦当文様は、二重圓文縁の蓮華文である。109は、瓦当部を失っており、凸面には、ヘラケズリ、凹面には、ナテ調整がなされている。110～114は、平瓦の一部である。

表面の流蘇の著しい113を除いて凹面に布日の残存が観察される。凸面の調整は、110がナデ、111は、磨感により不明、112～114は、格子目状の叩きが施されている。

115は、筋鉢形をした陶質の土鉢である。径3mmの丸棒の周囲に粘土を撫で付け成形したものである。

116・117は、中世渡来鏡である。116は、重宋運寶（初鑄1038年）、117は、元豐通寶（初鑄1079年）で、ともに銭鉢は、篆書体である。

118は、麻灰岩を素材とした砥石である。周囲4面が均一に使用され、断面形は、方形を呈す。

動物遺体は、馬齒、大型哺乳類の脚骨をはじめ、少なからず出土しているが、加工痕跡が明らかで図示可能な骨角器は、2点のみであった。いずれも鹿角を素材にしているが、具体的な器種及び埋蔵年代は、不明である。119は、第1または、第2枝分岐部から第2または、第3枝の分岐部までの角幹を素材としている。上位の枝の基部を削り出して尖端部を作り、角坐側の端部には、細かい調整を加える。120は、周縁を面取りし、全体を径15mm程度の断面形正多角形の棒状に仕上げている。

### (3) 木製品（第15～18図 図版20～23）

旧河内の覆土は、二次堆積が頻繁であり、同一箇所出土の遺物間で年代観が必ずしも共有され得ないことは、先述したが、本遺跡の木製品については、便宜上、帰属年代が知られている特長的な器種を除き、（同一土層かつ）出土地点が近い土器類がある場合、その年代に準拠し、それ以外は、中近世の遺物として報告する。

なお、以下に図示可能であった資料60点について、その内容を記載するが、これらを含む61点分の木製品素材と第1節で示した遺構（杭列）を構成する34点分の杭素材の樹種組成については、92頁からの付録を参照されたい。

121～134・146は、容器であり、121以外は、中近世に比定される。

121は、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される片口である。体部の平面形は、隅丸方形に近い長円形で、注口の突出に至る柄は、比較的発達している。後部突起、短脚の痕跡は、確認されなかった。

122・123は、箱の側板、124は、底板である。各々、材の側縁に木釘が残る。125は、角を落とした方形で有孔の板、126は、内外表面に黒漆が塗布された板で、箱材の可能性が高い。127は、曲物の側板で縫合部を縫皮で留めている。128・129は、曲物の底板である。130は、箱の底板で、失われた側板・底板との繋ぎのための木釘が残る。131～133は、いずれも8cm大の円板で、柄杓の蓋または、底板と考えられる。146は、柄杓の柄である。134は、木栓である。

135～145は、食事具である。135～141は、中近世に比定される漆器椀で、いずれも内外面に漆が塗布されている。142～144は、長さ25cm前後、幅1cm前後を測る箸であり、実用的な食事具というよりも古代から中世にかけての祭祀具であると考えられる。145は、横杓子の口の部分に相当し、表面には、漆が塗布されている。中近世に比定される。

147～150は、中近世に比定される装身具（下駄）である。147～149は、漆塗下駄、150は、革履下駄である。147は、平面形長方形で、齒が低く、前後3箇所の齒以外に縫部の縁の左右・中央にも孔が開けられている。148～150は、平面形隅丸長方形を呈す。

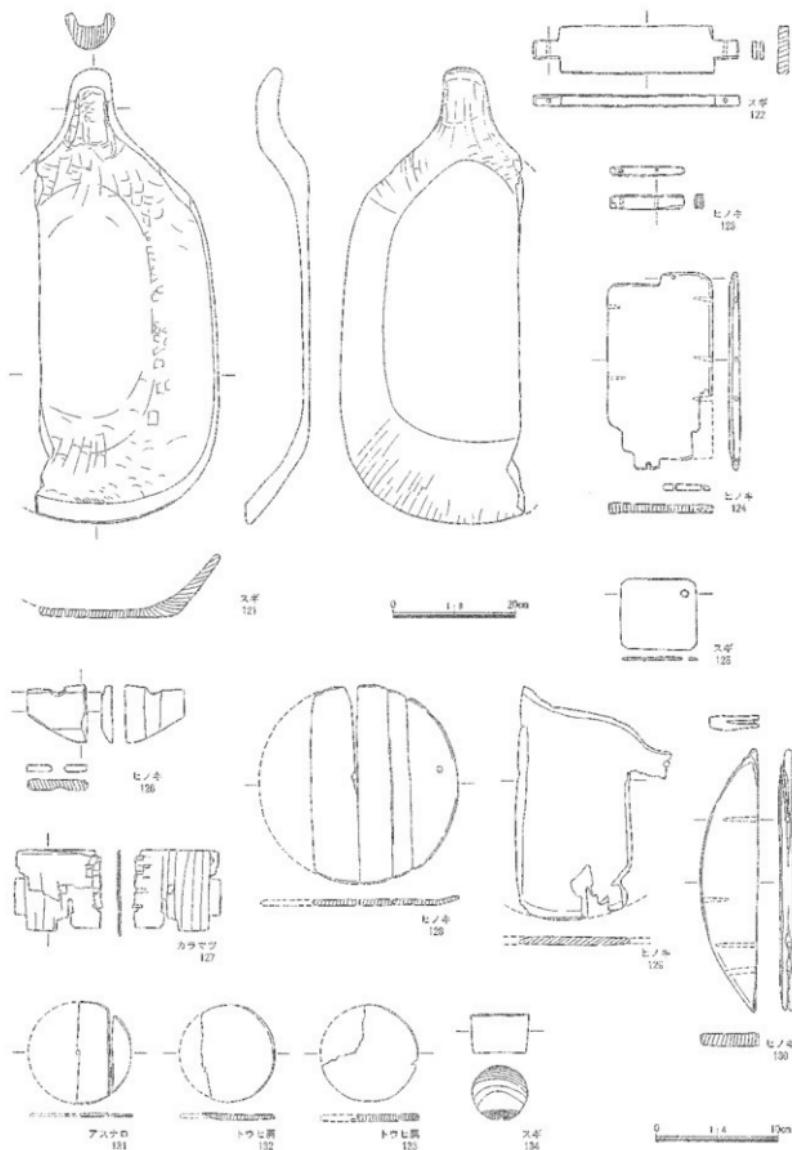
151～171・175～179は、弥生時代後期～古墳時代前期、172～174は、中近世に比定される建築材または、土木材である。

151～153は、柱材である。154・156～159・168は、角棒状、155は、丸太状の部材である。160～162は、端部をT字形に形作った部材で、残存する161・162の反対側の端部は、鋸角に尖らせている。163～165は、枠材である。

166・167・169～177は、板材である。166・170には、納孔が開けられており、167・169・170には、端部に切り欠き加工がなされている。

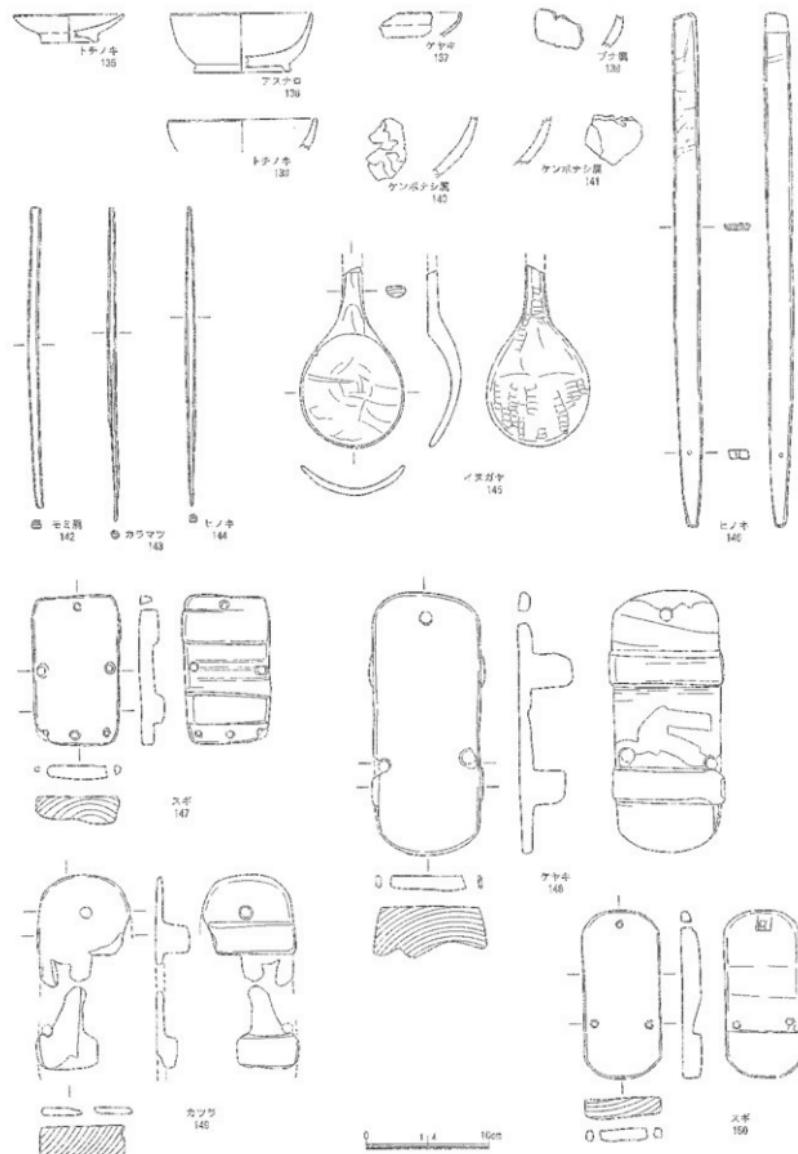
178・179は、梯子である。いずれも足掛け1段分のみが残存する。

180は、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される農具（鍬の木製品）である。



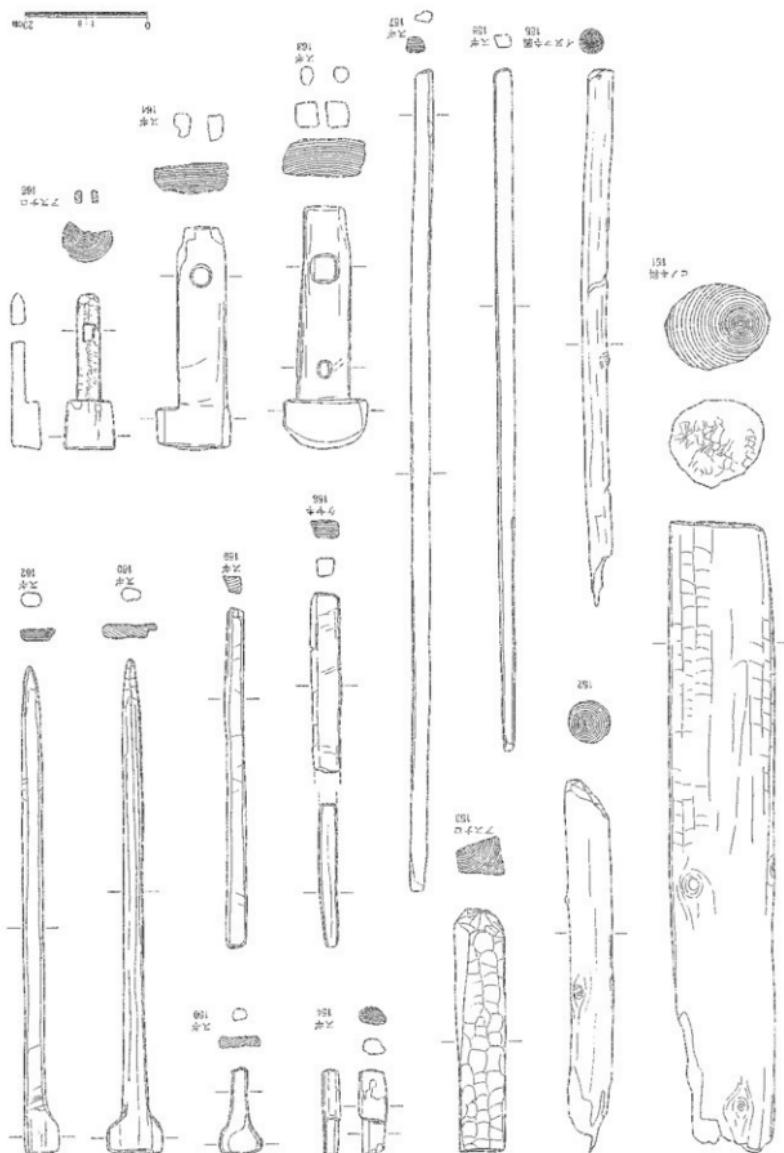
第15圖 1区旧河道出土遺物（木製品1）

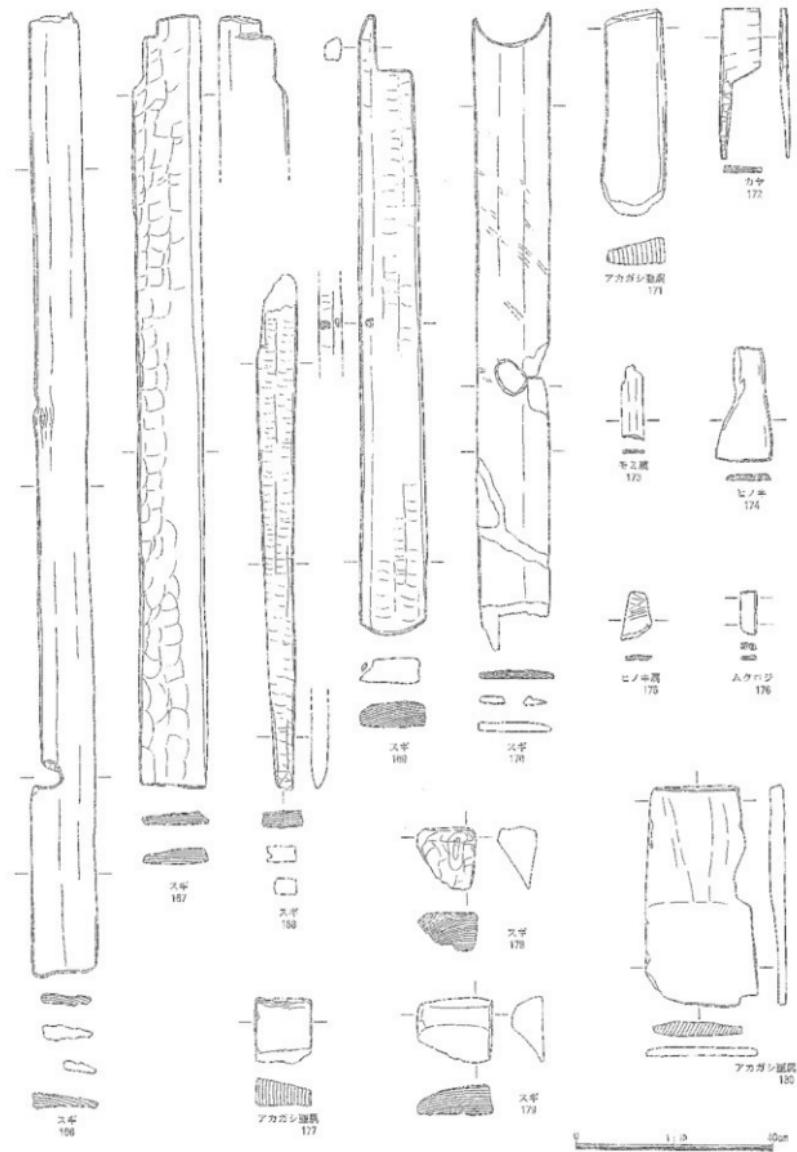
第1形 旧河床と遺跡と遺物



第16図 1区旧河邊出土遺物(木製品2)

图 7-4 1 台卧式注塑机示意图 (未装模)





第18図 1区古河遺跡出土遺物（木製品）

## 第2節 微高地の遺構と遺物

御殿川蛇行部微高地の調査区（2・3区）の遺構は、元々の掘削開始面を失い、覆土は、帰属年代による特徴の差違がほとんど認められていない。覆土中より遺物が出土しない場合や、細片で年代を特定し得ない場合も多く、また、本調査区で最も古期に位置付けられる弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が後世の遺構覆土に数多く混入している事実もあることから、年代が明らかでない遺構が数多く検出されている。その多くが土坑やその集団的な検出であり、埋納行為に伴うような完形・準完形の土器が出土していない土坑及び土坑群については、古代以降・特定時期不明のものとして取り扱う。

### 1 古代以降の遺構

#### 1号小土坑群（第21図 図版2）

G-5グリッド南部から6グリッドに位置する。小土坑の列がおよそN-11°-Wの方向で、3条並ぶ。西列は、5基、中列は、2基、東列は、4基の土坑の直線的な並びからなり、列の中の土坑の間隔に規則性は、認められない。各々の列間は、およそ1.8~2.0mの間隔が取られており、全体的な規模から、横列の並行と考えられる。

#### 2号小土坑群（第22図 図版6）

F-10グリッドに位置する。およそN-8°-Wを向く2×3間の掘立柱建物と同じくN-12°-Wを向く3×3間の掘立柱建物が重複しているとみられる。一部の土坑間に切り合い関係が発生しているが、新旧の特定は、出来ていない。

土坑底面及び覆土には、明確に柱を掘えた痕跡が観察されない。また、同じ列の土坑であっても、特に底面の高さに統一性は、認められていない。

北側2×3間の推定掘立柱建物の規模は、南北4.2m、東西4.6m。東列中央の土坑が設定されるべき箇所が空いていて、建物中央相当部に1基土坑が設置されている。

南側3×3間の推定掘立柱建物の規模は、南北5.4~5.9m、東西5.7~5.9mである。

#### SK1（現地略号SP19 第23図）

F-5グリッド南西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径50cm、検出面から底面までの深さは、35cmである。

#### SK2（現地略号SP4 第23図）

G-6グリッド北東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径35cm、検出面から底面までの深さは、28cmである。

#### SK3（現地略号SP3 第23図）

F-6グリッド北西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径32cm、検出面から底面までの深さは、28cmである。

2A区に分布するSK1~3は、平面径が比較的小さく、同じ調査区内の1号小土坑群を構成する個別の土坑と近似することから、同様の櫛坑を設置した小土坑として挙えることが妥当であろう。

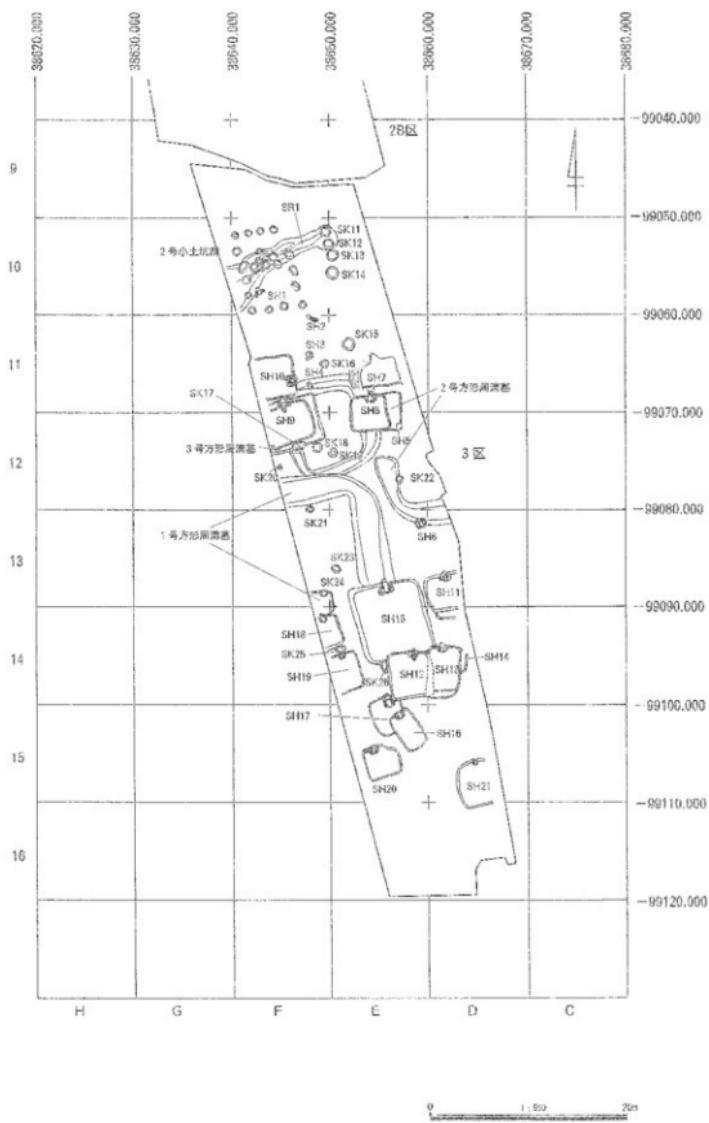
#### SK4（現地略号SF14 第23図）

G-8グリッド南西部に位置する。平面形は、楕円形を呈し、径104cm、検出面から底面までの深さは、20cmである。

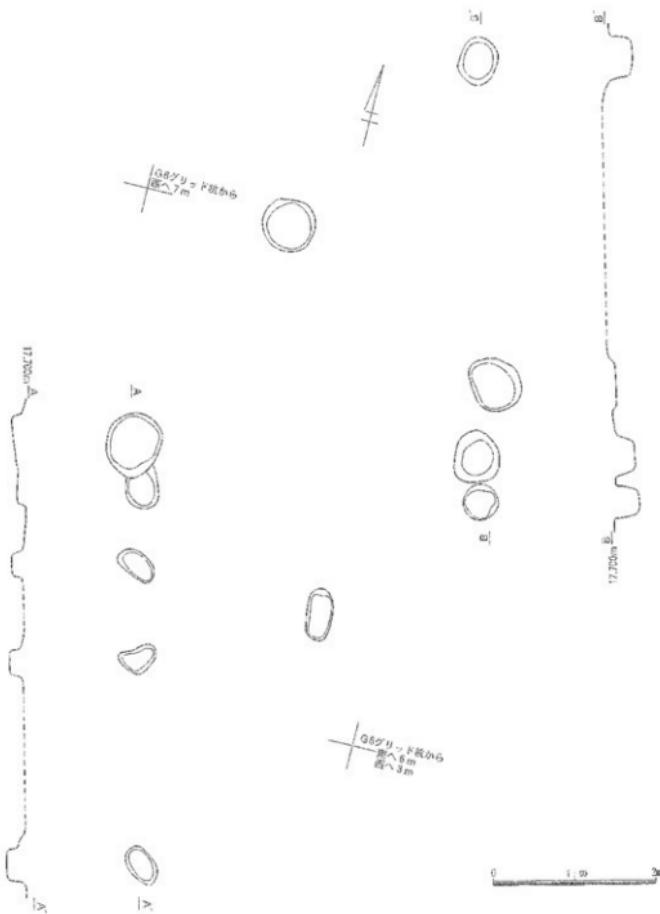
#### SK5（現地略号SF15 第23図 図版3）



第19図 青木原遺跡北半部地図



第20図 青木原流域南部灌漑配管図



第21図 1号小土坑群 平面・エレベーション図

G-8グリッド南西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径102cm、検出面から底面までの深さは、18cmである。

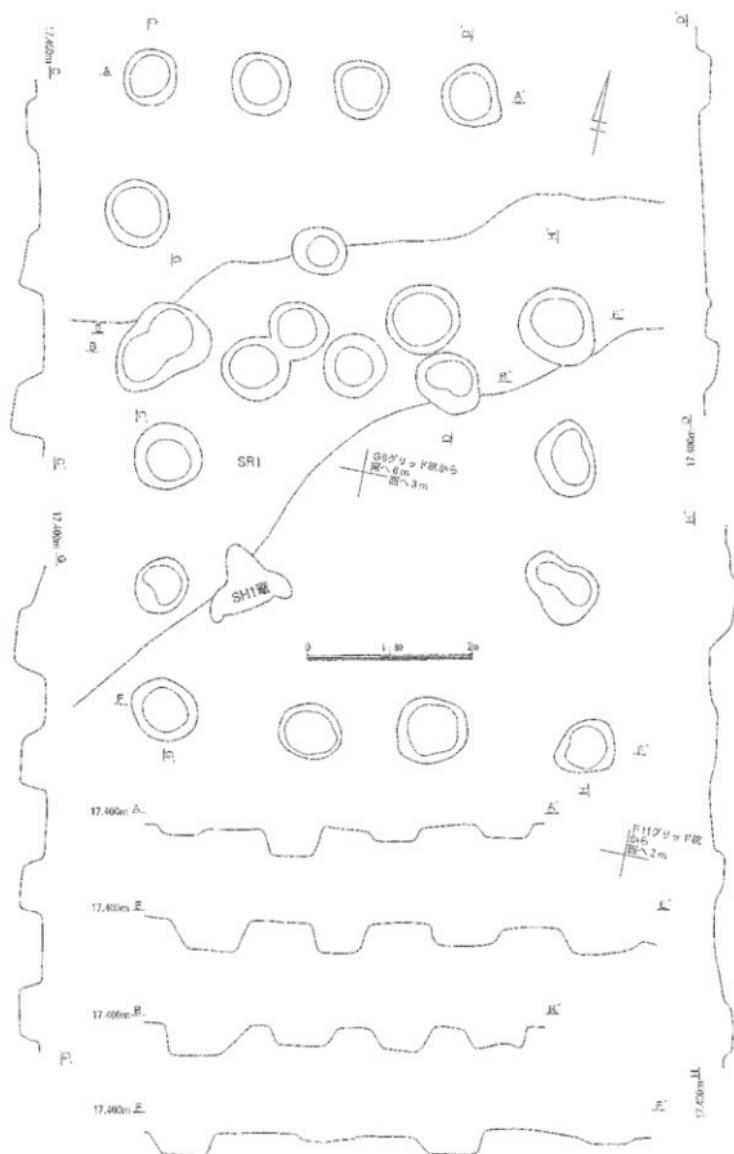
#### SK6 (現地略号SF17 第23図 図版3)

G-8グリッド中央部に位置する。平面形は、椎円形を呈し、径86cm、検出面から底面までの深さは、6cmである。

#### SK7 (現地略号SF21 第23図)

F-8グリッド南西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径83cm、検出面から底面までの深さは、6cmである。

#### SK8 (現地略号SF12 第23図 図版3)



第22回 2号小土塁群 平面・エレベーション図

F-8グリッド南東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径76cm、検出面から底面までの深さは、36cmである。

SK9（現地略号SF13 第23図 図版3）

F-8グリッド南東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径85cm、検出面から底面までの深さは、35cmである。

SK10（現地略号SF16 第23図 図版3）

E-8グリッド南西部に位置する。平面形は、梢円形を呈し、径150cm、検出面から底面までの深さは、21cmである。

SK11（現地略号SX2 第23図）

E-10グリッド北西部からF-10グリッド北東部に位置する。平面形は、方形を呈し、径98cm、検出面から底面までの深さは、15cmである。

SK12（現地略号SF8 第24図 図版5）

E-10グリッド北西部からF-10グリッド北東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径95cm、検出面から底面までの深さは、12cmである。

SK13（現地略号SF9 第24図 図版5）

E-10グリッド西部からF-10グリッド東部に位置する。平面形は、隅丸方形形を呈し、径115cm、検出面から底面までの深さは、6cmである。

SK14（現地略号SF7・28 第24図 図版5）

E-10グリッド西部からF-10グリッド東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径137cm、検出面から底面までの深さは、98cmである。比較的平面規模が大きく、古代の住居プランとの重複もないことから、掘削目的が井戸の可能性がある。しかし、土坑下位及び底面に溜水の痕跡は、確認されなかった。

SK15（現地略号SF18 第24図 図版5）

F-11グリッド北東部に位置する。平面形は、隅丸方形を呈し、径116cm、検出面から底面までの深さは、48cmである。

SK16（現地略号SF3 第24図 図版5）

F-11グリッド東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径84cm、検出面から底面までの深さは、43cmである。

SK17（現地略号SF10 第25図 図版5）

F-12グリッド東部に位置する。平面形は、梢円形を呈し、径117cm、検出面から底面までの深さは、26cmである。

SK18（現地略号SF19 第24図 図版6）

F-12グリッド東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径106cm、検出面から底面までの深さは、32cmである。

SK19（現地略号SF20 第24図）

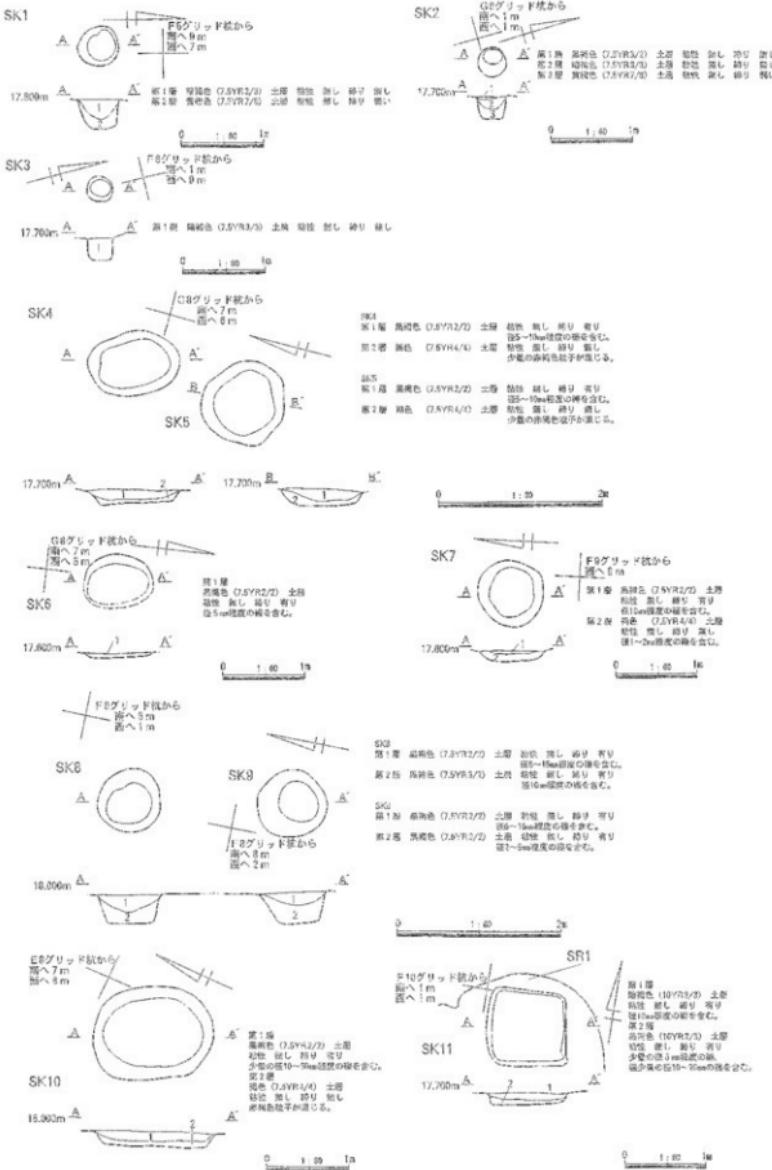
E-12グリッド西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径86cm、検出面から底面までの深さは、35cmである。

SK20（現地略号SF22 第25図 図版6）

F-12グリッド中央部に位置する。平面形は、円形を呈し、径47cm、検出面から底面までの深さは、12cmである。

SK21（現地略号SF1 第25図）

F-12グリッド南東部からF-13グリッド北東部に位置する。平面形は、梢円形を呈し、径101cm、検出



第23図 2区古代以降土坑SK1~11 平面面図

第2節 古面盤上の遺物と遺物

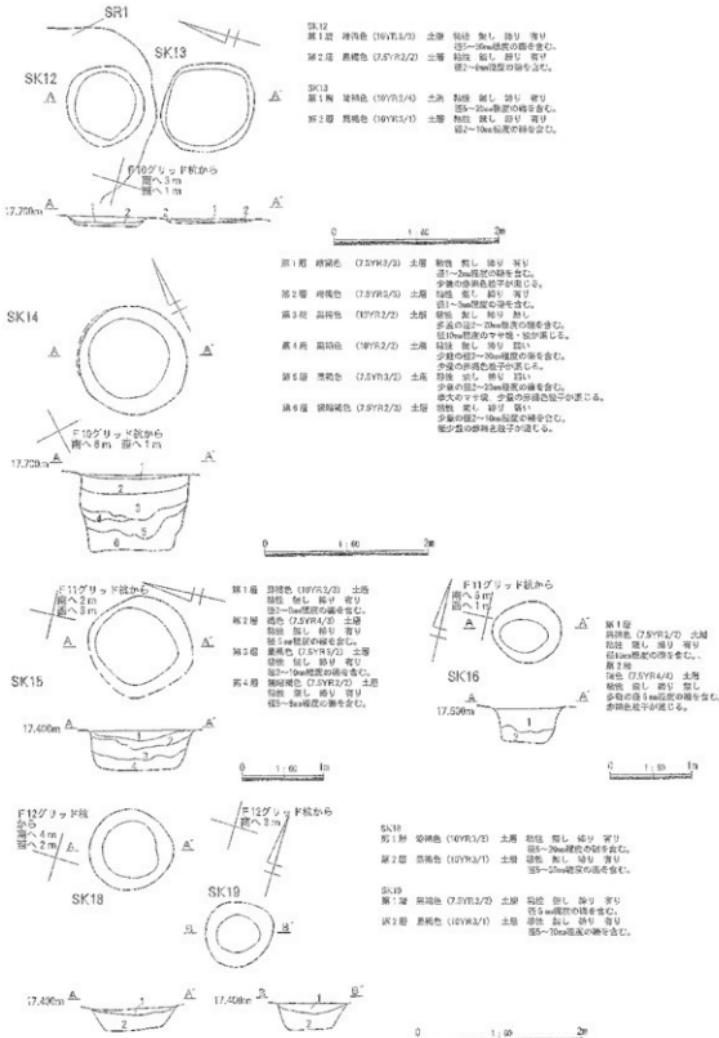
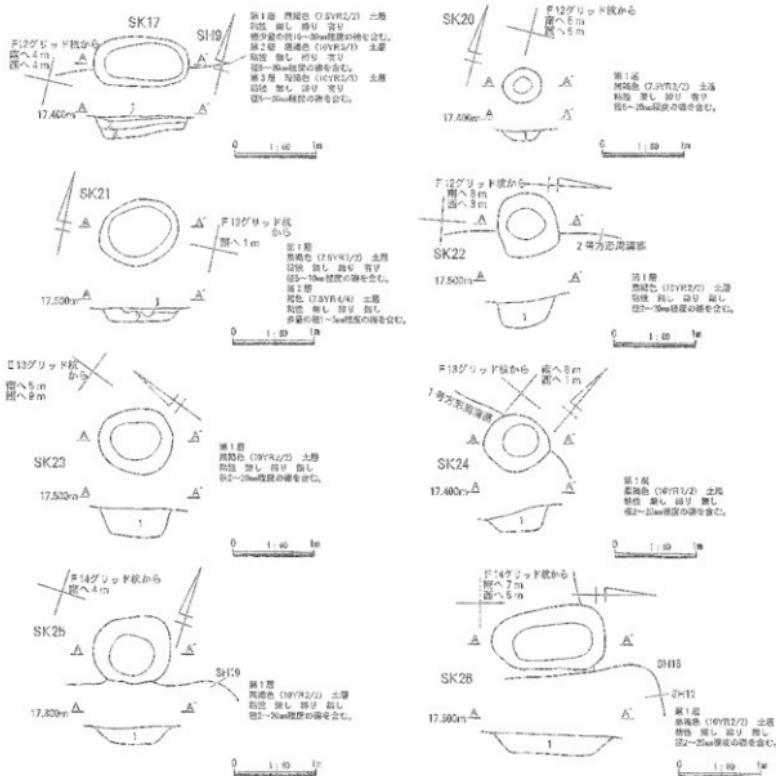


図24図 3区古代以降土坑SK12~16・18・19 平断面図

面から底面までの深さは、13cmである。

#### SK22 (現地略号SF40 第25図)

E-12グリッド南東部に位置する。平面形は、円形を呈し、径79cm、検出面から底面までの深さ、38cmである。



第25回 3区古代以降土坑SK17~26 平面図

## SK23(現地略号SF39 第25回)

E-13グリッド西部に位置する。平面形は、楕円形を呈し、径92cm、検出面から底面までの深さは、36cmである。

## SK24(現地略号SF36 第25回)

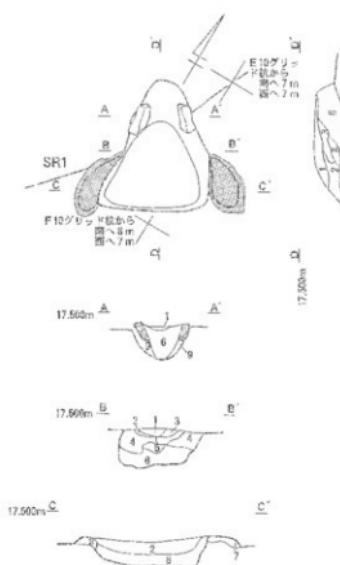
E-13グリッド南東部に位置する。平面形は、楕円形を呈し、径81cm、検出面から底面までの深さは、32cmである。

## SK25(現地略号SF37 第25回)

E-13グリッド西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径96cm、検出面から底面までの深さは、22cmである。

## SK26(現地略号SF38 第25回)

E-14グリッド中央部に位置する。平面形は、楕円形を呈し、径140cm、検出面から底面までの深さは、25cmである。



第1種 魔術色	(MVR2/3) 大腰	丸鉢	縦目	直し
第2種 黄褐色	(MVR12/3) 土器	盤	横目	直し
第3種 楽色	(MVR4/3) 土器	盤	横目	直し
第4種 茶褐色	(MVR2/3) 土器	盤	横目	直し
第5種 青褐色	(MVR5/3) 土器	盤	横目	直し
第6種 青褐色	(MVR6/3) 土器	盤	横目	直し
第7種 黄褐色	(MVR12/3) 大腰	盤	横目	直し
第8種 黄褐色	(MVR11/3) 土器	盤	横目	直し
第9種 魔術色	(MVR3/3) 土器	盤	横目	直し
第10種 魔術色	(MVR1/3) 土器	盤	横目	直し

第26図 SH1 窯 平面図

## 2 古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構と遺物

3区では、古墳時代後期から平安時代に比定される住居跡が合計21軒検出されている。当該調査区の北部は、南部に比べて後世の削平・擾乱の影響が大きく、残存する遺構掘方の深度が浅いこともあり、一部分のみの検出に止まつた場合も多い。

### SH1(現地略号SB13 第26図 図版7)

F-10グリッド南西部に位置する。現地調査では、一部の施設(窯)のみ把握され、住居竪穴の掘方・床面は、特定されなかった。

検出された窯は、北西を向き、黄褐色粘土によって、袖部が作られ、煙道部は、板状の2枚のマサ材を逆ハの字形に組み入れて側面を補強し、崩落を防いでいる。燃焼室の下面部は、厚く焼上層が発達し、煙道部のマサ材にも被熱による変色が及んでいる。

窯の袖部上、焚口側周辺より出土した土器の年代観より、10世紀後半以降に比定される。

### SH1窯周辺出土の遺物(第27図 図版4)

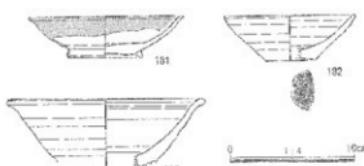
181は、東造系の灰釉陶器の高台壺である。見込み中央部に重ね焼きの結果生じたとみられる、底径にはば等しい円形の色調の違いが確認される。口縁部の内外に浸し掛けによって施釉がなされている。底部外面に回転条切痕を残す。比較的肥厚な底部周囲に貼り付けられた断面形三角形を呈する高台は、貧弱である。

182は、土師器の壺である。内外面ともに横位のナデ調整が施されている。底面には、回転条切痕が残る。

183は、土師器の脚高高台壺である。内外面ともに横位のナデ調整が施されている。

### SH2(現地略号SX7 第28図)

F-11グリッド北東部に位置する。住居施設(窯)の一部のみが残存。その内容は、窯構築材となる黄褐色粘土の集中と、煙道部の補強とみられる、掌大の土師器壺の破片が数枚並んで立った状態の検出で、住居竪穴の掘方・床面は、特定されない。



第27図 SH1 窯周辺出土遺物

竈の燃焼室に相当する箇所は、明らかでないが、土器片の並び(=煙道方向)から、竈は、東を向き、向かって右側(南側)を大きく失った状態と想定される。

残存していた粘土の分布幅より、(向かって左側の)竈の袖部から同じ構築材の粘土が連続し、住居裏壁に沿って、棚が設けられていたとみられる。

煙道部を作っていた土器の年代観より、10世紀前半に比定される。

#### SH2竈煙道部を作る土器 (第29図 國版24)

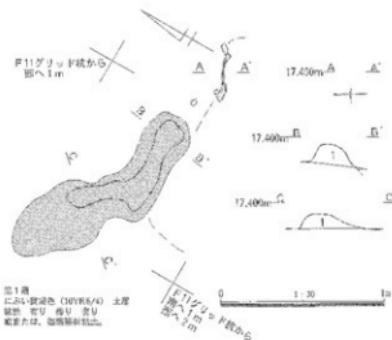
184～186は、いずれも土器器壁片である。184は、口縁～胴上位片である。元の十唇の器形は、幅狭の口縁部が外反し、胴部が筒形を呈するともられる。外面は、口縁が横位のナデ、胴部が縦位のハケ調整、内面は、横位のハケ調整である。185もまた、口縁～胴上位片である。元の土器の器形は、口縁部が外反し、胴部が膨らむともられる。内外面ともに横位のナデ調整がなされ、散漫にヘラナデが行われる。186は、胴下位片である。外面は、横位のナデ、内面は、縦位のナデ調整がされる。これらは、胎土、調整方法の差異より、各々別個体であると認識される。

#### SH3 (現地略号SX4 第30図 國版 )

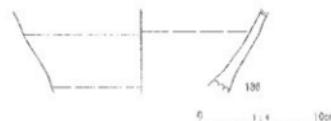
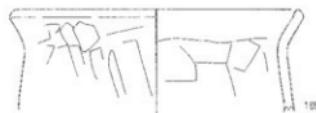
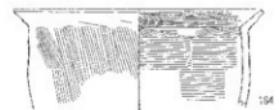
F-11グリッド東部に位置する。住居施設(竈)の一部のみが残存。焼成窯材となる砾、面取りされたマサ材と黄褐色粘土上の集中の検出で、当該地



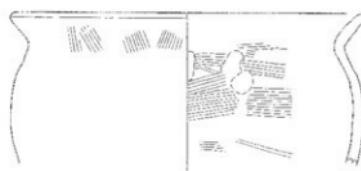
第30図 SH3 竈 平版面図



第28図 SH2 竈 平版面図



第29図 SH2 築内出土遺物



第31図 SH3 築内出土遺物

点において、下部掘込み、燃焼室を特定する焼土集中等の窓の具体的構造が分かる情報を得ることは、出来なかった。住居堅穴の掘方・床面もまた、特定されない。

### SH3窓周辺出土の遺物（第31図 図版24）

187は、灰陶陶器の高台环の体中位～高台部である。内外に漫し掛けによる施釉が認められる。底部外面は、回転ヘラ切りされている。比較的高い断面形三日月形を呈する高台が体最下位の底部際に貼付される。

188は、土師器の甕の口縁～胴中位である。外面は、口縁下位～頸部に継ぎ位のハケを施した後、口縁は、横位のナデ、胴部は、縦・横位の丁寧なナデ調整を行う。内面は、口縁は、横位のナデ、胴部は、横位のハケ調整を行う。一部、指頭圧痕・指ナデが残る。



第31図 SH4 窓 平断面図

面ともに横位のナデ調整。脛部外面は、斜位のハケ調整の後、同じ方向にヘラナデが行われる。脣内面は、輪積部分に指頭圧痕が並び、横位のナデ調整がなされる。

### SH4 (現地略号SX6 第32図)

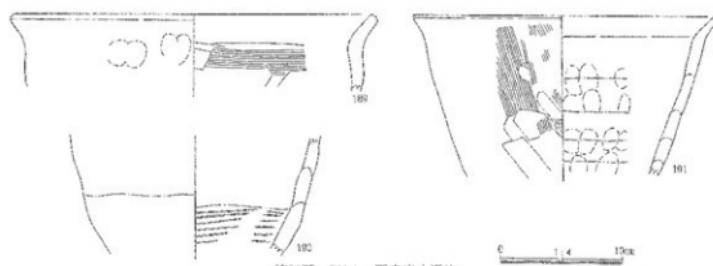
F-11グリッド南東部に位置する。住居施設（窓）の一部のみが残存。浅い南北方向に長軸を持った梢円形の掘り込みの下面部で焼土層が発達し、その上位に土器が落込み、掘込みの東側で焼土部の芯材と思しき扁平な跡が検出されている。

住居堅穴の掘方・床面は、特定されない。

出土した上器の年代観より、10世紀前半に比定される。

### SH4窓出土の遺物（第33図 図版24）

189は、土師器の甕の口縁～胴上位である。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整。頸外面上に指頭圧痕が残り、胴外面は、ナデ調整。頸内面は、横位のハケ、胴内面は、横位のナデ調整が行われている。190は、土師器の甕の胴中・下位である。外面、胴中位内面は、横位のナデ調整が行われ、胴下位内面は、横位にハケ状工具があてられた後、ナデ調整が施される。191は土師器の甕の口縁～胴下位である。口縁は、内外



第33図 SH4 窓内出土遺物

## SH5 (現地略号SB20 第34図 図版7)

E-12グリッド北部に位置する。住居施設（竈）の一部のみが残存。竈袖部の芯材、または、支脚となるうる面取りされた比較的幅広のマサ材が直立し、それを取り囲むように褐色粘土の集中が検出された。SH3同様、具体的な構造を復原する情報に乏しい。住居堅穴の掘方・床面は、特定されない。



## SH6 (現地略号SB16 第35図)

E-13グリッド北東部に位置する。一部の施設（竈）のみ把握され、住居堅穴の掘方・床面は、特定されない。

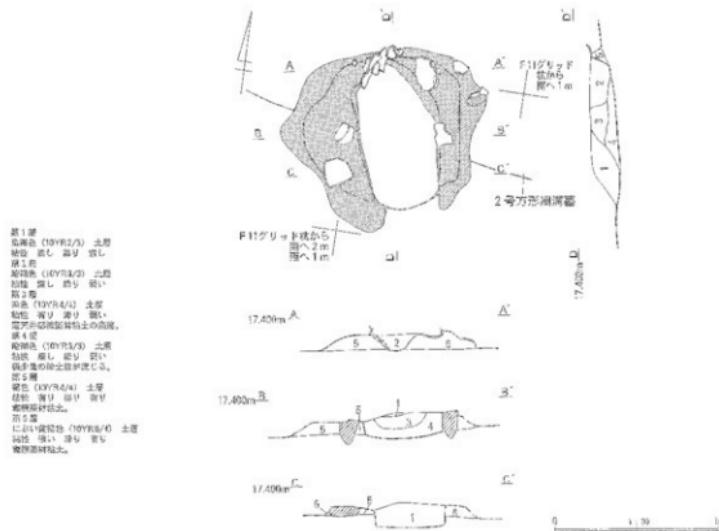
竈は、下端を尖らせ、地面に差し込むように固定して直立させたマサ材を約50cmの間隔に配して袖部の芯材とし、黄褐色粘土を被せ作っている。煙道相当部には、土師器壺片を並べて立てた補強が行われている。

竈堅道部を補強する土器の年代より、8世紀前半以前に比定される。

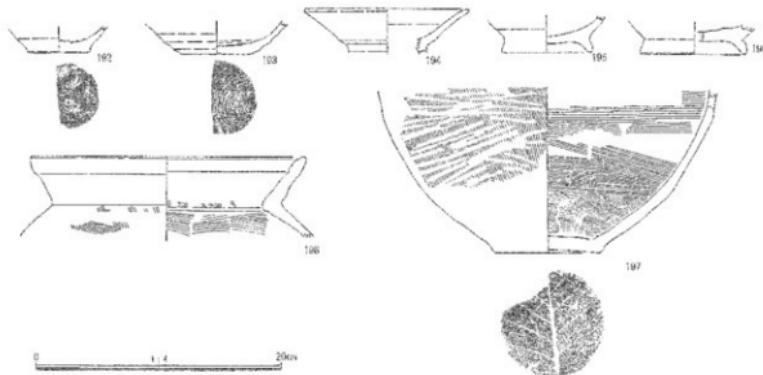
## SH6竈及び周辺出土の遺物（第36図 図版24）

192・193は、土師器の壺である。いずれも内外両面共に横位のナデ調整が施されており、192は、内面に3条の工具痕が認められる。

194～196は、土師器の脚高台壺である。196の外面は、丁寧な横位のナデ調整と高台の貼付けナデが残る。



第35図 SH6 竈 平断面図



第36図 SH 6 蔵内及び周辺出土遺物

197は、壇座部の補強し使用された土師器の断面である。腹部中位に相当する外面は、斜位にハケ調整が施した後、それに直交する方向にミガキ調整を行っている。下位は、ミガキ調整のみ施されている。底面部には、木葉痕が残る。内面側は、横位のハケ調整が施され、下位に進み、調整の密度が増す。

198は、壇の袖部の構築材粘土中から検出された土師器の腹の口縁～胴上位である。口縁部は、内外面とも横位のナヂ調整。復原口径は、22.4cmである。胴上位の外面は、斜位のハケ調整の後、粗いミガキ調整が行われている。内面は、横位のハケ調整である。197と198は、直接接合しないものの、胎土の様相、内面部の調整の共通性から、同一個体であった可能性がある。

SH6の壇の構築材となっている駿東型球腹壺は、8世紀中に終焉を向かえるのに対し、壇周辺で出土している环頬は、10世紀以降登場する底部に糸切痕を残すものや脚高高台环である。年代観の齟齬について、検出・確認されなかった遺構との重複が疑われる。

#### SH7 (現地略号SB-21 第37図)

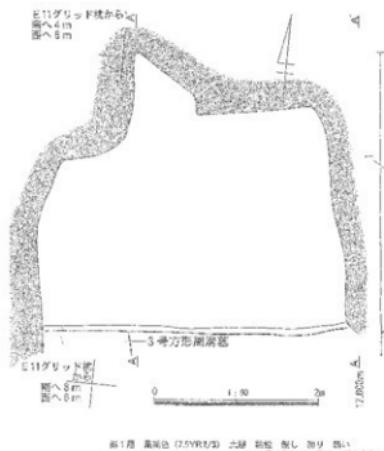
E-11グリッド北部に位置する。住居の北側の大部分が失われておらず、検出された内容は、南壁部と、その内側の一部に限定され、元々の形状・規模は、不明である。

掘方直上の一帯に黄褐色粘土による貼床が認められるが、その厚さは、非常に薄く、ほぼ掘方底面が床と同一視される。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

#### SH7出土の遺物 (第38図 図版25)

SH7は、残存する竪穴掘方そのものが非常に浅かったため、上方の擾乱層中に含まれていた遺物と、床直上出土遺物との分離が現地調査の段階で徹底出来ていない。よって、以下に記す遺物同士の年代観には、齟齬が生じている。



第37図 SH 7 平断面図

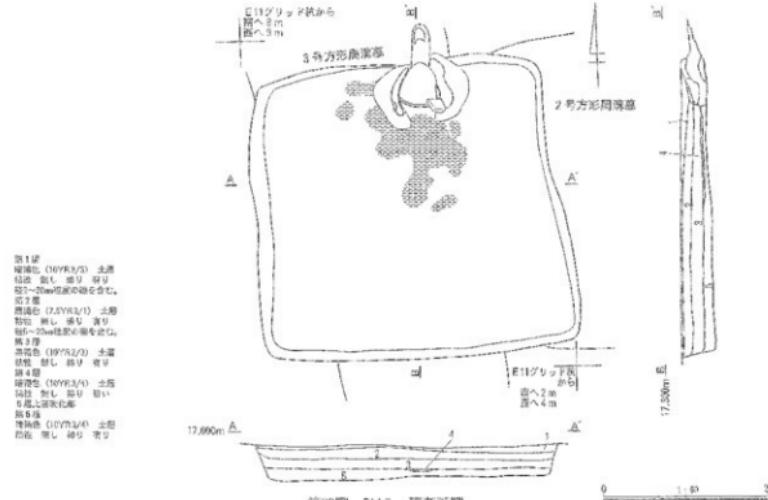
199は、8世紀代に比定される須恵器の壺の口縁～底部である。内面及び、口縁～体下位は、横位のナデ調整がされ、底面は、ヘラ切りされている。

200は、土師器の薄手の壺の口縁～胴上位である。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整が行われているが、外面下位は、その前段階に縦・斜位のハケ調整が行われている。胴上位の外面は、横位のミガキ、内面は、横位のハケ調整である。

201は、羽釜の羽部である。周辺痕跡の出土実績より、11世紀以降に比定される。



第38図 SH7 出土遺物



第39図 SH8 平面図

#### SH8(現地略号SB-17 第39・40図 図版7・8)

E-11グリッド南部から12グリッド北部にかけて位置する。

住居空穴の平面形は、南北長3.6m、東西長3.7mのほぼ方形を呈し、北壁中央部に竪孔を有する。

竪孔は、マサ材を約50cmの間隔に配して袖部の芯材とし、褐色粘土を被せて作られている。

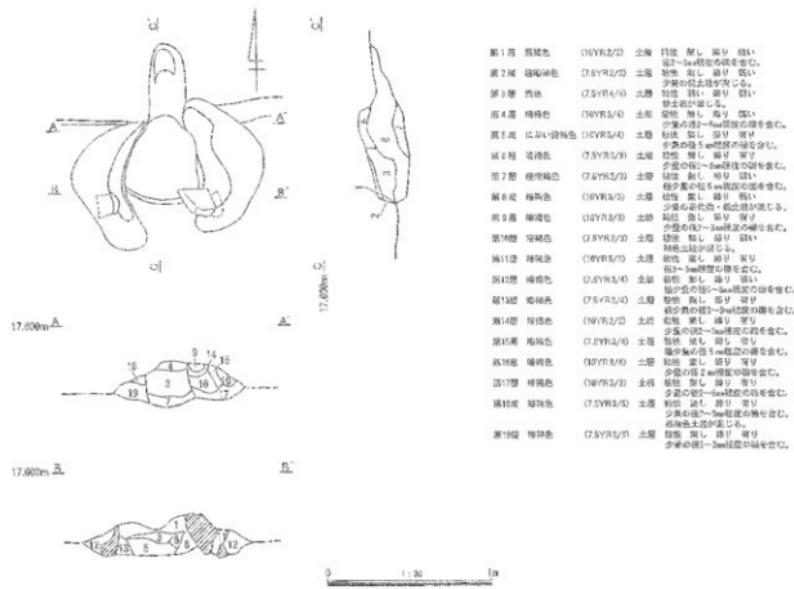
床は、竪の前面部で硬化面の分布が検出されている。周縁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

図示していないが、竪内より、外面にミガキ調整が施された駿東型壺片が出土したことから、8世紀前半以前に比定される。

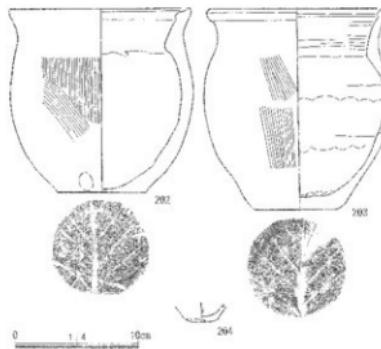
#### SH8出土の遺物(第41図 図版25)

202・203は、土師器の小型壺の口縁～底部である。ともに外面の剥落が著しい。石英ほか、径1mm程度の白・有色粒子を多量含む胎土、胴部外面の一部に残存する縦・斜位のハケ調整の痕跡、底部の木葉痕、器内面の横位のハケ調整等、製作に関わる項目内容の多くが共通しているが、203の口唇部は、受け口状であり、203の口唇部は、わずかに内側に突出している。

204は、土師器のミニチュア土器の肩下位～底部である。丸味を帯びた底部の中央に凹みがつけられている。肩下位外縁の調整は、ミガキ、内面は、ハケ状工具で調整した後、ミガキを施している。



第40図 SH 8 墓 平断面図



第41図 SH 8 出土遺物

燃焼室内の下面は、焼土層が発達しており、竈の中心軸から向かって左側（西側）に外れた箇所にマサ材を棒状に加工した支脚が起立している。

この前段階の住居の貼床面の高さは、大きい竈穴の深方底面の高さとほぼ同一であり、平面的な竈の設定位置も最新段階と重複することから、この段階で拡張があったことが窺える。

竈は、最新段階の竈の下に掘込みを残すのみであるが、主軸の方向に変化は、認められない。

#### SH9（現地略号SB-14 第42・44図 図版8・9）

F-11グリッド南部から12グリッド北部にかけて位置する。北側でSH10と重複し、これを切る。

平面的に重複する大小の方形竈穴、黄褐色粘土による貼床の重なり、竈の移築の痕跡等から、最低3段階の変遷を想定することが出来る。

調査区境界により、西側の状況が不明であるが、最も新しい段階の住居竈穴の平面形は、東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。南北長は、5.2mである。北壁（推定）中央部に竈を有し、床には、薄く黄褐色粘土が貼られている。

竈は、板状のマサ材を約80cmの間隔に配して袖部の芯材とし、黄褐色粘土を被せて作られている。

燃焼室の下面は、焼土層が発達しており、竈の中心軸から向かって左側（西側）に外れた箇所にマサ材を棒状に加工した支脚が起立している。

この前段階の住居の貼床面の高さは、大きい竈穴の深方底面の高さとほぼ同一であり、平面的な竈の設定位置も最新段階と重複することから、この段階で拡張があったことが窺える。

竈は、最新段階の竈の下に掘込みを残すのみであるが、主軸の方向に変化は、認められない。

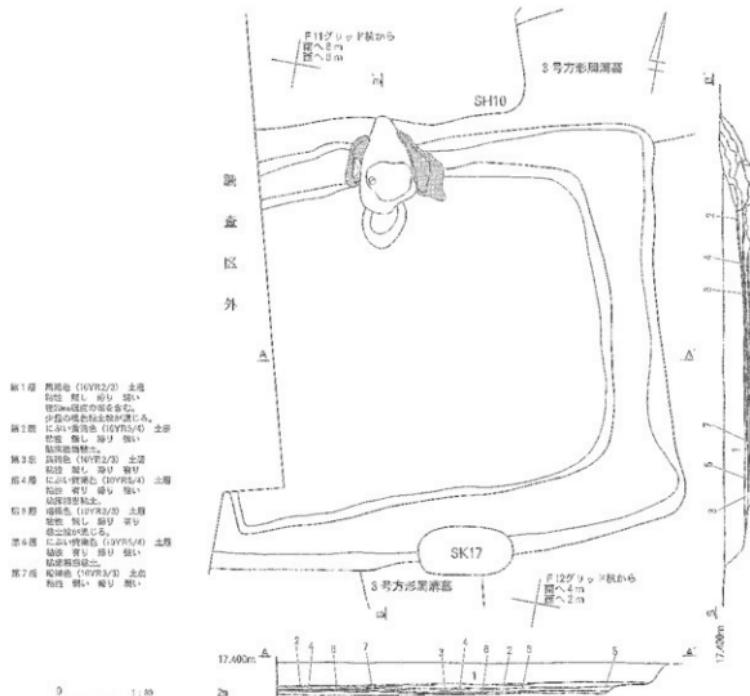


図42図 SH 9 平断面図

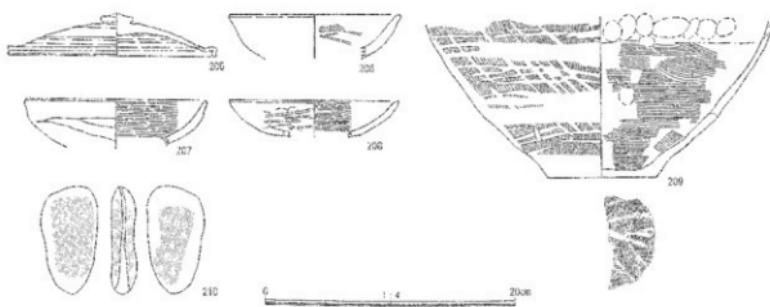
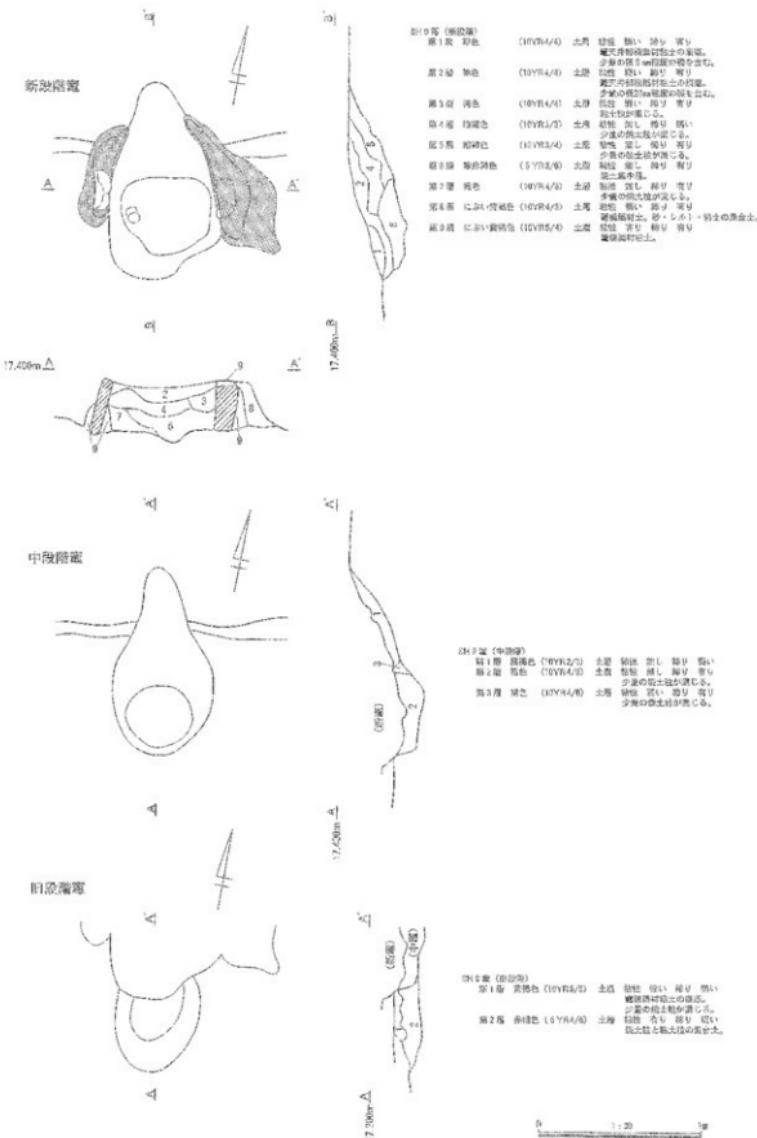


図43図 SH 9 出土遺物

最も古い段階の住居窓穴の平面形は、南北長4.0m、東西長4.7mの長方形を呈する。後2段階の住居と同様、北壁中央部に竈を有し、黄褐色粘土の貼床が認められる。

竈跡は、燃焼室部に相当する壁所の焼込みが残存し、発達した焼土層の上に崩された竈構築材の一部



第44図 SH-9 線 平面圖

とみられる黄褐色粘土塊が被っていた。

いずれの段階でも明らかな周溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した上器の年代観より、8世紀前半以前に比定される。

#### SH9出土の遺物（第43図 図版25）

205は、須恵器の环底の摘～縁部である。摘部は、扁平な宝珠形。外面は、体上位に横位のヘラケズリ、体下位にナデ調整が施され、自然釉が付着する。内面は、ナデ調整であるが、天井部にハケ工具尖端を1回転させた痕が残る。

206～208は、土師器の丸底の环である。いずれも内面に横位のミガキ調整がされる。206の外面は、体中位以下で大きくヘラケズリにより整形した後、口縁を含め、ナデ調整が行い、釉を取り去っている。

207・208は、体中位以下に横位のヘラケズリが行われた後、口縁も含め、横位のミガキが施される。

209は、土師器の壺の胴中位～底部である。竈燃室窓室内から出土した。窓部外面は、縱位のハケ調整の後、横位のミガキが施され、底面には、木葉痕が残る。内面は、横位のハケ調整が施されており、胴中位には、並んだ指頭圧痕が残る。

210は、扁平の燧石円錐を素材とした石製品である。裏裏の広面に摩滅痕が認められる。

#### SH10（現地略号SB-18 第45・46図 図版10）

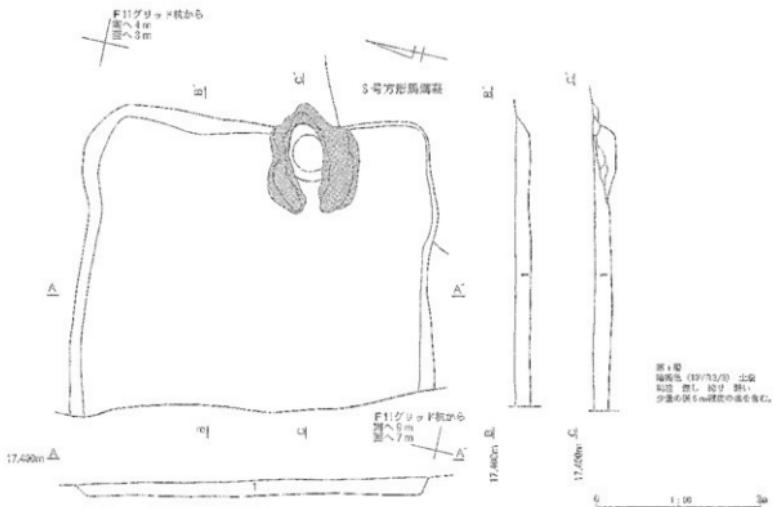
F-11グリッド中央から南部にかけて位置する。南側でSH9と重複し、これに切られる。

調査区境界により、西側の状況が不明であるが、住居跡穴の平面形は、方形を呈すると推定される。南北長は、4.2mである。東壁中央やや南寄りに窓を有す。

貼床、硬化面の分布は、認められず、掘方底面がそのまま床面に相当すると考えられる。

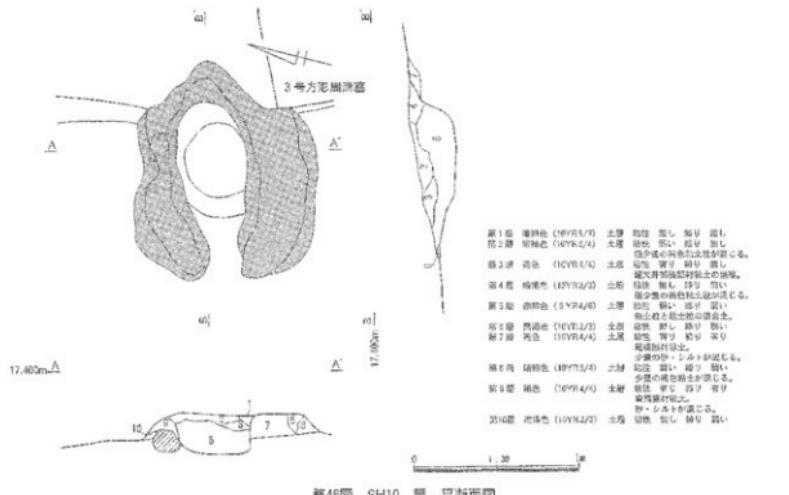
竈は、向かって左側（北側）の袖部でマサ材を芯材として用い、褐色粘土を被せて作られている。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

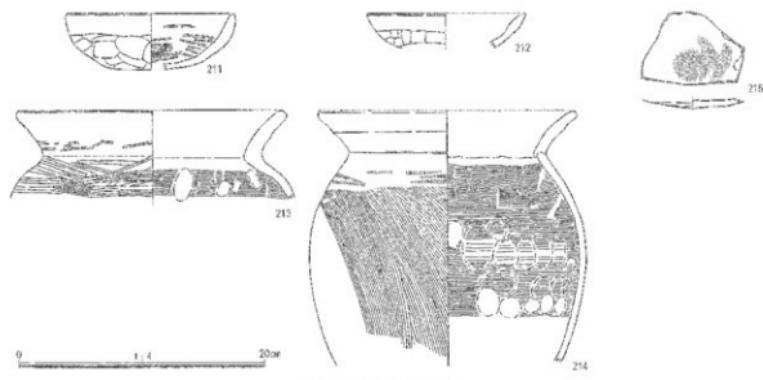


第45図 SH10 平断面図

第23図 遺物坑の遺物と遺物



第46図 SH10 墓 平面断面



第47図 SH10 出土遺物

出土した土器の年代観より、7世紀末～8世紀前半に比定される。

#### SH10出土の遺物（第47図 図版25）

211・212は、土師器の丸底の杯の口縁～底部である。212が胎土に石英他、白色粒子を含み、全体的色調が赤味を帯びるのに対し、211は、白色粒子をわずかに含み、黄味を帯びる。ともに外面の調整は、口縁～体上位は、横位のナデ、体中位～底部は、横位のヘラケズリであるが、1回あたりの調整幅は、212の方が細かい。211の内面は、横位のミガキ調整、212の内面は、ナデ調整である。

213・214は、土師器の瓶の口縁～腹部である。胎土の内容は、213と211、214と212がほぼ同じである。共通する残存箇所の調整方法について、口縁部は、内外面とも横位のナデ、頸～胴上位外面は、横位のミガキ、胴内面は、横位のハケが施され、一部指頭圧痕が認められる等、差違は、みられないが、<sup>25</sup>

壁は、213が214に比べ厚手であり、系統の違いが窺える。214の調査外面は、斜位のハケ調整の後、縦位のミガキが施されている。

215は、須恵器の柄の底部を素材とした転用硯である。元の土壁は、高台より、底部が突出する壺形とみられる。内面中央部で、土器製作時の機械回転で生じた渦巻き状の凸部を潰すようにして、摩滅面が発達する。

#### SH11（現地略号SB-7 第48・49図 図版9）

D-13グリッド南部から14グリッド北部にかけて位置する。

豎穴の拡張、床面の認識、窓の改築の痕跡等から、最低2段階の姿遷を想定することが出来る。

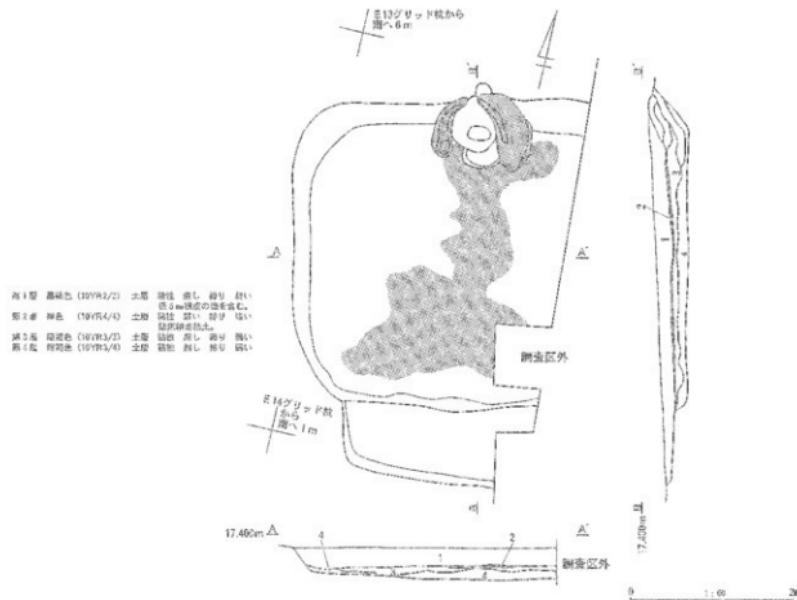
調査区境界により、東側の状況が不明であるが、最も新しい段階の住居窓穴の平面形は、長方形を呈すると推定される。南北長4.7mで、北壁中央部に竈を有す。

床は、古い段階の住居の掘方内に相当する範囲では、褐色粘土が貼られ、この貼床とほぼ同じ高さを底面とした掘方が南側へ拡張されている。

竈は、褐色粘土を用いて袖部を作る。

古い段階の住居は、拡張前の豎穴掘方をその範囲とし、平面形は、方形を呈していたとみられる。南北長8.8mである。窓は、新しい段階の住居に付属する窓のはば真下で、埋め立て土（住居覆土3層）を挟み、構築材となるマサ材、黄褐色粘土、掘込みが検出されている。

床に相当する、硬化面、貼床は、検出されなかった。住居覆土堆積状況から、新しい段階の住居の床面を作る埋め立ての際に壊されたものと考えられる。

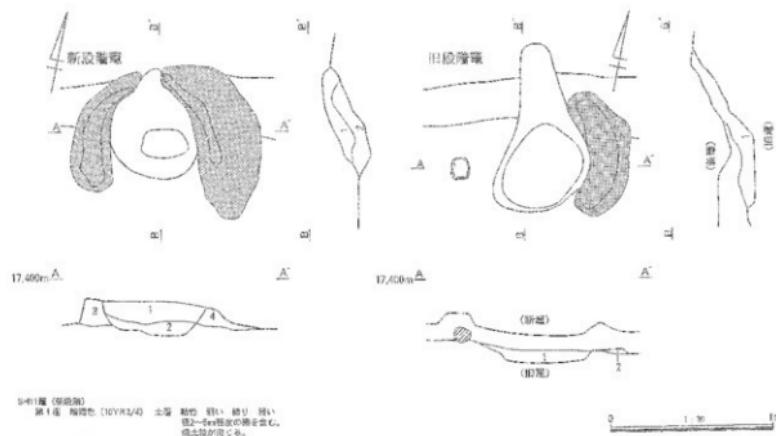


第48図 SH11 平面図

第2節 壁面地面上の施様と施物

いずれの段階でも周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

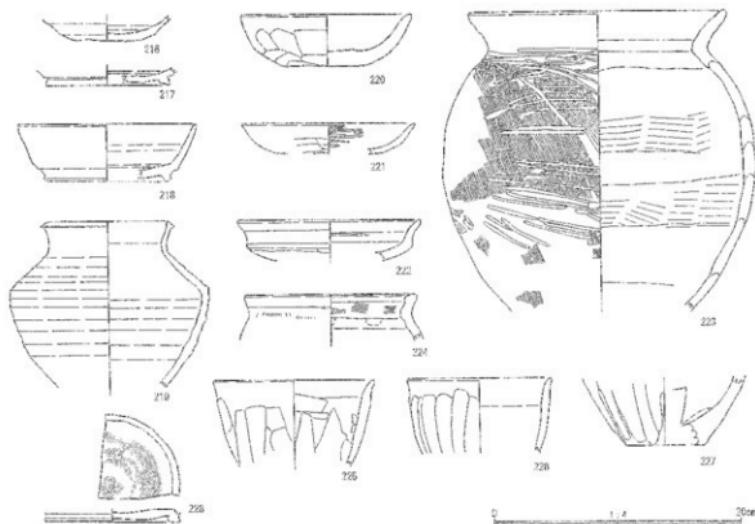
出土した土器の年代観より、8世紀前半に比定される。



SH11層(壁面地)  
第1段 極褐色(10YR3/4) 土質 粘物 目立 繊り 細い  
包丁跡や骨頭の跡を含む。  
既に壁が完成している。  
第2段 黒褐色(10YK1/2) 土質 粘物 繊り 繊り 細い  
柱穴痕 繊り 繊り 細い  
既に壁が完成している。  
第4段 黑色(10YR4/4) 土質 粘物 有り 繊り 細り  
瓦礫の混入。

SH11層(壁面地)  
第1段 に赤い青褐色(10YR5/4) 土質 粘物 有り 細り 細い  
既に壁が完成している。  
第2段 黑褐色(10YR3/4) 土質 粘物 繊り 繊り 細り  
既に壁が完成している。

第40図 SH11 壁 平断面図



第50図 SH11 出土遺物

## SH11出土の遺物（第50図 図版26）

216は、須恵器の环の体下位～底部である。内面及び、体下位外面は、ナデ調整、体最下位は、横位のヘラケズリにより整形され、底面の腰輪切り難しは、ヘラ切りによってなされている。

217・218は、須恵器の高台环である。217は、体下位～高台の一部が残存しており、高台の断面形は、長方形、内面及び、体下位外面は、ナデ調整で、底面は、ヘラ切りされている。218は、口縁～高台の一部が残存しており、高台の断面形は、逆台形、内面及び、口縁～体下位外面は、ナデ調査されている。

219は、須恵器の肩部の屈折が発達した広口壺の口縁～胴中位である。口唇部は、外側に折り返され、断面形三角形を呈す。胴中位以下外面で横位のヘラによる整形が行われるほかは、内外面ともにナデ調査が施されている。口唇部及び肩部に広く自然縫が付着する。

220～222は、土師器の环である。220は、口縁～底部が残存している。全体的に丸底の器形を呈しているが、底部に平坦面がある。内面側に盛り上がりがあることから、自重によりつぶれて出来たものとみられる。内面及び口縁～体上位外面の調整は、ナデ、体中位以下は、横位のヘラケズリが行われている。221は、口縁～胴下位が残存している。220に比べ薄手で硬質感がある。内面及び口縁～胴上位外面は、横位のナデ、胴中位以下は、横位のヘラケズリの後、全体的に横位のミガキが施されている。222は、口縁が外反し、体部に突出部を持つ器形で、口縁～胴下位が残存している。内面及び口縁～胴上位外面は、横位のナデ、一部赤彩されている箇所が残り、胴中位以下は、横位のヘラケズリが施される。

223は、土師器の壺の口縁～胴下位である。口縁は、内外面ともに横位のナデ調整で、胴外面は、斜・縦位のハケ調整の後、横・斜位のミガキが施される（頸・胴最上位と胴中位やや下方に施された横位のミガキ調整が著しい）。胴内面は、残された輪襯痕の単位毎に調整が異なり、上位側は、横位の粗いハケ調整を行っている段が目立ち、下位側は、（前段階にハケ調整を行い、それを消した場合も含め）ナデ調査を行っている段が重なる。

224は、土師器の小型壺の口縁から胴上位である。口唇部は、わずかに凹みながら内側へ突出して受け口状の形を作る。外面の調整は、横位のナデであるが、前段階に斜位のハケ調整がされていた痕跡が認められる。内面は、口縁が横位のハケ調整、胴上位に指頭圧痕が残る。

225・226は、土師器の筒形をした壺または、壺の口縁～胴中位である。ともに胴外面が縦位のヘラケズリにより整形されている。225の口縁は、内外面ともに横位のナデ調整、胴内面には、ヘラの痕が残る。226もまた、内外口縁及び胴上位内面は、横位のナデ調整が施されている。227は、壺の胴下位～底部で、225・226同様、胴外面は、横位のヘラケズリがなされている。平底で、内面には、ヘラの痕が残る。

228は、須恵器の高台环の体部以上を意図的に取り去り、残った底部を素材とした転用器である。内外両面に各々磨耗痕が認められる。元の高台环の内面は、ナデ調整、高台は、幅広でやや外側に開き、底面は、ヘラケズリされている。

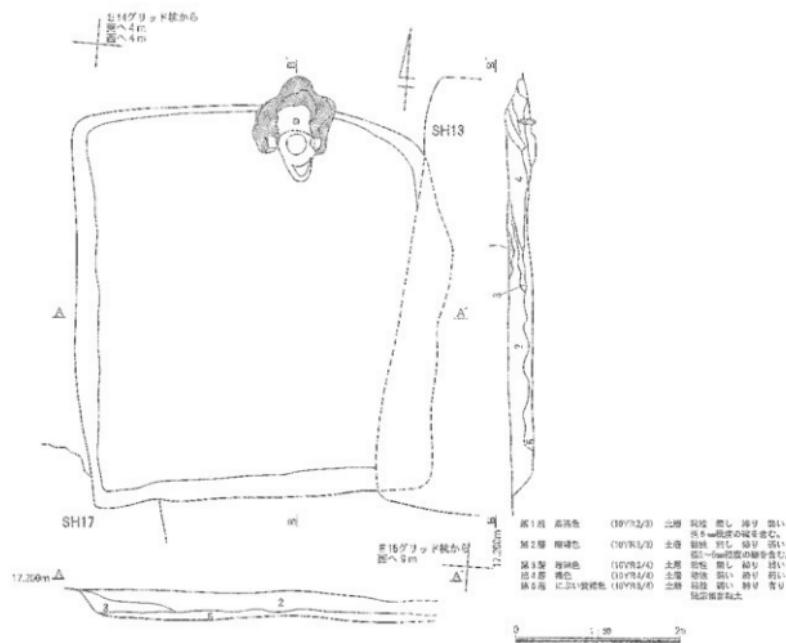
## SH12（現地略号SB-6 第51・52図 図版10）

D-14グリッド南部からE-14グリッド南部に位置する。北側でSH15と、南西側でSH17と重複し、これらを切る。東側でSH13と重複するが、前後関係は、特定出来なかった。

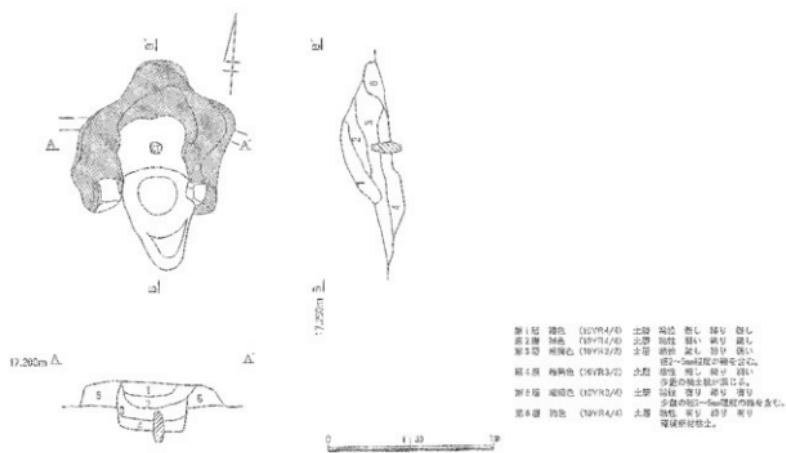
住居壁穴の平面形は、南北長4.8m、東西長4.6mのほぼ方形を呈し、北壁中央やや東寄りに竈を有する。床は、比較的堅い黄褐色粘土（住居覆土5層）が広く貼られている。

竈は、面取りしたマサ材を約50cmの間隔に配して袖部の芯材とし、褐色粘土を被せて作られている。焼成室内の下面は、焼上層が発達しており、竈の中心軸上にマサ材を棒状に加工した支柱が起立する。

竈燃焼室内で、土師器壺（球胴壺）胴部片と正位2個体の环（第53図234・235）が出土している。ま



第51回 SH12 平板面圖

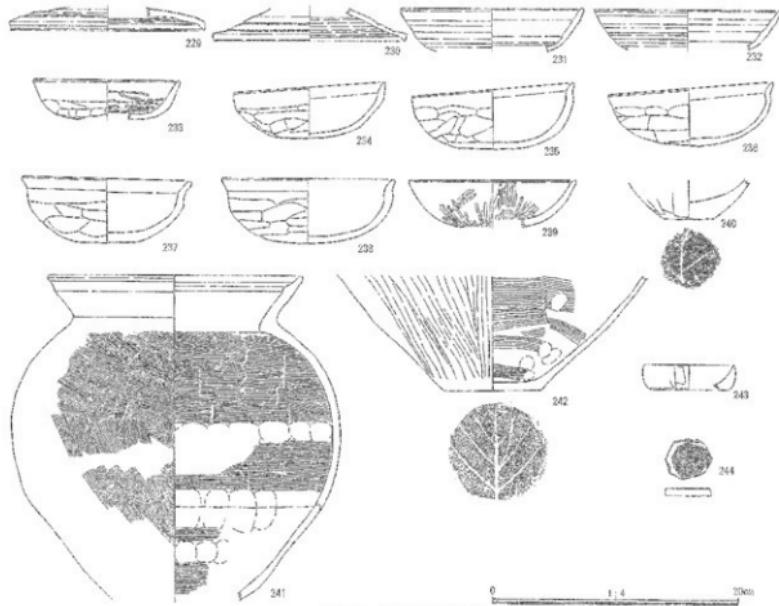


第52圖 SH12 車 平齊面微

た、焚口に相当する箇所では、掌大の土師器裏脣部片が敷かれたように並べられていた。焼窓室内の土器は、発掘絶時に納められた、祭祀用容器の可能性が指摘出来る。また、竈に対し、向かって左側（西側）では、正位で卓抜のもの（第53図236）と逆位で二つ重ねられた壺（第53図上237・下238）が並んで出土している。

周壁溝、往穴底は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、8世紀前半に比定される。



第53図 SH12 出土遺物

#### SH12出土の遺物（第53図 図版26）

229・230は、須恵器の壺蓋縁部である。ともに外面の上部は、横位のヘラケズリ、下部は、横位のヘラナデ、内面は、ナデ調整している。230の外面に2条、尖端の鋭い工具により施された沈線が巡る。

231・232は、須恵器の壺の口縁から体下位である。ともに口縁から体中位は、ナデ、体下位は、横位のヘラケズリ、内面は、ナデ調整している。232は、外面に自然縫が付着する。

233～238は、土師器の丸底の壺である。いずれも外面の調整は、口縁～体上位は、横位のナデ、体中～底部は、横位のヘラケズリを基本としており、234と237は、底面にナデの痕跡が確認される。内面の調整は、口縁～体上位は、横位のナデ、体中下位は、ヘラミガキ、底部は、ナデである。

239は、上部器の高杯の壺部である。外面の調整は、縦・斜位のミガキ、内面の調整は、縦位のミガキである。古墳時代前期に比定される遺物の混入である。

240は、土師器の壺の洞下位～底部で、外面の調整は、縦位にハケのちへラミガキ、内面は、横位のハケ調整が施されている。

241は、土師器の壺の口縁～洞下位である。このうち、洞部部分が壺内に入っていた。

242は、土師器の窓の胴下位～底部で、胴下位外面の調整は、縦位のヘラケズリ、底面に木葉痕、内面は、丁寧なナデである。口縁部は、内外面ともに横位のナデ、胸部の外面は、斜位のハケ、内面は、横位のハケ調整が施される。

243は、土師器の体部が若干膨らむ浅いミニチュア土器で、外面は、ヘラケズリ、内面は、ナデ調整が行われている。底面に木葉痕が残る。

244は、土師器の壺の銅部破片の周囲を意図的に折り取って作成された円盤である。元の土器の外面は、ハケのうちへラミガキ封緘が行われ、内面には、指頭圧痕が残る。

SH13 (現地略号SB-10W 第54・55図 図版11)

D-14グリッド南西部に位置する。東側でSH14、北東側でSH15と重複し、これを切り、西側でSH12と重複するが、前後関係は、不明である。

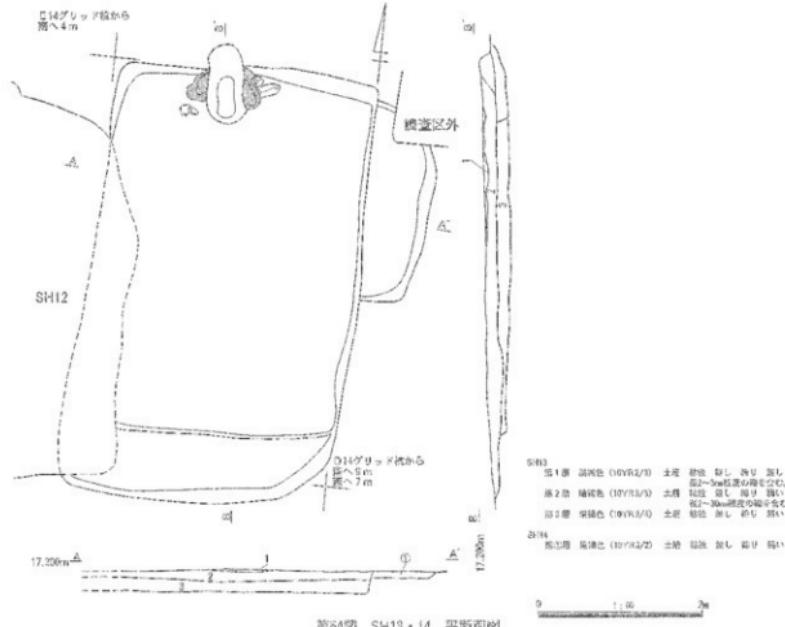
住居竪穴の平面形は、南北長5.3m、東西長3.2mの長方形を呈し、北壁土穴や西寄りに竪を有する。

明確な貼床、硬化面は、確認されないものの、覆土第3層上面部が比較的水平になっており、遮物検出量も比較的多いことから、床面と目される。

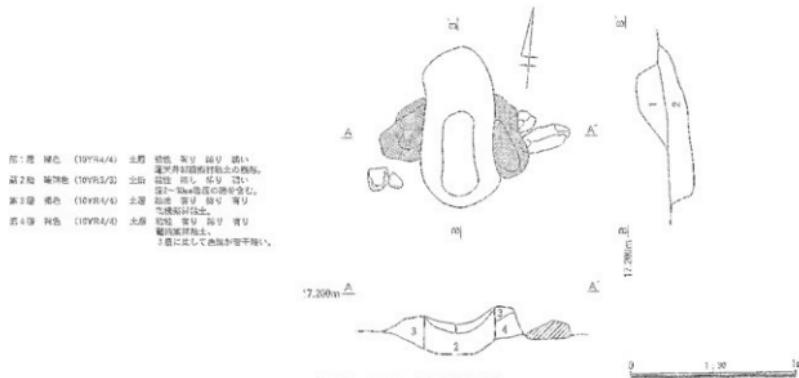
窓は、向かって左側(西側)に面取りしたマサ材、右側に扁平な並角礫を配して袖部の芯材とし、複色粘土を被せ作られている。

SH11同様、住居の南側で、床相当面と同じ高さに底面がある掘方が延びているため、住居堅穴の掘強があったことを窺わせるが、竈の改築、床の貼り替え等の所見は、得られなかった。

出土した土器の年代観より、8～9世紀に比定される。



第54回 SH13・14 平野面見



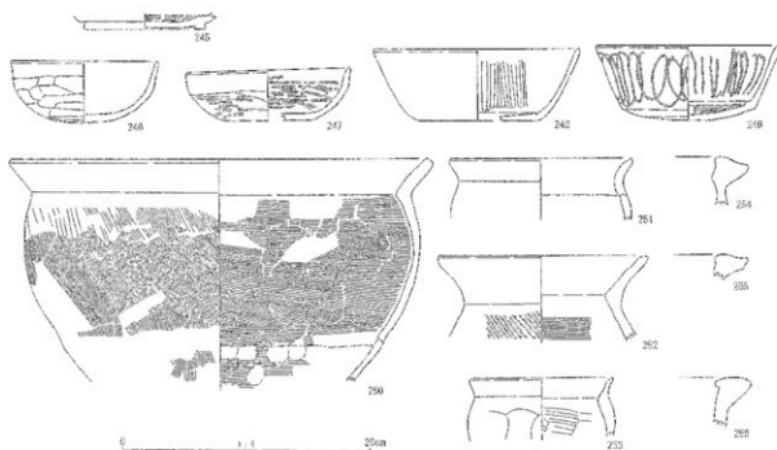
SH14(現地略号SB-10E 第54図)

D-14グリッド中央部に位置する。西側でSH13と重複し、これに切られる。

検出部の南北長は、2.4mであるが、他の遺構と切り合ひ、調査区境界により、住居堅穴の具体的な規模、平面形は、不明である。

貼床、硬化面の分布は、認められず、掘方底面がそのまま床面に相当すると考えられる。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。



第56図 SH13 出土遺物

#### SH13出土の遺物（第56図 図版27・28）

245は、須恵器の高台の体下位～高台部である。器底面は、回転ヘラ切りされている。高台の断面

形は、台形、内面及び、体下位外面は、ナデ調整されている。

246～249は、土師器の坏である。246・247は、丸底で、体上位以下の外面を横位のヘラケズリで整形する。内面及び口縁外面に横位のナデ調整を施した後、246は、体内面、247は、体内外両面に横位のミガキ調整を行う。248は、いわゆる甲斐型坏の口縁～底部で、外面は、横・斜位のミガキ調整で、底面もまた、丁寧に磨かれている。内面は、横位のミガキ調整の後、強いヘラミガキにより底部と体部の境界をつけ、底部中央から放射状の暗文を施す。249もまた、他地域からの搬入品と推定される。内面では、制作時に体部と底部間の接合調整を徹底しないで、凹みを残し、境界線を作っている。口縁～体下位外表面は、横位のナデ調整の後、精円暗文が施され、底内面には、放射状の暗文が施される。底外表面は、中央に径25mm程度の平坦面を残して丁寧なヘラケズリ調整を行い、浅い丸底を作る。

250～252は、土師器の壺・壺である。250は、壺で口縁～胴下位が残存する。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整で、肩部外面は、斜・縦位のハケ調整がされた後、頸部～胴上位に横位のヘラナデが加えられている。胴内面もまた、横位のハケ調整の後、部分的にヘラナデが加えられている。251・252は、壺で口縁から胴上位が残存する。251は、内外面ともに横位のナデ調整が行われている。252の口縁は、内外面ともに横位のナデ調整。胴上位は、内外で工具を換えて、外面は、粗目のハケを斜位に、内面は、細目のハケを横位に用いて器底調整を行っている。

253は、土師器の小型壺の口縁～胴上位である。口縁は、内外ともに横位のナデ調整。肩外表面は、ヘラケズリ、内面は、横位のヘラナデ調整が施されている。

254～256は、土師器の壺の口縁～体上位である。内面及び口縁～肩部外面は、横位のナデ調整、肩上位外表面に縦位のハケ調整が施される。

#### SH15（現地略号SB-19・SX5 第57・58図）

E-13グリッド南部からE-14グリッド北部に位置する。南部でSH11、南東部でSH13と重複し、これに切られる。

住居掘方の平面形は、南北長7.8m、東西長7.4mのほぼ方形を呈す。今回の調査では、規模が最も大きい住居跡である。北壁中央部に竈を有する。

床に相当する面は、上下2面ある可能性がある。上面は、暗褐色土（住居覆土1層）中で、縁りのある黄褐色粘土がシマ状に検出されるもので、残存する竈、掘方底面との比高差は、大きく、掘方範囲内で完結する比較的小形の住居の重複が疑われる。下面は、竈構築材の褐色粘土の崩落（住居覆土5層）が及んでいることから、鍵方底面がそのまま床面に相当すると考えられる。

竈は、向かって右側（東側）の袖部で板状のマサ材を芯材とし、黄褐色粘土を被せて作られている。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、7世紀前半に比定される。

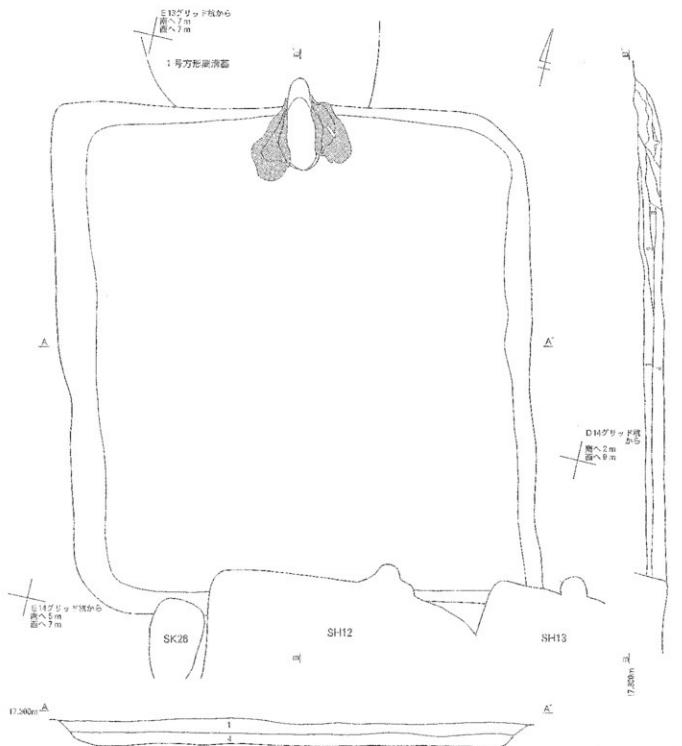
#### SH15出土の遺物（第59図 国版27）

257～262は、土師器の丸底の坏である。いずれも、口縁～体上位外表面は、横位のナデ、体中位～底面外表面は、横位のヘラケズリ、内面は、ミガキ調整が行われている。262の口縁部は、若干外反する。

263は、土師器の口唇部が受け口状になっている壺の口縁～胴上位である。口縁は、内外面ともに横位のナデ、肩部上位外表面は、縦・斜位ハケ調整、内面は、横位のハケ調整で、指頭圧痕が残る。

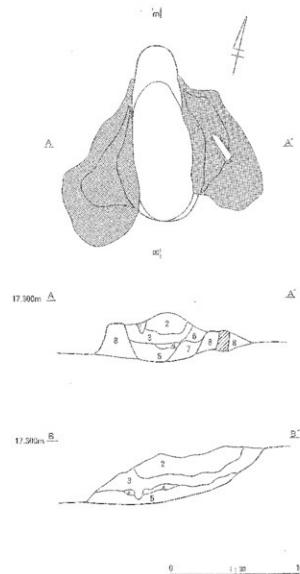
264・265は、土師器の全体的に筒形を呈する小型壺である。ともに内面全体及び口縁部外表面は、ナデ調整で、肩部外表面は、粗い縦位のヘラケズリで、口縁との区切りを明確につけ、器壁を薄くする。底面は、横位のヘラケズリで、264は、丸底、265は、平底を作る。264の底面は、煤の付着が著しい。

266は、短脚の高坏の坏下位～脚部である。坏部の内外面は、ミガキ調整、脚上・中位は、縦位のヘ



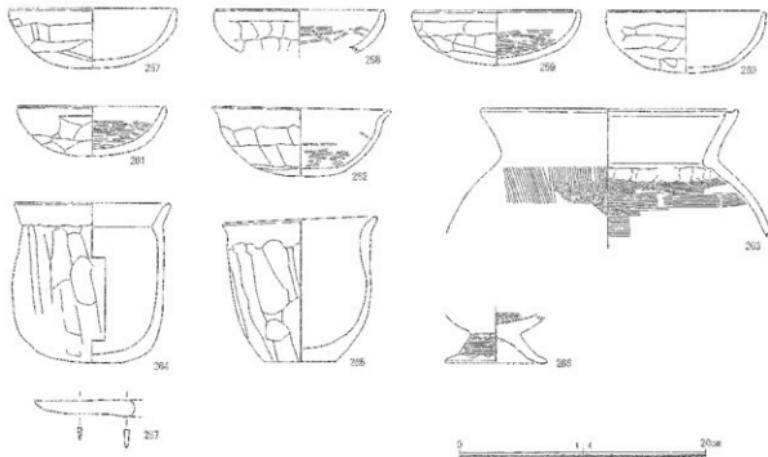
第1回 離婚元 (NVR1/E)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯	被毛 短毛 致死 致死 致死	第4回 離婚元 (NVR1/B)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯
第2回 離婚元 (NVR1/A)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯	被毛 長毛 致死 致死 致死	第5回 離婚元 (NVR1/L)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯
第3回 離婚元 (NVR1/F)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯	被毛 長毛 致死 致死 致死	第6回 離婚元 (NVR1/D)	土壌 酸性 乾燥 熱帯 熱帯

第57回 SH15 平野面談



1番	黄褐色	(10YR4/2)	土壌	砂利	少し	少し
2番	褐色	(10YR4/4)	土壌	砂利	少し	少し
3番	暗褐色	(10YR4/6)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し
4番	深褐色	(10YR4/8)	土壌	砂利	少し	少し
5番	灰褐色	(10YR5/0)	土壌	砂利	少し	少し
6番	暗灰褐色	(10YR5/2)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し
7番	深灰褐色	(10YR5/4)	土壌	砂利	少し	少し
8番	暗褐色	(10YR5/6)	土壌	砂利	少し	少し
9番	褐色	(10YR6/4)	土壌	砂利	少し	少し
10番	深褐色	(10YR6/8)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し
11番	灰褐色	(10YR7/4)	土壌	砂利	少し	少し
12番	深灰褐色	(10YR7/6)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し
13番	褐色	(10YR8/4)	土壌	砂利	少し	少し
14番	深褐色	(10YR8/8)	土壌	砂利	少し	少し
15番	灰褐色	(10YR9/4)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し
16番	深灰褐色	(10YR9/6)	少量の 砂利を含む 土壌	砂利	少し	少し

第58回 SH15 算 平野面談

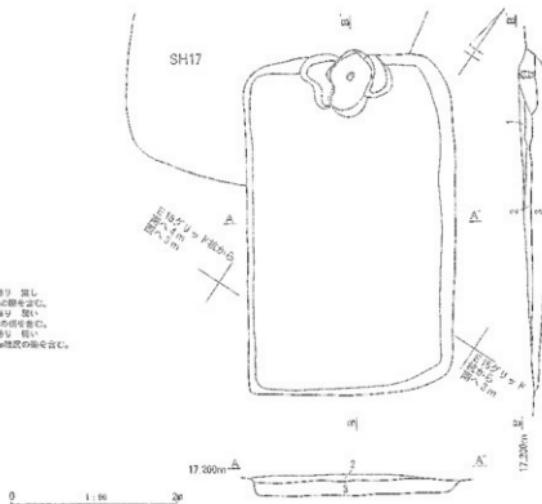


第59図 SH15 出土遺物

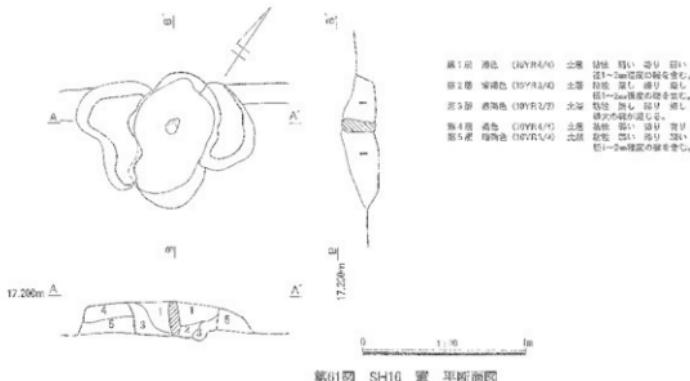
ラケグリで面取りした後、下位まで横位のミガキ調査、脚内面は、横位のナデ調査が施される。  
267は、鉄製の刀子である。

## SH16 (現地略号SB-1S 第60・61図 図版11)

E-15グリッド北東部に位置する。北西部でSH17と重複し、これを切る。



第60図 SH16 平断面図



住居掘方の平面形は、南北長4.2m、東西長2.6mの長方形を呈す。北壁中央部に竈を有す。

掘方底面は、およそ中央部より南側へスロープ状に上がっていくが、SH11・13と同様の住居掘張が行われた際、明確なテラス状の段差が発生しなかったケースとみられる。

竈は、袖部を褐色粘土で作っている。燃焼室内では、竈の中心軸上にマサ材を棒状に加工した支脚が起立する。

明確な貼床、硬化面は、確認されないものの、貯蔵のかかった褐色土層（埋土第3層）上面部が比較的水平になっており、竈が設置されている高さとも矛盾の無いことから、牀面と目される。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、8世紀前半に比定される。

#### SH16出土の遺物（図版28）

268は、須恵器の壺蓋の縫～縁部である。壺は、扁平な宝珠形である。外面は、体上位は、横位のヘラケズリ、体下位は、ナデ調整をし、内面は、ナデ調整が行われている。

269は、土師器の壺の腹中位～底部である。外匝は、胴中位に斜位のハケ調整、胴下位に縦位のミガキ調整がされ、底面には、木葉痕が残る。

内面は、横位のハケ調整がされ、胴中位は、その後、ミガキ調整がされる。

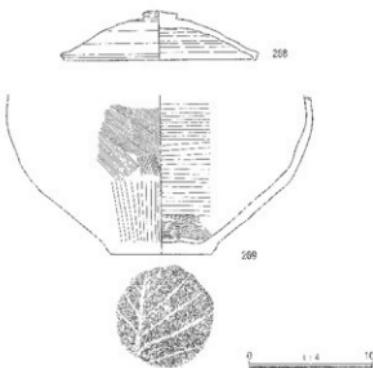
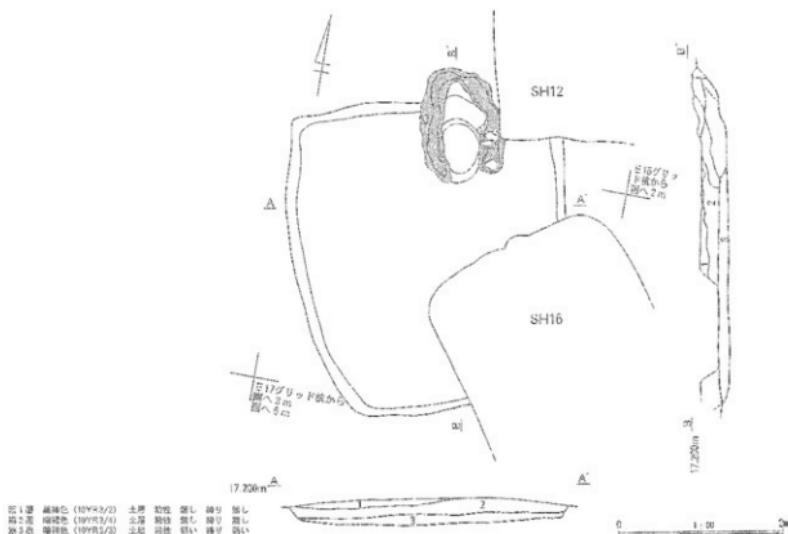


図62 SH16 出土遺物

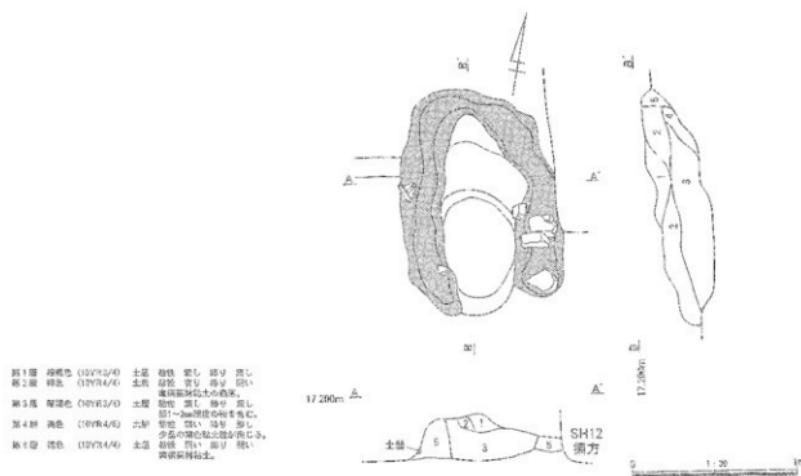
#### SH17 (現地略号SB-1N 第63・64図 図版12)

E-14グリッド南部から15グリッド北部に位置する。北東部でSH12、南東部でSH16と重複し、これらに切られる。

住居掘方の平面形は、南北長3.7m、東西長3.4mのほぼ方形を呈す。北壁中央やや東寄りに竈を有す。残存する竈は、直方体形で、煙道側では、褐色粘土が豊富に使用され、煙口側の袖部は、拳大の跡、



第63図 SH17 平断面図



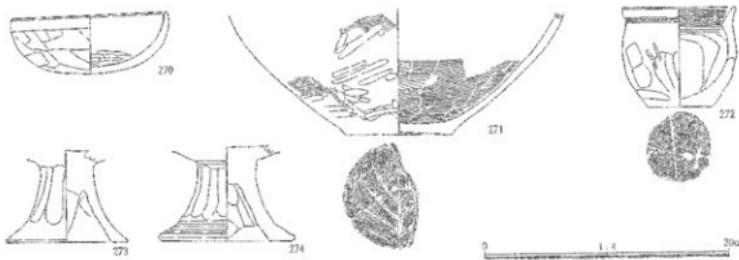
第64図 SH17 平断面図

マサ材を集め芯材とし、粘土と砂・シルトの混合土上に被せて作られている。向かって左側（西側）の補部には、高壙の部分が塗り込められていた。

床は、竈周辺部で住居覆土3層上面に黄褐色粘土を塗った部分がわずかに認められた。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、7世紀前半に比定される。



第65図 SH17 出土遺物

## SH17出土の遺物（第65図 図版28）

270は、土師器の丸底環である。外面は、わずかに横位のナデが施された口縁部の下から底部まで、3段に渡り、横位のヘラケズリを施す。内面には、ミガキが施される。

271は、壺の胴下位～底部である。外面は、斜位のハケ調整が施された後、直交方向にミガキ調整がされる。内面は、横位のハケ調整である。

272は、土師器の小型壺である。外面の調整は、口縁～胴上位は、横位のナデ、胴中位～下位は、縦位のヘラケズリである。

273・274は、ともに环部を失っている上師唇の短脚の高杯である。龜袖部に塗り込まれていたもので、脚の裾部から柱状部にかけての足折は、弱く、柱状部には、縦位のヘラケズリが施され、面取りがなされている。

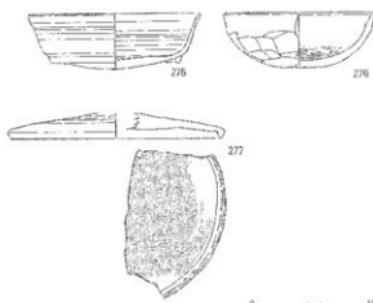
## SH18（現地略号SB-3S 第67・68図 図版12）

E-14グリッド北西部からF-14グリッド北東部に位置する。

調査区境界により、西側の状況が不明であるが、住居前方の平面形は、南北長3.3mで、推定方形。北壁中央部と想定される箇所に竪を有す。

床面は、住居櫛土3層上面で硬化面と黄褐色粘土の貼付けが確認される。

竪は、袖部を褐色粘土で作っている。



第66図 SH18 出土遺物

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

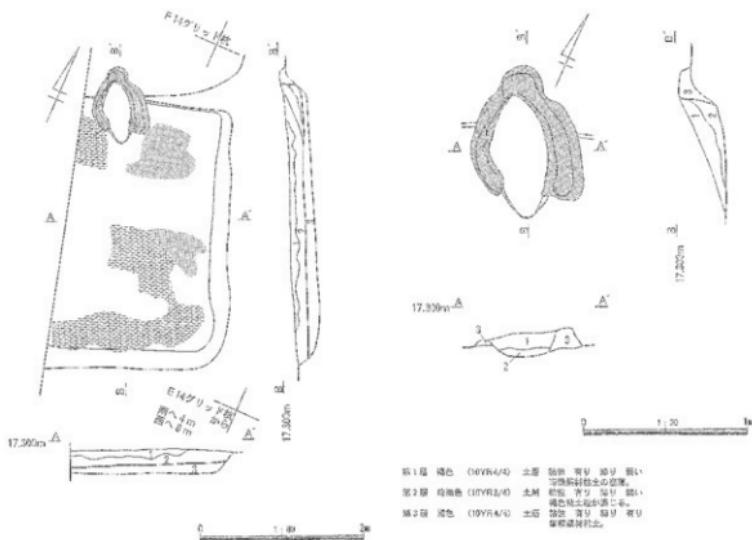
出土した土器の年代観より、7世紀末～8世紀前半に比定される。

## SH18出土の遺物（第66図 図版28）

275は、須恵器の高台环である。底部が高台よりも突出している。

276は、土師器の丸底环である。内面には、ミガキが施され、外面は、口縁部に横位のナデ、体部から底部までは、横位のヘラケズリが施される。

277は、須恵器の环蓋の素材とした転用碗である。内面に摩滅痕が広く発達している。



第67図 SH18 平断面圖

第1層 黄褐色 (10YR5/2) 土層 粘性 細粒 砂粒 有り 細い  
砂2-5mm程度の砂を含む。  
第2層 暗褐色 (10YR3/4) 土層 粘性 細粒 砂粒 有り 細い  
砂2-5mm程度の砂を含む。  
第3層 濃褐色 (10YR4/3) 土層 粘性 細粒 砂粒 有り 細い

第67図 SH18 平断面圖

SH19 (現地略号SB-4 第69・70図 図版12)

E-14グリッド南部に位置する。

調査区境界により、西側の状況が不明であるが、住居掘方の平面形は、南北長3.9mで、推定長方形。北壁中央部と想定される箇所に窓を有す。

掘方直上の一帯に黄褐色粘土による階床が認められるが、その厚さは、非常に薄く、ほぼ掘方底面部が床と同一視される。

礎は、袖部を褐色粘土で作っている。

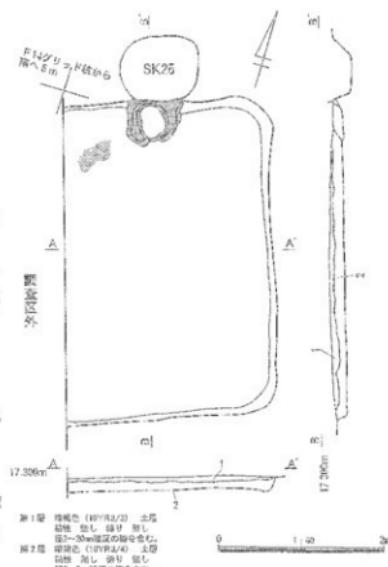
周焼溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、8世紀前半以前に比定される。

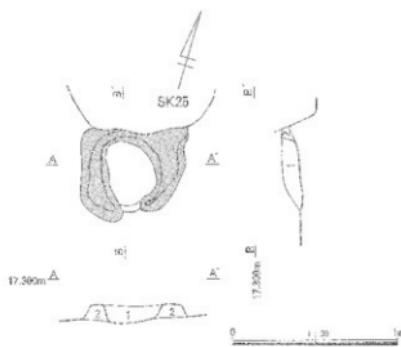
SH19出土の遺物 (第71図 図版29)

278は、須恵器の縁の洞部である。外面には、叩き痕が残り、内面には、横位のヘラナデ調整が施されている。

279は、土師器の杯である。外面は、口縁部は、



第69図 SH19 平断面圖



第1段 黄褐色 (D9YR5/40) 土層 著述 破り 破り 破り  
第2段 黑色 (D9YR5/40) 土層 著述 破り 破り 破り  
縦断面図付

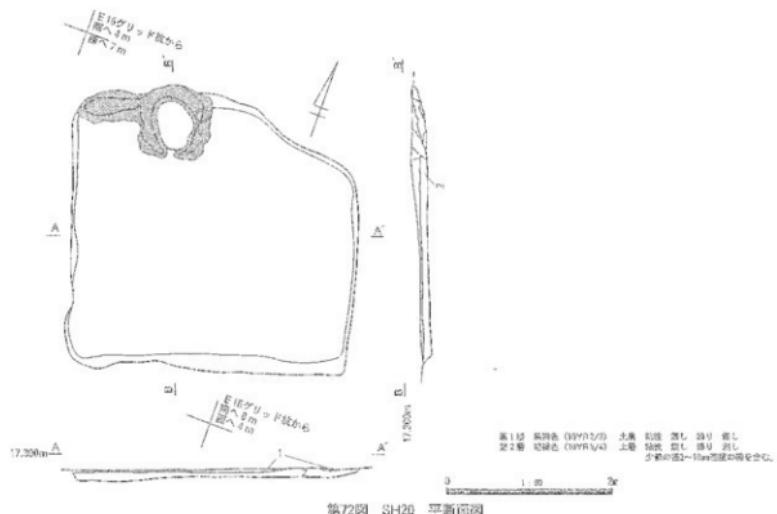
第70回 SH19 鹿 平野面図  
横位のナデ、体～底部は、横位のヘラケズリの後、  
ミガキ調整がされている。内面は、ミガキ調整がされている。

280は、土師器の壺の口縁下位～胴上位片である。外面は、斜位のハケ調整の後、横位のミガキ調整がなされ、内面は、横位のハケ調整がされている。

#### SH20 (現地略号SB-2 第72・73図 図版13)

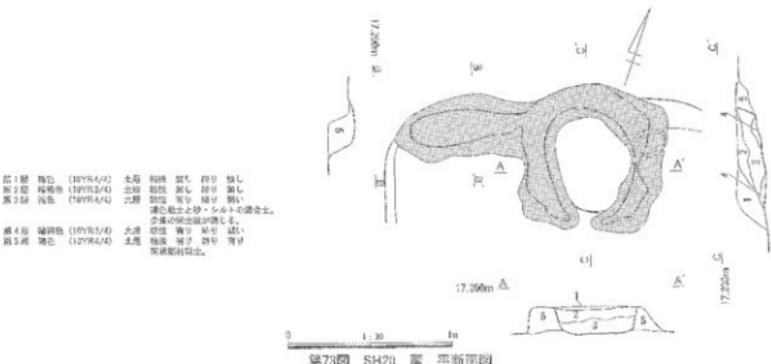
E-15グリッド中央から南部に位置する。

住居前方の平面形は、南北長3.4m、東西長3.5mで、北東隅部を掘り残した疑似的な方形を呈す。北



第72回 SH20 平野面図

第1段 黄褐色 (D9YR5/40) 土層 著述 破り 破り  
第2段 黑褐色 (D9YR5/40) 土層 著述 破り 破り  
少筋の底2～3cm程度の層を含む。



壁の中やや内方に窓を有す。

底は、側面直上部に黄褐色粘土の薄い貼付けが確認された。

窓は、袖部を褐色粘土で作っている。向かって左側（西側）の袖部から同じ構築材の粘土が連続して住居北西隅まで埋め、住居奥壁部に棚を作る。北東隅部の掘り残しについても、棚の作り出しが考えられる。

竈の燃焼室内では、天井部構築材の崩落とみられる粘土（竈上層 3 層）より上で、3～4 個体の土師器壺片（第74図285～283）が 2 段に重なり、平面的に散かれたような状態で検出された。

周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

出土した土器の年代観より、8世紀前半に比定される。

SII20の竪穴掘方でみられる建物規模は、大きいものでないが、屋内施設構築素材の褐色粘土が比較的豊富に使用されることや、竪内に入れ込まれた鰐片、後述する瓦鉢、ミニチュア土器など、特殊な遺物の出土状況について、遺跡内の他の住居と異なる様相が認められる。

SH20出土の遺物（図74図、図版29）

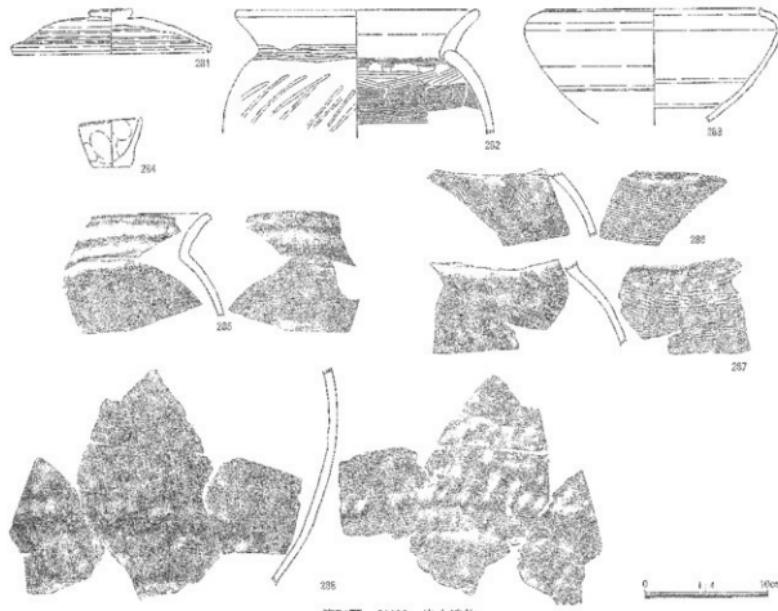
281は、須恵器の壺蓋の摘~縁部である。摘の頂部は、平坦。外面の調整は、体上位が横位のヘラケズリ、体下位は、ナテであり、自然點が付着する。内面は、ナテ調整がされ、一部、摩滅部分が認められる。

282は、土師器の壺の口縁～胴上位である。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整、頸部外面は、横位のミガキ調整、胴上位外面は、縦位のハケ調整の後、斜位のミガキ調整がなされ、胴上位内匝は、横位のハケ調整がされる。

283は、軟質な須忠器の五鉢の口縁へ胴下位である。肩部が大きく張り出し、口縁部が内湾し、口唇部は、わずかに直立する。外面の最大径部が位置する肩部と底部に向け窄まる胴下位に横位のヘラケズリ型模様が行かれている。

284は、小師製のミニチャート上部である。手摺にて製作され、内外面に指壓压痕が残る。

285～288は、竈燃焼室内より、歯き詰められるようにして検出された土師器裏片の内、同部位での器面調整や胎土含有物の違いにより、個体差が認識されたものである。285は、口縁～胴上位部片を主体とする。口縁は、内外面とともに横位のナデ、胴上位外面に斜位のハケ調整がされた後、駆部に横位のナデ、胴上位内面には、横位のハケ調整が施される。他の竈内検出土器に比べ、胎土の粘土粒子密度が粗い印象がある。286・287は、胴上位部片を主体とする。ともに内面は、横位のハケ調整で、外面では、



第74図 SH20 出土遺物

斜位のハケ調整の後、同方向にヘラミガキがなされるが、使用工具が異なる。287は、さらにハケ工具尖端で列点状の刺突を行う。288は、洞中下位部片を主体とする。内面に歯位に走るハケメは、5の肩部内面調整の工具によるものと近似しているが、土器胎土・焼成は、286・287に近い印象がある。外面は、縦・斜位のハケ調整の後、同方向にヘラミガキが行われる。

#### SH21（現地略号SB-9 第75図 図版13）

D-15グリッド南部から16グリッド北部に位置する。

調査区境界により、東側の状況が不明であるが、住居窓方の平面形は、南北径4.8mで、推定長方形。北壁中央部と想定される箇所に窓を有す。

床は、窓の設営されている高さから、黒褐色土層（住居覆土2層）上面が適当であるが、硬化面、貼床は、検出されていない。

竈は、袖部を褐色粘土で作っている。

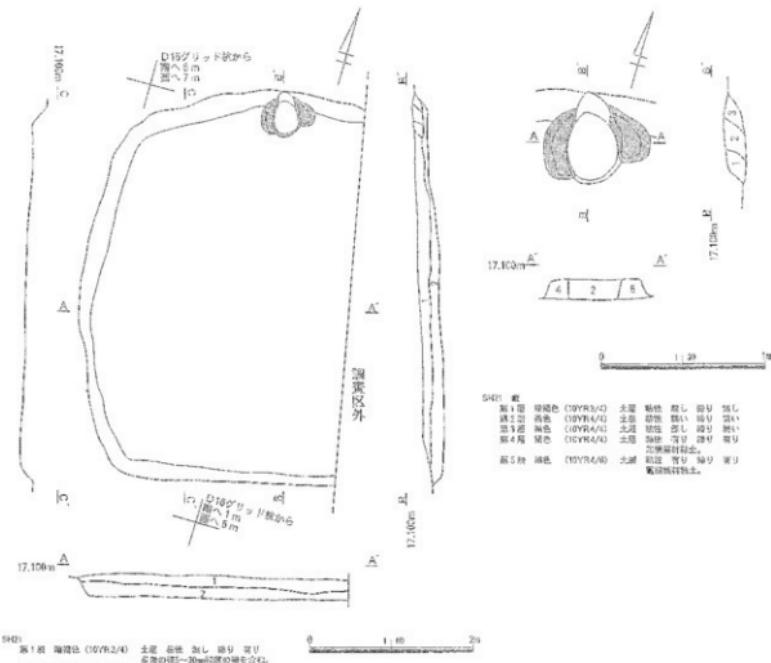
周壁溝、柱穴痕は、確認されなかった。

図示していないが、外面に横位のミガキ調整がされた駿東型壺片が出土していることから、8世紀前半以前に比定される。

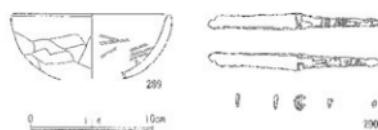
#### SH21出土の遺物（第76図 図版29）

289は、土器の丸底の口縁～底部である。外面は、口縁～体上位は、内外面ともに横位のナア、体中位～底部外面は、横位のヘラケズリ調整、内面は、横位のミガキ調整がされる。

290は、鉄製の刀子である。鍔と茎周りに巻付け糸・木柄の一部が残る。



第75図 SH21 半断面図 及び SH21 実 断面図



第76図 SH21 出土器物

### 3 古墳時代中期の遺構と遺物

2B区調査区北西隅にて、古墳時代中期に比定される土坑が検出されている。当該期の遺構は、この土坑1基のみである。

SK27（現地略号SF11 第77図 図版3）

G-7グリッド西部に位置する。平面形は、円形を呈し、径41cm、検出土面から、底面までの深さは、19cmである。覆土上位より、奉人の扁平な亜円錐のほか、土器の検出をみている。

SK27出土の遺物（第78図 図版29）

291は、高环の脚部である。若干膨らむ脚柱の下位より、くの字状に弱い屈曲を見せ、裾部が広がる器形を持つ。脚部外面は、綴位のミガキ調整、皿部内面は、放射状の丁寧なミガキ調整がなされ、脚内面は、ナデ調整が行われている。

292は、小型壺である。口縁部は、広がるが、最大径は、胴中位に位置する。外面は、口縁から肩上位、胴下位は、綴・斜位のハケ調整を施した後、斜位のヘラナデが行われ、胴中位、底部は、横位のヘラケズリが行われている。指頭圧痕が横位に連続する口縁内面は、横位のハケ調整が施されている。この個体は、土坑掘方内で確認されたものではなく、取り上げ後に遺構と平面的に重複していたことが判明したもので、291との検出比高差は、およそ4cmであった。



第77図 SK27 平面図

#### 4 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

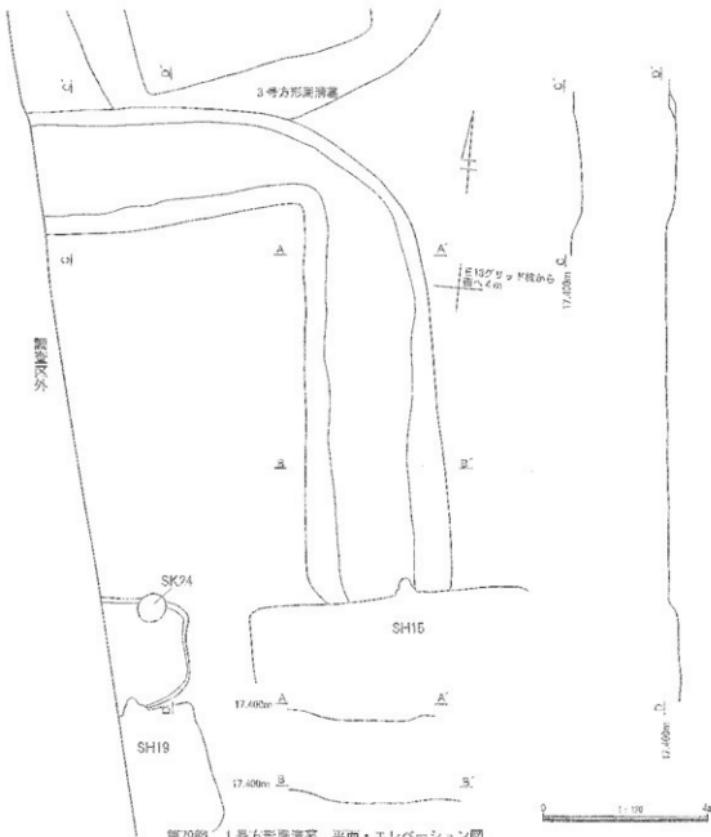
3区中央部では、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される方形周溝墓が3基検出されている。本事業の範囲が東西方向に限定された調査区であるほか、後世の遺構の切り合い、擾乱などにより、遺構検出面が元々の東側面と想定される高さに比べ著しく低く設定されたため、各々の溝の規模、平面形状などの情報は、十分得られていない。

##### 1号方形周溝墓（現地略号SX1 SD2 SB3N 第79図）

E-12・13、F-12・13・14グリッドに位置する。調査区境界により、西側の状況が不明であるが、北溝の東半、東溝、南溝の一部が残存し、推定される平面形は、隅部が連続する方形で、南北主軸の方向は、およそN $7^{\circ}$ Wを指す。

全体の規模は、推定15m。残存する周溝の最大幅は、北溝で3.1m、東溝で3.6mである。

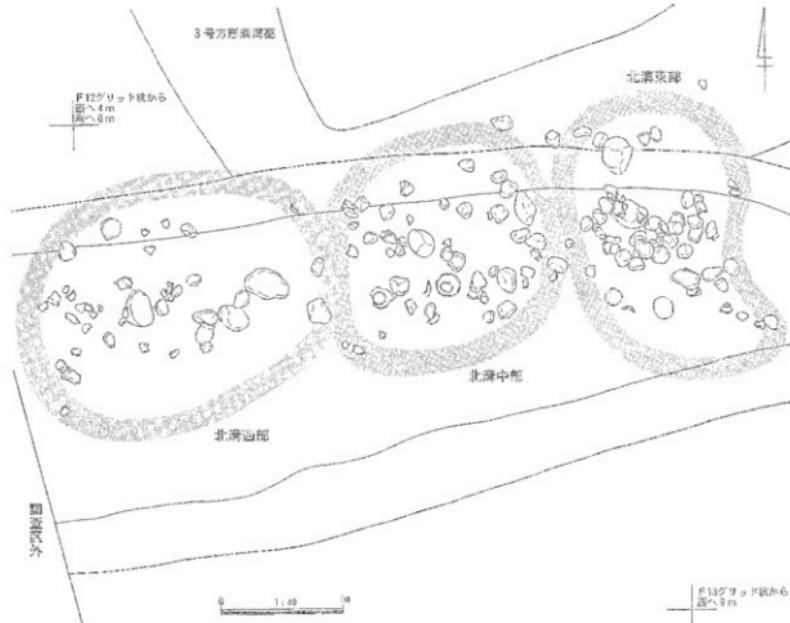
主体部は、確認されなかった。



北側で3号方形周溝墓と重複し、残存する覆土の断面調査では、両者の境界を特定することが出来なかったものの、1号周溝墓の北東隅部を中心とした周溝内に、遺物・礫の集中が認められ、さらにその連続した分布が北溝端方の範囲内に平面的にまとまるように検出されたことから、埋没時期は、3号周溝墓より新しいと判断された。

#### 1号方形周溝墓周溝内出土遺物（第80・84図 図版14・15）

先述のとおり、1号方形周溝墓では、北東隅部中心として、北溝と東溝範囲内で遺物の集中的な検出があった。しかし、現地調査の遺物取り上げの段階において、周溝の存在を特定し得なかったこともあります。遺物包含土層の緻密な観察、検討がされていないため、検出標高地が近しい以外にこれら遺物の一括性について、言及できる材料を持っていない。よって、山土地点が記録されている遺物について、周溝内を6箇所の小範囲に分けて報告する。



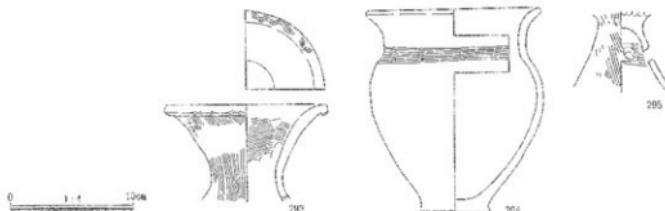
第80図 1号方形周溝墓 北溝 遺物検出状況

#### 1号方形周溝墓北溝西部出土の遺物（第81図 図版30）

293は、折り返し口縁壺の口縁～頸部である。口縁内面縁部には、柳描きによる波状文が巡り、折り返し縁部の下位に連続したキザミが施されている。

294は、広口壺である。全体的に内外面ともに横位のミガキ調整が行われ、赤彩されている。頸部には、ほぼ一定の間隔で、狭・長の施文を交互に10回繰り返した柳描の条線文が巡る。その製作の特長から、中部高地に分布する箱清水式土器に比定される。

295は、高杯の脚部である。外面は、縦位のハケ調整の後、一部ナデを行ってこれを消す部分が認められる。内面は、上位部に横位のハケ、指頭圧痕が残り、中下位部横位のナデ調整が行われている。脚



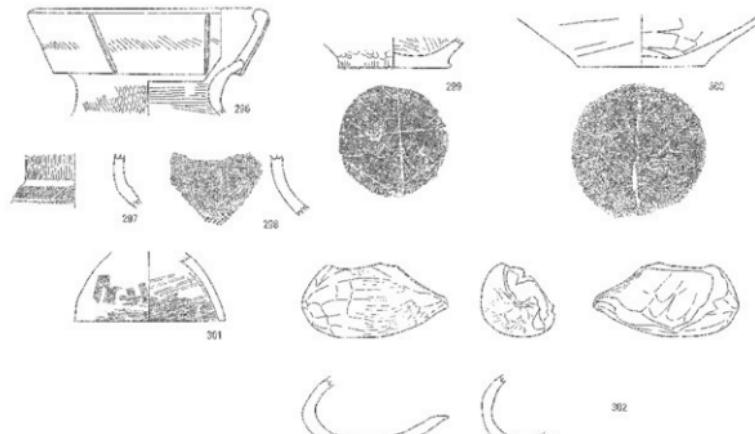
第81図 1号方形周溝壺 北溝西部 出土遺物

の上位の周面4箇所に設定された円孔は、器面調整後に開けられたものである。

#### 1号方形周溝壺北溝中部出土の遺物（第82図 図版30）

296は、複合口縁壺の口縁～頸中位である。口唇部は、内側に折れる。口縁外面は、やや凹んだ中段部に前段階の調整の痕である斜位のハケを残しつつ、その上下に、横位のナデ調整を行った後、ほぼ等間隔に6単位、断面三角形の突帯を垂下させ、両脇に浅い沈線を引き、これを強調させている。頸外外面は、縦位のハケ調整が行われ、口縁との接合部に横位のナデ調整を施す。口縁内面は、横位のハケの後、ナデ調整、頸内面は、横位のハケ調整である。

297・298は、壺の頸下位～肩上位である。297の頸下位外面は、縦位のミガキ調整、298の頸下位内面は、縦位のハケ調整である。ともに肩上位外面にハケ工具尖端を斜位に傾けて連続して押し付け、その下位に工具先の傾きを変えた連続刺突を施し、疑似(羽状)繩文帶を作り出した文様帶を設定している。297は、器面に薄い粘土板を一周貼付け、上方が突出した文様帶の下地が作られている。297の内面は、ナデ調整である。298は、頸下位内面が横位のハケ調整、肩上位内面は、横位のナデ調整である。



第82図 1号方形周溝壺 北溝中部 出土遺物

299・300は、壺の胴下位～底部である。ともに底部外面に木葉痕が残る。299の胴下位外面は、横位のナデ調整でそれが及ばなかった最下位部に縦位のハケ調整痕が残り、内面は、横位の比較的粗目のハケ調整が行われる。300の胴下位外面は、横位のミガキ調整が行われ、内面は、横位のナデ・細目のハケ調整が行われる。

301は、台付壺の若干膨らむ台部である。外面は、横・斜位のハケ調整の後、ミガキ調整が行われ、内面は、横位のハケ調整の後、粗いヘラナデが施される。

302は、注口状の突出部を持ったラグビーボール形を呈する袋状土製品である。内側から親指で裏支えし、外面をヘラケズリで整形している。

#### 1号方形周溝壺北溝東部出土の遺物（第83図 図版30）



第83図 1号方形周溝壺 北溝東部 出土遺物

303は、複合口縁壺の口縁～頸上位である。口唇部は、平坦で、内側に若干突出する。口縁外面は、横位のナデ調整が施された後、沈線文が墨下する。頸上位外面には、縦位のハケ調整が行われている。内面は、横位のナデ調整がなされている。

#### 1号方形周溝壺北東隅部出土の遺物（第85図 図版31）

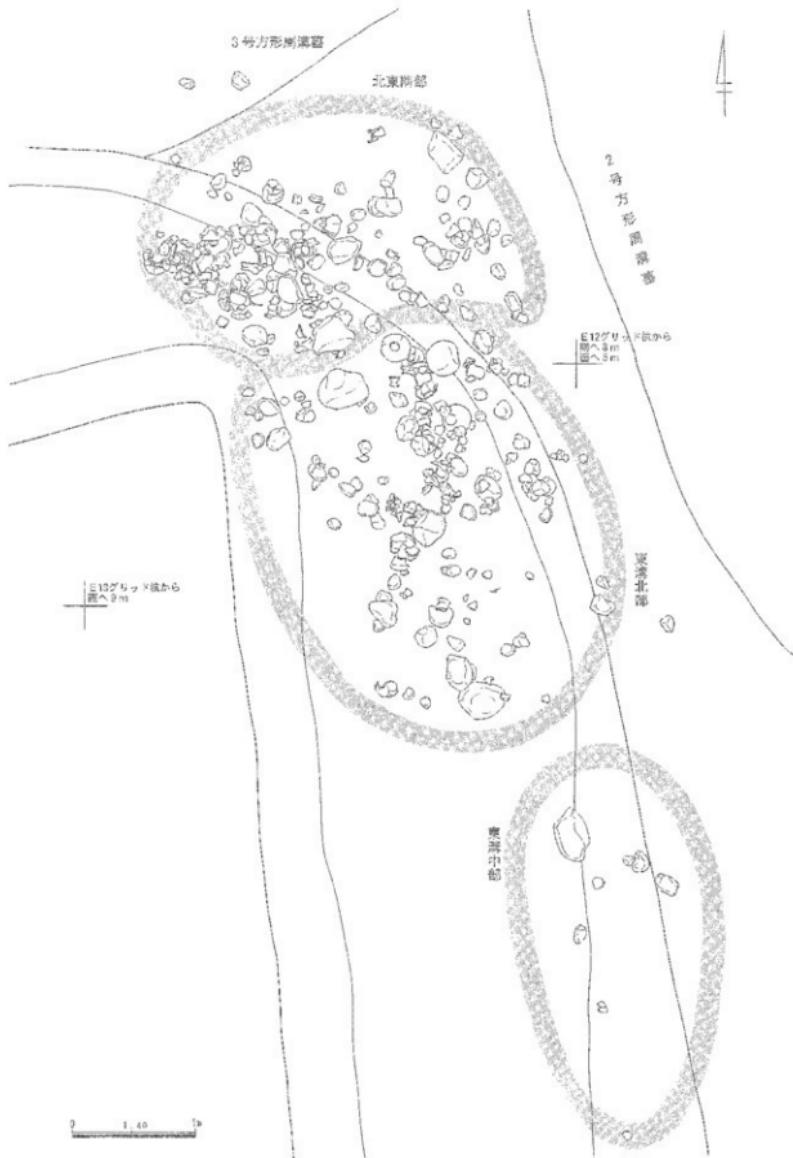
304・305は、複合口縁壺の口縁～頸部である。各々の口縁外面には、数条の沈線文の垂下が4単位施され、304は、4本1単位、305は、3本1単位である。304の頸上位には、上端に結節部を作った原体LRの繩文が一周施されている。

施文箇所以外の器面調整は、304の口縁外面は、横位のナデ調整。頸部は、ナデ調整が行われるが、張り出している口縁下位の死角となって、頸上位部に前段階に施されていた縦位のハケメが残る。内面は、横位のハケ調整の後、ナデ調整が行われている。305の口縁外面は、外反器形により括れた中段部に縦位のハケ調整を残しつつ、その上下に、横位のナデ調整が行われる。頸部は、縦位のヘラミガキが行われるが、304と同様、張り出している口縁下位の死角となって、頸上位部に前段階に施されていた縦位のハケメが残る。口縁内面は、横位のナデ、頸部は、横位のハケ調整が施されている。

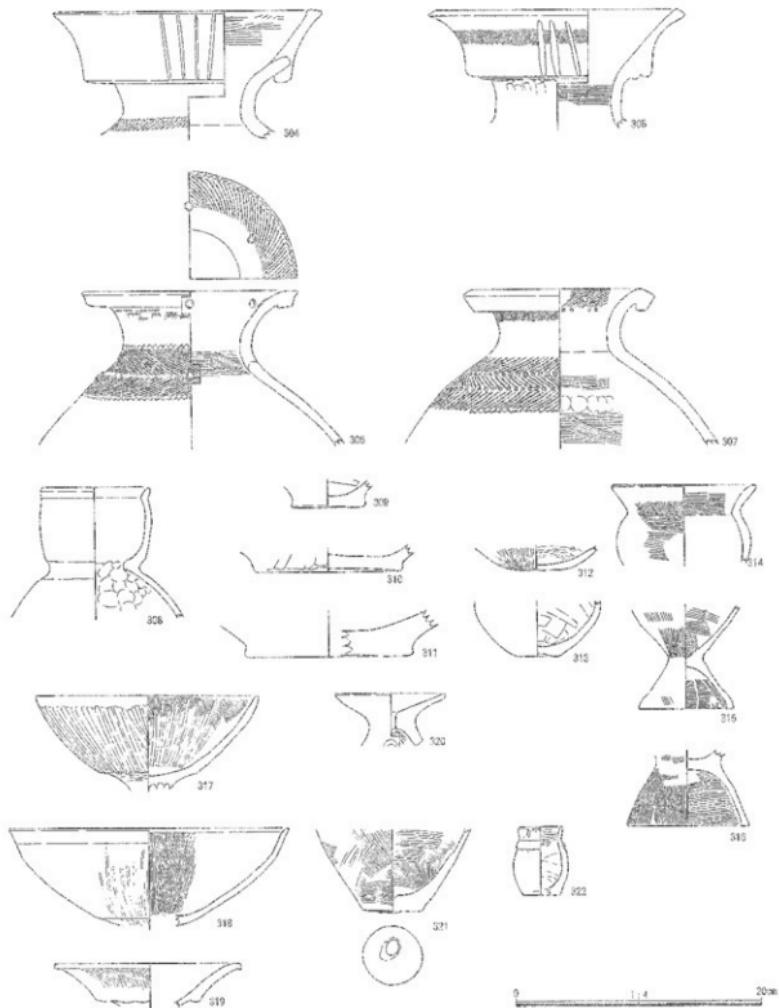
306・307は、折り返し口縁壺の口縁～胴上位である。両者とも、外反する口縁内面部と頸下位～胴上位の2箇所に文様帶が設定されている。

306の口縁文様帶は、外側の端に結節部を作った原体RLの繩文が一周し、この内側にはほぼ等間隔で6単位分、円形の粘土粒を貼付けられたものであり、頸部文様帶は、上段に上端に結節部を作った原体RLの繩文、下段に下端に結節部を作った原体LRの繩文を一周させて羽状繩文を作った後、その中央に円形の粘土粒を6単位分、器を上から見たとき口縁の粘土粒の中間位置に貼付けたものである。307の口縁文様帶は、原体RLの繩文が一周し、この内側にはほぼ等間隔で竹管状工具による円形刺突文が連続して施されている。頸部文様帶は、上段に上端に結節部を作った原体LRの繩文、中段に結節部を持たない原体RLの繩文、下段に下端に結節部を作った原体LRの繩文を一周させ、各々の繩文の境界部にはほぼ等間隔で口縁と同様の円形刺突文を連続して施す。

306の文様帶外の器面調整は、頸上位外面では、縦位のハケ調整の後、ナデ調整が行われ、胴上位は、ミガキ調整。頸部内面は、横位のハケ調整の後、頸上位は、ナデ調整を行いハケメを消す。胴上位内面は、ナデ調整である。307の文様帶外の器面調整は、頸上位外面では、縦位のハケ調整の後、ミガキ調整が行われ、頸上位は、ミガキ調整。頸部内面は、横位のハケ調整の後、ミガキ調整を行なう。胴上位内面は、横位のハケ調整である。



第84图 1号方形陶沟器 北宋局部~东清 遗物检出状况



第85図 1号方形測量區 北東隅部 出土遺物

308は、瓢形の壺の口縁へ胴上位である。外面は、口縁と胴上位が縦位のミガキ、頭部が横位のミガキが施され、内面は、口縁は、縦位のミガキ、頭部以下は、ナデ調整で、胴上位に指頭圧痕が残る。

309～311は、平底の壺の胴下位～底部である。309は、外面ナデ、内面ヘラナデ調整、310の胴下位外面は、ヘラナデ、底部外面は、ミガキが施される。内面は、風化により詳細不明。311は、外面ミガキ調整、内面ナデ調整である。

312・313は、小型壺または、壺の胴下位～底部である。312の作りは、薄く、丸底を呈し、内外面とともに、ミガキ調整が施される。内面に一部、前段階の調整痕であるハケメが残る。313は、厚手の丸底で、中央部にわずかな円形の凹みが削り出されている。外面は、ミガキ調整、内面は、ナデ調整である。

314は、壺の口縁～胴中位である。口縁上位は、内外面ともに横位のナデ、外面口縁下位～胴上位は、斜位のハケ、胴中位は、横位のハケ調整、内面口縁下位～頸部は、横位のハケ、胴部は、ナデ調整である。315・316は、台付甕の胴下位～高台部である。315の外面調整は、胴下位は、縦位のハケの後、一部にナデが確認される。高台部は、全体的にナデ調整で、一部、前段階の調整痕であるハケメが残る。内面は、胴下位・高台ともに横位のハケ調整である。316の高台部は、外面は、縦位のハケ調整、内面は、横位のハケ調整である。

317～319は、壺环の环部である。317は、环部の脚部に接合する手前位置に屈折部を持つ器形で、环口縁部外面は、横位のナデ調整、环体部外面は、縦位のハケ調整の後、ミガキ調整が施され、脚接合手前部は、横位のナデ調整が行われる。环部内面は、斜位のハケ調整の後、縦位にヘラナデが行われる。318の环部の口唇は、若干外反し、环体下位に弱い屈折がある。环部口縁外面は、横位のナデ調整、体部外面は、ナデ調整の後、縦位のヘラミガキ、体下位では、斜位のヘラケズリが行われている。环部口縁～体中位内面は、縦位のヘラミガキ、体下位は、横位のヘラミガキが施されている。319は、外反する複合口縁状の器形で、外面は、横位のナデ調整、内面は、ミガキ調整が施される。

320は、器中央に上から下へ円孔が貫通する器台の皿口縁～脚上位である。脚の上位の周囲3箇所に円孔が開けられている。皿部及び脚外面は、ミガキ調整、脚内面は、横位のハケ調整が施されている。

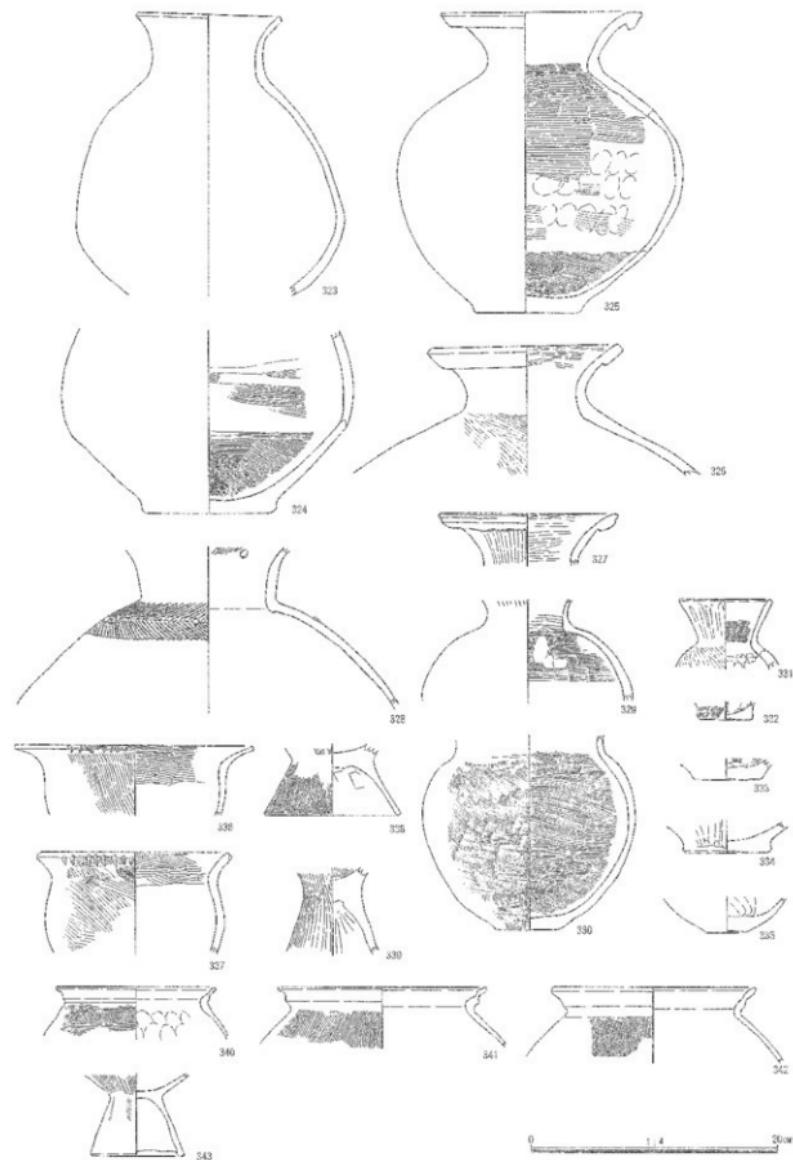
321は、壺の胴下位～底部である。底面の中央よりやや外れた位置に径1cm内外の円孔を内より外側へ開ける。穿孔跡、底面にはみ出た粘土の処理は、行われていない。胴下位外面の調整は、斜・横位のハケ調整のほか、ナデ調整を行う。底部外面は、ナデ調整。内面は、横・斜位のハケ調整が行われる。

322は、壺を模したミニチュア土器の口縁～底部である。頸部に断面形蒲鉾形の突審を一周させる。外面は、一部に斜位のハケメが確認されるが、全体的にナデ調整。口縁～脚上位内面に横位のハケ調整、胴中位以下内面に横位のナデ調整が施される。

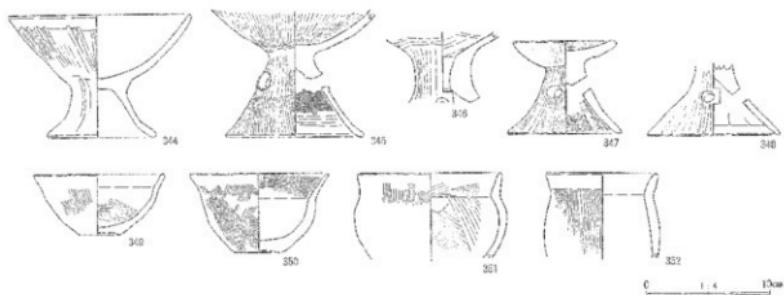
#### 1号方形周溝墓東北出土の遺物（第88・87図 図版32・33）

323・324は、胴下位に最大径が設定される無花果形を呈する壺である。323は、口縁～胴下位が残存する。若干外反する半純口縁を持つ。外面の器皿調整は、口縁に横位のナデ、頸～胴中位に縦位のミガキ、胴下位に横位のミガキが施される。内面の器皿調整は、口縁～頸部に横位のミガキ、胴部内面に横位のハケ調整が行われている。324は、胴中位～底部が残存する。外面は、横位のミガキ、内面は、横位のハケ調整が行われている。

325～327は、折り返し口縁壺である。325は、胴中位に最大径が設定される球形形で、口縁～底部が残存する。外面の器皿調整は、口縁は、横位のナデ、口縁と頸上位の段違い部分は、整形時の指頭圧痕の並びが残されている。頸中位以下は、縦位のミガキ調整で、極一部に前段階の調整の縦・斜位のハケメが残る。内面の器皿調整は、口縁に横位のミガキ、頸上中位では、横位のハケ調整の後、ナデ調整を行い、頸下位以下は、横位のハケ調整が施され、中位に指頭圧痕が残る。326は、口縁～胴上位が残存する。頸・胴部の器壁厚は、325とはほぼ同じであるが、口縁の折り返し部を薄く仕上げている。外面の器皿調整は、口縁は、横位、頸部は、縦位、胴上位は、斜位のミガキ調整が行われ、頸上位部で張り出している口縁下位の死角となっている箇所に前段階に施されていた縦位のハケメが残る。外面の器皿調整は、口縁～頸上位は、横位のハケ調整の後、ミガキ、頸中位以下は、ミガキ調整がなされている。327は、口縁～頸部が残存する。折り返された口縁外面は、丸みを帯びている。外面の器皿調整は、口縁は、



第20図 1号方形陶罐蓋 東洋北郭 出土遺物 1



第87図 I号方形肩青铜器 東晉北朝 出土遺物2

横位のナデ、頸部は、縦位のミガキ調整が施され、内面は、横位のミガキ調整が行われる。

328～350もまた、球形の蓋である。

328は、口縁下位～胴中位が残存し、口縁内面部と胴上位外面部に文様帶が設定されている。口縁部文様帶は、原体LRの縦文が一周し、この内(下)側に円形の粘土粒が貼付けられたものであり、胴上位部文様帶は、上段に下端に結節部を作った原体LRの縦文、下段に同じく下端に結節部を作った原体RLの縦文を一周させて羽状縦文を作った後、その中央に円形の粘土粒を推定7単位分貼付けたものである。

328の施文箇所以外の器面調整は、外面では、頸部に縦位のハケ調整を施した後、中下位にナデ調整する。328は、折り返し口縁を持っていたと推定され、その張り出しにより死角となった頭上位にナデ調整が及ばず、ハケメが残ったと考えられる。胴中位は、ミガキ調整がなされている。頸部以下の内面は、ナデ調整である。

329は、頸～胴中位が残存する。外面の器面調整は、頸上位に縦位のハケ、胴部に斜位のハケ調整を行った後、頸中下位に横位のナデ、胴部にミガキ調整が行われる。内面の器面調整は、頸部は、横位のナデ調整で、頸中下位に前段階の調整の横位のハケメが残る。胴部は、横位のハケ調整である。

330は、頸下位～底部が残存する広口壺または、壺である。外面の器面調整は、頸下位に横位のナデ、胴中位以下に斜・横・縦・横・縦と5段に渡りハケ調整が施される。胴上位は、胴中位以下にみられるハケ調整の後に斜位のヘラナデ調整を行っている。底面は、ヘラケズリされるが、その整形作業は、表面的で、凹凸が残る。内面は、横位のハケ調整がなされている。

331は、直口壺の口縁～胴上位である。外面の器面調整は、口唇部で横位のナデ、頸部は、縦位のハケ調整の後、縦位のミガキ、胴上位は、斜位のハケ調整の後、斜位のミガキがなされている。内面は、頸部は、横位のハケ調整、胴上位は、輪積痕とそれを押さえる指頭圧痕が残る。

332～334は、壺の胴下位～底部である。底面中央を円形に凹ませ、低い幅広の高台状を呈す。332の胴下位外面は、斜位のハケ調整、内面に指頭圧痕が残る。333の胴下位外面は、ナデ、内面は、横位のハケ調整がされ、指頭圧痕が残る。334の胴下位外面は、縦位のミガキ、内面は、ナデ調整である。

335は、小型壺または、壺の底部である。厚手の丸底で、中央部にわずかな円形の凹みが削り出されている。外面は、風化のため器面調整の内容は、不明。内面は、ヘラナデ調整である。

336・337は、口唇部に連続したキザミを施した壺の口縁～胴中位である。ともに外面は、斜位のハケ調整、内面は、口縁～頸部で横位のハケ調整、胴部は、横位のナデ調整が行われている。

338・339は、台付壺の胴下位～高台部である。337の外面は、縦位のハケ調整が行われ、その後、胴下

位～高台上位に横位のナデ調整を施している。壺底内面は、ナデ調整、高台内面は、横位のハケ調整がなされている。339の外側、壺底内面は、縦位のヘラミガキ調整、高台内面は、工具及び指による縦位のナデ調整がなされている。

340～343は、器壁の薄い台付壺、いわゆるS字口縁壺であり、胎土に雲母、石英、白色粒子を含む。340～342は、口縁～腹部上位が残存し、口縁内外面の横位のナデ調整、胴上位外面の縦位のハケ調整は、共通する。340の胴上位外面では、さらに横位のハケが重ねられ、同内面では、指頭圧痕が隙間無く残る。341・342の口縁器壁は、340に比して肥厚しており、胴上位内面も指頭圧痕を340ほど残さず、ナデ調整がされている。343の胴下位外面は、縦位のハケ調整が行われ、高台外面は、上位に前段階の調整の斜位のハケを残しつつ、ナデ調整が行われる。壺底内面は、ナデ調整、高台内面は、横位のナデ調整がなされ、台端部は、外から内に粘土が折り返される。

344～348は、高环・器台である。344は、大きい环部を持った短脚の环体部～脚部で、外面の器面調整は、环口縁で、横位のナデ、环体部で斜位のハケ調整の後、縦位のヘラミガキ、脚部もまた、縦位のヘラミガキが施される。内面は、环部は、ミガキ、脚部は、横位のナデ調整が行われている。345は、脚の上位の周囲3箇所に円孔が開けられている高环の环体部下位～脚部で、外面の器面調整は、縦位のヘラミガキが施され、内面は、环体部下位でミガキ、脚上中位で横位のハケ、脚下位で横位のナデ調整が行われている。346は、器中央に円孔が貫通し、脚の上位の周囲4箇所に円孔が開けられている高环の环体部下位～脚上位で、环体部下位は、内外面ともに横位のミガキ、脚上位外面は、縦位のミガキ、同内面では、ナデ調整が施されている。347は、脚の上位の周囲3箇所に円孔が開けられている器台の口縁～脚部で、外面の器面調整は、皿部で横位のナデ、脚部は、縦位のハケ調整の後、同方向のミガキが施される。皿部内面は、ミガキ、脚内面は、横位のハケ調整が行われている。348は、裾が広がり、その上位の周囲3箇所に円孔が開けられている高环または、器台の脚部で、外面は、ミガキ、内面は、横位のナデ調整がされている。

349～352は、小型鉢である。349は、膨らんだ体部を持ち、底部が若干上げ底状に作られる鉢の口縁～底部で、口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整。体外面は、縦位のハケ調整の後、一部ナデ調整が加えられ、体内面は、横位のハケ調整が施される。350は、口縁部が外側へ広がり、体部が膨らむ平底の鉢の口縁～底部で、外面の器面調整は、口縁上位に横位のナデ、口縁下位～底部に至るまで、多方向のハケ調整が施され、内面は、口縁部に横位のハケ、体部以下は、ナデ調整が行われる。351・352は、口縁部が若干膨らむ筒形を呈し、体部が膨らむ鉢の口縁～脚中位で、351の口縁上位は、内外面ともに横位のナデ調整で、口縁下位～頸部外面は、縦位のハケ、体部は、ナデ調整で、口縁下位内面は、横位のハケ、体部以下は、斜位のハケ調整が施されている。352の内面及び口縁外面は、横位のナデ調整で、頸部以下外面は、縦位のハケ調整が施されている。

#### 1号方形周溝墓東肩中部出土の遺物（第88図 図版33）

353は、胴下位に最大径を持つ複合口縁壺の口縁～胴下位である。胴上位周間に粘土板を貼付け、上方が器面から突出する文様帶の下地を作る。ここに設定された文様帶の内容は、斜めに傾けたハケ工具尖端を連続して押し付け一周させ、その下位で工具先の傾きを変え、再び連続押し付け作業を2回行い、合計3段の凝似（羽状）縞文帯を作り出し、中段部に長円形の粘土粒をほぼ等間隔に貼付けていったものである。

文様帶以外の外面の器面調整は、口縁部は、横位のナデ調整がなされ、頸部は、縦位のミガキ調整が行われるが、張り出している口縁下位の死角となって、頸上位部に前段階に施されていた縦位のハケメが残る。頸部は、横位のハケの後、横位のミガキ調整が施されている。内面の器面調整は、口縁～頸部

は、横位のミガキ調整、胴部は、横位のハケ調整である。

354もまた、胴下位に最大径を持つ壺の胴中位～底部である。胴外面の器口調整は、横位のミガキ、張り出した胴下位と底部間が外反器形となるため、工具の届かない死角部となった胴最下位に前段階の調整の痕である縦位のハケが残る。底部外面は、ナテ調整。胴～底部内面は、横位のナデ調整が施される。



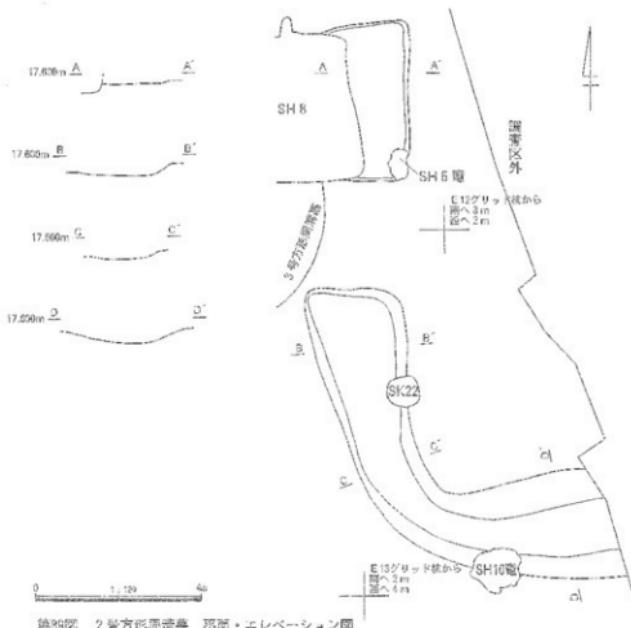
第354図 1号方形周溝壺 東渕南墓 出土遺物

#### 2号方形周溝壺（現地略号SX1 SD3 SB20 第89・90図）

E-11～13、D-12～13グリッドに位置する。調査区境界、後世の遺構掘方の重複により、北側と東側の状況が不明であるが、西壁と南壁の一部が残存し、推定される平面形は、構部が連続する方形で、南北主軸の方向は、およそN-10° -Wを指す。

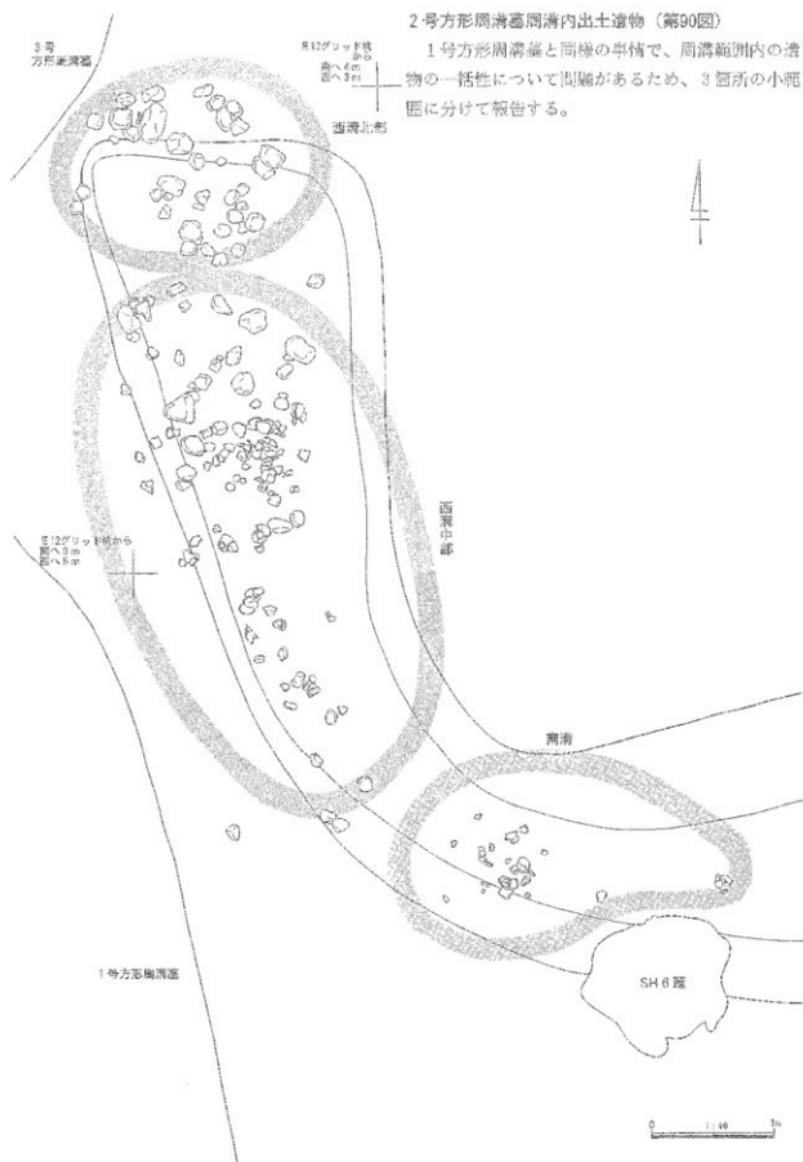
西溝の中央部と想定される箇所で、約2.5m幅の溝未削削域（土橋部分？）が存在する。残存する周溝の最大幅は、西溝で2.4m、南溝で3.1mである。

主体部は、確認されなかった。西溝から南溝内にかけて、遺物・礫の集中が認められる。



第355図 2号方形周溝壺 平面・エレベーション図

第2形 既開池上の遺物と遺物



第90図 2号方形周溝墓 遺物出土状況

## 2号方形周溝墓西溝北部出土の遺物

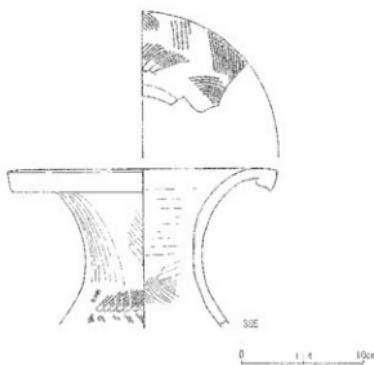
(第91図 図版34)

355は、折り返し口縁部の口縁～胴上位である。外反する口縁内面部と頭下位～胴上位の2箇所に文様帯が設定されている。

口縁文様帶は、外側に原体RLの縄文を一周させ、この内側に下端に結節部を作った原体LRの縄文をさらに一周させて羽状縄文帶を作ったものである。頭部文様帶は、下端に結節部を作った原体LRの縄文を一周させ、その下段に原体RLの縄文を一周させて羽状縄文帶を作ったものである。

文様帶以外の外面の器面調整は、口縁部は、斜位のハケの後、ナデ調整、頭部は、中位に縦位のミガキ、口縁部の張り出しにより死角となっている上位には、前段階の調整の痕である縦位のハケメが残る。

頭部内面は、横位のヘラナデが施され、口縁部文様帶の下端の一部を削している。胴上位内面は、横位のハケ調整の後、ナデ調整が施されている。



第91図 2号方形周溝墓 西溝中部 出土遺物

## 2号方形周溝墓西溝中部出土の遺物 (第92図 図版34)

356は、單純口縁を持つ球形の壺の口縁～胴上位である。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整が行われ、頭部外面は、縦位のハケ、内面は、横位のハケ調整を施した後、各々、ナデ調整が行われる。胴上位は、斜位のミガキ、内面は、横位のハケ調整である。

357は、広く外反する複合口縁壺の口縁部である。口縁上位内面に外側の端に結節部を作った原体LRの縄文を一周させ、その内側に竹管状工具を連続して刺突した文様帶が設定される。文様帶以外の器面調整は、口縁外面は、中位に横位のハケ調整を施し、その上下は、横位のナデ調整。口縁下位内面は、横位のナデ調整がなされている。

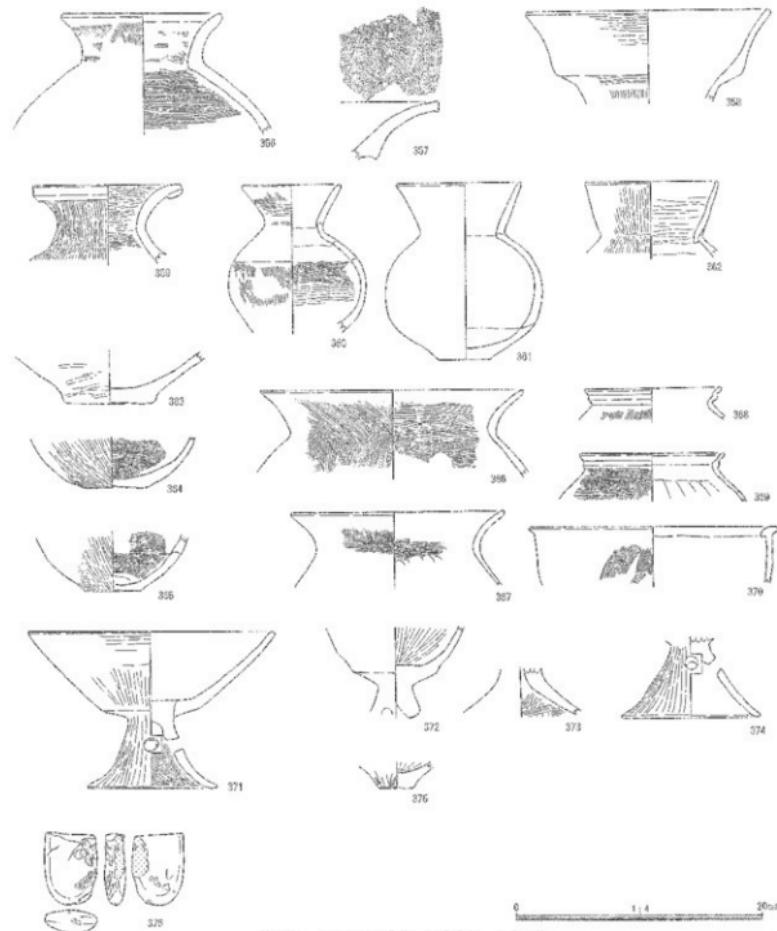
358もまた、複合口縁壺の口縁～胴上位である。残存部の内面及び、口縁上位外面は、横位のハケ調整の後、ミガキ調整が行われている。突出した口縁下端部には、横位のハケ調整、頭上位外面は、縦位のハケ調整がなされている。

359は、折り返し口縁壺の口縁～胴上位である。口唇部は、横位のナデ調整、外面は、頭中位以下外面は、縦位のミガキ調整で、口縁部の張り出しにより死角となる頭上位、頭・胴間の括れた接続部に前段階の調整の痕である縦・斜位のハケメが残る。内面は、横位のハケ調整の後、口縁では、横位のミガキ、胴上位では、ナデ調整が行われている。

360～362は、小型壺である。360は、口縁～胴下位が残存する。外面の器面調整は、全体的に縦位のハケ調整の後、口縁上・下位、胴上位において頭著に横位のナデ調整が行われる。内面は、口縁は、横位のナデ調整、胴上位は、輪積痕を残しつつ、横位のハケ調整の後、ナデ調整、胴中位は、横位のハケ調整、胴下位は、ナデ調整がなされている。

361は、口縁～底部が残存する。口縁～頭部は、若干膨らみ、胴の最大径は、中位や下寄りに位置する器形である。外面及び口縁内面の器面調整の内容は、風化により、窓い知れない。胴内面は、横位のナデ調整が行われている。

362は、口縁～胴上位が残存する。口縁～頭部は、膨らむ。頭と胴の接合箇所では、頭部を作る粘土



第92図 2号方形周溝窯 西窯跡部 出土遺物

の下端部が内側に突出したまま残される。残存部の外面の器面調整は、縦位のミガキ、口縁～脚内面は、横位のミガキ、脚上位内面は、横位のナデ調整がなされる。

363～365は、壺の胴下位～底部である。363の胴下位外面は、斜位のハケ調整の後、ミガキ調整、底部外面は、ミガキ調整、内面は、ミガキ調整が行われる。364は、一見、胴下位～底部が一体化した丸底形を呈しつつも、底部中央に狭い円形の平底を作っている。胴下位外面は、横位のハケ調整の後、斜位のミガキが施される。胴下位内面は、横位の、底部内面は、求心上のハケ調整である。365も胴下位が膨らむ器形である。胴下位外面は、横位のハケ調整の後、縦位のミガキが施される。底部外面は、ヘラケズリの後、ナデ調整が行われている。内面は、横位のハケ調整がなされている。

366～370は、壺の口縁～肩上位である。366・371は、口縁が広がり、腹部が膨らむ器形をしている。366の口唇部は、横位のナデ調整、口縁外面は、斜位、胸部上位は、方向不規則のハケ調整で、内面は、横位のハケ調整がなされている。

371は、366に比べ頸部の屈折がなだらかである。口縁上位は、内外面ともに横位のナデ、口縁中位以下外面は、縦・斜位のハケ調整、口縁中位～頸部内面は、横位のハケ調整がなされ、肩上位内面には、指頭压痕が跡なく残る。

368・369は、器壁の薄い台付壺、いわゆるS字口縁壺であり、胎土に窑母、石英、白色粒子を含む。口縁内外面、肩上位内面の横位のナデ調整、肩上位外面の縦位のハケ調整は、共通する。369の肩上位外面では、さらに横位のハケが重ねられる。

370は、括れの無い器形をしており、口唇部は、断面T字形で、内外に張り出す。内外口唇部及び肩上位内面は、横位のナデ調整、肩上位外面は、斜位のハケ調整がなされる。

371～374は、高环である。371・372は、环部の下位に屈折部を持ち、脚の上位の周囲3箇所に円孔が開けられている高环である。371は、环部口縁～脚部が残存する。外面の器面調整は、环口縁で、横位のミガキ、环体部屈折部以上で縦位のハケ調整の後、縦位のミガキ、环体部屈折部以下で横位のミガキ、脚部では、縦位のミガキが施される。内面は、环部は、ミガキ、脚部は、横位のハケ調整が行われている。372は、环部中位～脚部上位が残存する。外面の器面調整は、縦位のミガキ、环部の内面は、斜位のミガキが施されている。373は、浅く広がる脚上位で、円孔は、開けられていない。外面は、縦位のミガキ、内面は、方向不規則のハケ調整が行われる。374は、脚部が残存する。上位2箇所に円孔が開けられているが、その設定箇所は、上から見たとき、対向しているものではなく、4分した場合の隣り合う位置に相当する。外面は、縦位のヘラナデの後、縦壁部に横位のナデ調整を行う。内面も横位のナデ調整がなされる。

375は、鉢の胴下位～底部である。胴下位外面は、縦・斜位のハケ、中央が若干凹む底部外面は、ハケの後、ナデ調整が行われる。内面は、ナデ調整がなされている。

376は、扁平な円盤を素材とした敲打石である。礫の端部・側縁に連続した使用痕が残る。

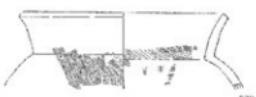
## 2号方形周溝墓南溝出土の遺物（第93図 図版34）

377は、複合口縁壺の口縁中位～頸上位である。口縁部外面は、横位のナデ調整がなされた後、垂下する沈線文が施される。頸上位外面には、縦位のハケ、口縁内面は、横位のハケ調整の後、横位のナデ調整が行われる。

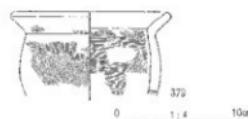


377

378・379は、壺の口縁～肩上位である。378の外面の器面調整は、口縁は、縦位のハケ調整が施された後、上中位に横位のナデ調整を行う。肩上位は、斜位のハケ調整がなされる。内面は、横位のハケ調整の後、口縁上位は、横位のナデ、肩上位には、方向不規則のヘラナデが行われる。379は、口縁内外ともに横位のナデ、肩上位外面は、縦・斜位のハケ、同内面は、横位のハケ調整が行われている。



378



0 1.4 10cm

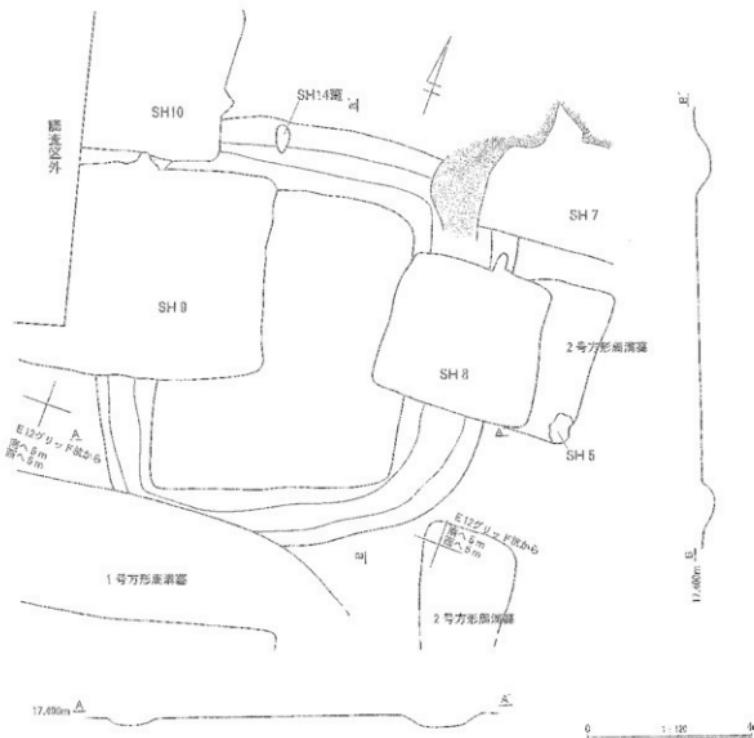
第93図 2号方形周溝墓 南溝 出土遺物

## 3号方形周溝墓（現地略号SD4 第94図）

E-11・12、F-11・12グリッドに位置する。後世の遺構掘方の重複により、不明部分もあるが、推定される平面形は、隅部が連続する方形で、南北主軸の方向は、およそN-13°-Wを指す。南側で1号周溝墓と重複し、これに切られる。

全体の規模は、南北推定10.4m、東西推定9.8m。残存する周溝の最大幅は、北溝で1.6m、東溝で2.0m、西溝で1.4m、南溝で1.5mである。比較的、残存状況が良好な北溝の断面形は、逆台形を呈す。主体部は、確認されなかった。

周溝内で出土した遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される土器の壺、瓶類で、いずれも細片で図示に増えられないものである。



第94図 3号方形周溝墓 平面・エレベーション図

## 自然流路

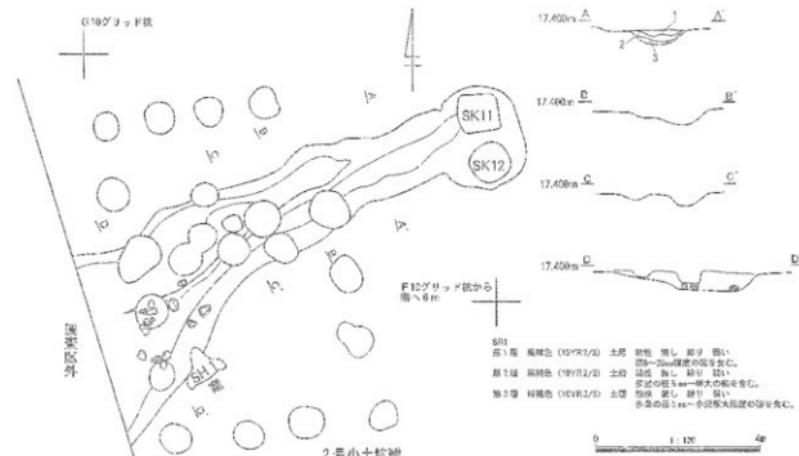
3区北部で自然流路が1条検出されている。御殿川の増水時に形成された小開析の痕とみられる。

SR1(現地略号SD1 第95図 図版15)

E-10グリッド北西部からF-10グリッド南西部に位置し、古代以降と目される土坑群と重複して、これらに切られる。

調査区境界により西側の状況は、不明である。全体的に北東-南西方向に走り、南西側へ向かうに従って、徐々に溝の幅と深度を増していく。底断面形は、不整形であり、一部、中洲状の隆起部が形成されている。

壤土中より出土した遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される土器の細片が主であるが、古墳時代後期～古代の集落分布からわずかに北へ外れ、比較的標高が高いことによって、この時期の遺物の流入を受け難い立地環境にあるため、埋没年代は、特定し得ない。



第95図 SR1 平断面・エレベーション図

## 5 遺構外出土の遺物

先述のとおり、河岸上段高地に設定された調査区2・3区では、年代が明確な遺構群として、弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期から奈良・平安時代の2時期が検出されているが、包含層出土の遺物の中には、遺構内出土遺物にみられなかった類例を補足するものや、他の時期に比定され、遺跡範囲内における人の活動の年代的広がりを示すものが含まれている。

### (1) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

#### 壺・壺類（第96図 図版35）

ここでは、基本的な器形が共通または、近似する土器の特定部位で、施された器面調整や施文のバリエーションについて記述する。

380～385は、壺の複合口縁である。上下に広く設定された外縁部について、389は、縦位のハケ調整の後、横位のナテ調整がなされる。381は、横位のハケ調整、382は、斜・横位のハケ、横位のナテ調整の後、垂下する沈線文を施す。383は、横位のハケ調整、384は、横位のナテ調整の後、断面三角形の突帯を貼付け垂下させる。383の突帯は、比較的高く、両脇は、沈線が施され、強調されている。385は、横位のナテ調整の後、円形の粘土粒が口縁下位の屈折部に貼付けられる。

386～404は、壺の折り返し口縁である。外縁部や口縁内面に文様帶を設定するなどの要素が個体により重複する。

386～390は、その残存部に文様的な要素が少ないものである。外縁部の調整は、386～389は、横位のナテ、390は、横位のハケ調整である。口縁の外反角度、広がりは、個体差があるが、共通項として、外面頸部にナテ、ミガキ調整によって無文帯を作り出し、張り出した口縁下端によって死角となる頸上位に前段階の器面調整の痕である縦・斜位のハケメが残る。

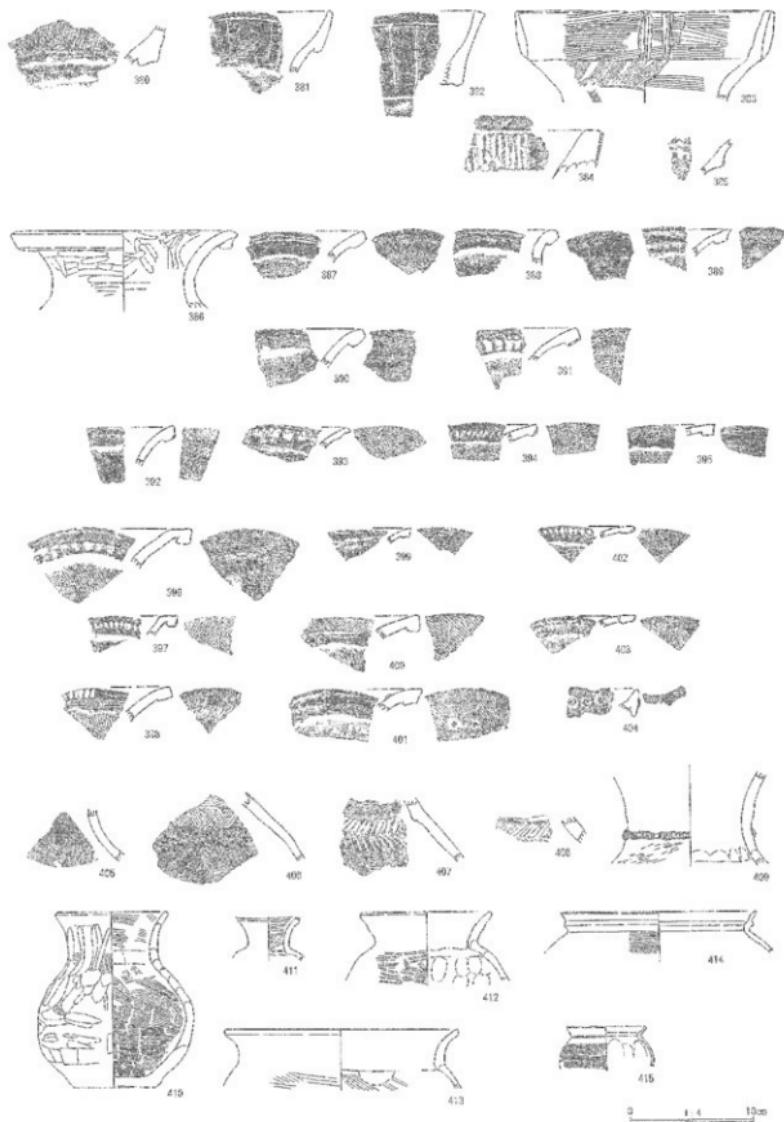
391～394・397・398・402は、外縁部に連続した刺突・押圧文が施されるものである。391・393は、予め口唇部の外縁の粘土を薄く突出させており、尖端が丸い工具を用いた刺突により押し出された粘土の継ぎつながりが波形を呈している。392・394・397・402は、同じ個体の器面調整に使われているハケ工具の尖端を折り返し口縁の下端部に連続して押し当てる。398は、限定された部分に棒状工具の外皮を押し付けている。391・393・398は、文様としての効果の程度は、不明であるが、横位に連続する指頭圧痕が残されている。

ほぼ直立する外縁の面に対し、充填された文様として明らかなるものは、395の横位の原体LRの単節繩文がある。396・400の斜位のハケメについても、作業は、丁寧であり、単なる器面調整に止まるものではないと考えられる。

396～404は、外反する口縁内面に文様帶を持っている。396・397は、口縁上位が水平面となる器形をしており、396の口縁内面は、横位のハケ調整が施され、口縁上位平坦面のハケメを残すようにして、屈折部以下に横位のナテ（消し）調整が行われる。397は、横位に原体LRの単節繩文を施す。398は、外側に1段Lを軸とし、0段rの捺糸を巻き絡ませた付加糸の原体を横位に施し、内側に6本1組の繩齒状工具をコンパス状に45～60°程度回転させた文様を連続させる。399は、横位のハケ調整の後、同じ方向に原体RLの単節繩文が施される。399・400は、原体RLの単節繩文が横位に施され、400は、円形粘土粒が貼付けられる。402・403は、外側に原体RL、内側に原体LRの単節繩文を横位に施し、羽状繩文を作る。

403は、焼成前に小さな円孔が複数開けられ、外縁には、長円形の粘土粒が貼付けられている。

404は、外縁、内面ともに繩齒状工具による繩齒状条痕文を横位に施し、外縁に連続して円形粘土粒を貼付け、これに竹管状工具による刺突を行う。



第96図 2・3次遺構外出土物（土器1）

405~409は、文様帶を持つ壺の頸下位～胴上位である。405の外面は、斜位のハケ調整の後、原体LRの草節縞文を横位に施している。内面は、横位のナデ調整。406の外面は、横位のミガキ調整の後、5本1組の柳削状工具で、横位の直線的な条痕文と波状条痕文を上下に描く。内面は、斜位のナデ調整。407の外面は、斜めに傾けたハケ工具尖端を連続して押し付け、その下位で工具先の傾きを変え、再び連続押し付け作業を行って作られた疑似(羽状)縞文帶の上下に柳削状工具による緩やかな波状条痕文が施される。内面は、横位のナデ調整。408の外面は、407と同様、ハケ工具を用いた疑似羽状縞文が施されているが、その上位側の下地には、薄く粘土が貼られており、文様帶(の上位部)が器面から突出する器形を作っている。内面は、横位のナデ調整。409の外面は、ハケ工具尖端で連続刺突された断面蒲鉾形の突起が1周貼付けられた後、その上下の器表面にミガキ調整が行われている。内面は、横位のナデ調整である。

410は、頭中位に最大径が位置する小型壺である。外面の器面調整は、口縁に横位のナデ、頸～胴上位に継位のハケ調整の後、縦位のミガキ、胴中位に横位のミガキ、胴下位に横位のナデ調整が施され、底面は、ヘラ切りされている。内面は、口縁～頸中位に横位のハケ、頸下位にナデ調整、胴上位に斜位、胴中位以下に横位のハケ調整が行われる。

411は、二重口縁になると推測される小型壺の頸～胴上位である。器壁は、丸手で焼き結り、比較的硬質感がある。外面は、継位のミガキ調整が行われる。内面側で頭と胴の接合部は、末調整であるが、頭内面は、横・斜位のハケ調整の後、横位のナデ、胴上位内面は、横位のナデ調整がなされる。

412は、短頸の壺の口縁～胴上位である。口縁は、内外面ともに横位のナデ調整、胴上位外面は、斜位のハケ調整の後、横位のミガキ調整がなされ、内面は、横位のナデ調整が行われ、輪留痕、指頭圧痕が残る。

413は、器壁が比較的薄い壺の口縁～胴上位である。口縁は、内外面ともに横位のナデ調整、胴上位内外面は、斜位のハケ調整の後、ナデ調整がなされる。

414は、S字口縁壺の口縁～胴上位である。口縁は、内外面ともに横位のナデ調整、胴上位内面は、風化のため、器面調整は、不明。外面は、縦・横位にハケ調整が施される。

415は、器壁の薄い小型壺の口縁～胴中位である。焼成の特徴は、S字口縁壺に近しい。口縁内面の湾曲は、受け口状に作られる。器内面及び口縁外面は、横位のナデ調整が行われ、胴上位には、指頭圧痕が並ぶ。胴外面は、縦位のハケ調整の後、最大径部に横位のハケメを巡らせる。

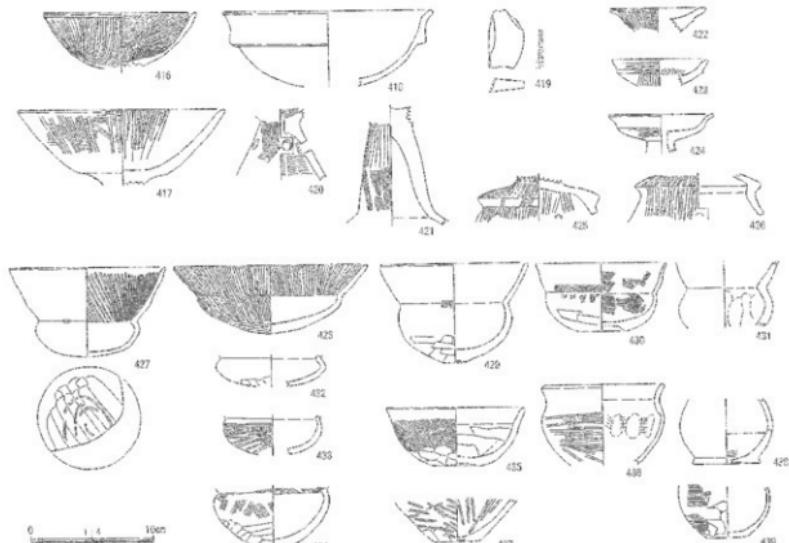
#### 高坏・器台・壇・小型の壺・甕・鉢類(第97図 国版35)

416~418は、高坏の环部である。416の外面の器面調整は、横位のヘラケズリの後、縦位のミガキ、坏上中位内面は、斜位、坏下位内面は、縦位にミガキ調整を行う。417は、坏下位に屈折部を持つ。坏上中位外面は、斜位のハケ調整の後、縦位のミガキが行われ、坏下位は、ナデ調整がなされる。内面は、縦位のミガキ調整である。418は、二重口縁を持つ。口縁は、内外面ともに横位のナデ調整、坏体部は、内外面ともにミガキ調整がされ、内面の一帯に前段階の調整の痕である横位のハケメが残る。

419は、円盤状の突堤の一部である。周縁部にハケ状工具尖端を連続して押し付け作業されたキザミが施される。

420・421は、坏底～脚下位である。420は、器中央と脚上位の周囲4箇所に円孔が開けられている。坏下位～脚下位外面は、縦・斜位のハケ調整、坏底・脚内面は、横位のハケ調整が行われる。421は、比較的長脚である。脚外面は、縦位のハケ調整の後、上位に縦位のミガキ調整が行われ、脚内面は、ヘラケズリの後、横位のナデ調整がされる。

422・423は、器台の趾部、424は、皿～脚上位である。422は、皿中位より器壁が薄くなり、緩やかな



第97図 2・3次追跡外出土遺物(土器2)

唇折部が作られ、口縁部が外反する。外面は、縦位のミガキ調整、内面は、横位のナデ調整が行われる。423は、皿中位に1条、幅広の沈線状の凹みが巡り、明確な唇折部が作られる。皿上位外面は、横位、下位内外面は、縦位のヘラナデが行われ、皿上位内面は、横位のナデ調整がなされる。424は、器中央に円孔が貫通し、皿中位に唇折部が作られる。残存部は、全体的に横位のナデ調整がされる。

425・426は、周囲に円孔が開けられた加飾台形の脚上位である。外面は、縦位のミガキ、内面は、425は、縦位のナデ、426は、ミガキ調整である。

427～431は、最大径が口縁にある壺である。

427の焼成は、薄手硬質で、胎土は、非常に緻密であり、当該地域の土器と明らかに様相が異なっており、搬入品とみられる。体部が比較的扁平の丸底壺形である。最終的な基盤調整の際に死角となって、工具尖端が及ばなかった頭部外面に前段階の調整である縦位のハケメが残るが、口縁内外面、体上位外面は、横位のヘラナデが施され、口縁内面には、さらに放射状のミガキが加えられる。体下位～底部外面は、一方向にヘラケズリを整形した後、同心円状にミガキ調整が行われる。

428は、全体的に扁平で丸底の器形で、口縁内外面、体上位外面は縦位のミガキ、体下位～底部内面は、横位のミガキ調整が施され、体内面は、ナデ調整である。

429は、底部が若干凹む器形で、外面の器面調整は、口縁～体上位で横位のナデ、体中位以下は、横位のヘラケズリ調整。内面は、口縁で斜位のハケ調整がなされた後、横位のナデ、体部以下は、横位のナデ調整が行われている。

430は、体下位より、粘土を厚く貼付けながら、底中央部は、空けて、凹んだ底を作り、その凹みの縁を面取りして強調する。口縁下位～体上位(頸部)に前段階の調整である縦・斜位のハケメが残り、口縁上中位内外面、体下位内面は、横位のナデ、体下位外面は、横位のヘラケズリの後、ナデ調整がなされる。

421の外面の器面調整は、横位のナデ調整、口縁内面は、横位のミガキ、体部には、指頭圧痕が残る。

432・433は、丸底をした壺の扁平な体部で、432の内面及び体上中位外面は、横位のナデ調整が施され、体下位～底部外面は、ヘラケズリで整形されている。433の外面は、横位のミガキ、内面は、横位のナデ調整がされる。

434は、ヘラケズリされて作られた平底を持つ壺の口縁下位～体部で、体上中位外面は、斜位のハケ調整、体下位外面は、横位のヘラケズリが行われ、口縁下位内面は、横位のハケ、体内面は、横位のナデ調整がなされる。

435～439は、小型の鉢・壺・壺形土器である。

435は、底部に凹みを削り出した小型鉢の口縁～底部で、外面の器面調整は、括れる体上中位に前段階の縦位のハケメを残し、口縁は、横位のナデ調整がなされ、胴下位は、横位のヘラケズリにより整形される。内面は、横位のナデ調整である。

436は、比較的扁平な小型壺の口縁～胴下位である。口縁～頸部は、内外面ともに横位のナデ調整がなされ、胴部外面は、斜位のハケ調整の後、横位のミガキ調整が行われる。胴内面は、横位のナデ調整が施され、上中位に前段階の調整の痕である横位のハケメが残る。

437～439は、小型壺の胴～底部で、437・438の底面は、中央部が削り取られ、高台状を呈す。437は、下へ窄まる壺形の胴下位～底部で、外面は、胴最下位部を横位にヘラケズリして整形した後、横位にヘラナデを行う。内面は、縦位のミガキ調整である。438は、胴中位が膨らみ、底部が張り出す錐形をしており、外面は、ミガキ調整、内面は、横位のナデ調整で、胴最下位の一部に前段階の調整の痕である横位のハケメが残る。439は、平底で、肩部が膨らむ壺形である。外面は、横位のヘラケズリとハケ調整が施され、内面は、ナデ調整がされる。

## (2) 古墳時代後期～中近世の遺物

### 土師器・瓦・土製品・かわらけ類（第98図 図版36・37）

440・441は、土師器の丸底の壺である。ともに体中位以下を横位のヘラケズリにより整形する。口縁内外面は、横位のナデ調整、体内面には、横位のミガキ調整がなされる。

442は、土師器の壺の胴下位～底部である。胴下位外面は、縦位のハケ調整の後、斜位に格子状のヘラミガキが施される。底部外面には、木葉痕が残る。胴下位内面は、横位のハケ調整、底部内面は、ナデ調整が行われる。

443は、小型の壺の胴中位～底部である。胴部外面は、横位のナデ調整がされ、胴最下位では、横・斜位のヘラケズリによる整形が行われる。底部外面には、木葉痕が残る。胴中位内面は、横位のナデ調整がなされるが、輪穂痕が残される。胴下位～底部内面は、斜位のヘラナデ調整が行われ、底部中央に盛り上がる。

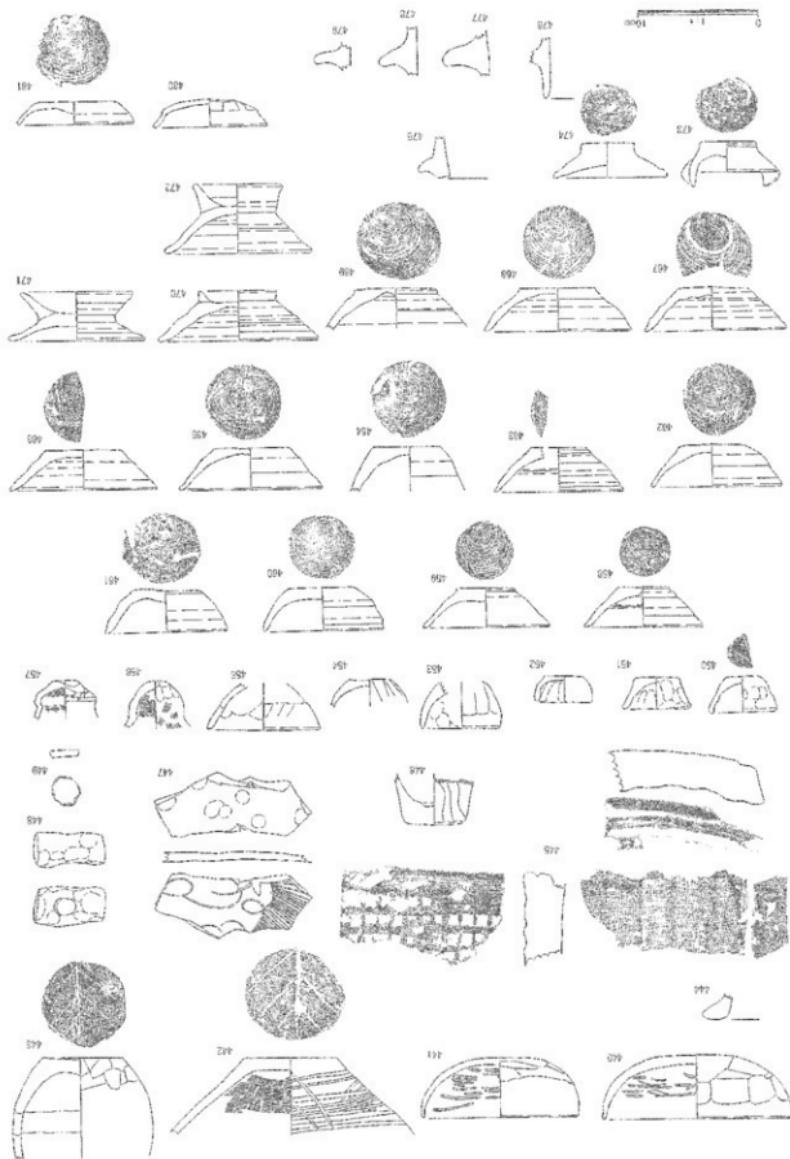
444は、土師器の壺の口縁部で断面形逆三角形を呈し、残存部の器面調整は、内外面ともに横位のナデ調整である。

445は、古代に比定される、三重弧文瓦平瓦の一部である。四面に布目、凸面に格子叩きが認められる。1区（旧河道）で出土した瓦類に比べ、残存している割合が高く、表面には、流唐痕も観察されず、二次焼成とみられる変色、煤の付着が観察されることから、近隣の寺院・窯（跡）より廃物が運び込まれ、甕の石などとの部材として、使用されたものと考えられる。

446は、土師器の支脚型土器の上位部である。頂部の平坦面は、ナデ調整、側縁部は、縦位のヘラケズリの後、横位に櫛齒状工具による調整、内面は、横位のナデ調整が行われる。

447は、土師器の皿または、壺の底部である。胎上、焼成の特長が当該地域の土器のものと異なり、

2 • 3 区国际象棋(王锐·范)



(鐵内周辺からの)搬入品であるとみられる。内面中央側に橢円、外縁側に放射状の暗文が描かれる。外縁には、指頭圧痕が残る。

448は、径2.5cm程度の断面円形の粘土棒の側縁に穴があけられた土製品である。全面的に指頭圧痕が残る。

449は、土師器の裏の胸部破片の周縁を意図的に折り取って作成された円盤である。元の上器の外側は、ハケ調整、内面は、ナデ調整が行われている。

450~457は、手捏ねのミニチュア土器である。450~455は、鉢、456・457は、甌を模している。450~452は、口縁～底部が残存する。

450・451は、平底で、450の底部外面には、木葉痕が残る。450・451ともに体部外面に指頭圧痕が残り、450の内面は、横位のナデ調整が行われ、451の内面は、外面同様、指頭圧痕が残る。

452は、比較的扁平な体部が若干膨らむ器形をしており、底部外面は、中央部が若干凹み、幅広の高台状を呈す。体部外面は、ナデ調整、内面には、指頭圧痕が残る。

453は、若干内湾する器形で、口縁～下位が残存する。内外面ともに指頭圧痕が残る。

454は、体中位～底部が残存する。底部外面は、平底であるが若干上げ底気味に内湾する。体部外面は、縦位のヘラケズリにより整形され、内面は、横位のナデ調整がされる。

455は、口縁～体下位が残存する。上方に開きながら膨らむ器形をしている。体部外面は、輪積痕を残し、横・斜位のナデ調整が行われ、内面は、上位に横位のナデ調整がなされ、下位に指頭圧痕を残す。

456は、口縁下位～底部が残存する。口縁下位～胴上位外面に縦・斜位のハケ調整がされ、胴中位以下外面に丸底を作った整形作業に伴う指頭圧痕が隙間なく残る。口縁下位内面は、横位のナデ、胸部内面は、横位のハケ調整の後、ナデ調整が行われる。

478は、口縁下位～底部が残存する。底部外面中央部に凹みを削り出す。体部に焼成後、意図的に開けられた不整形の穿孔が認められる。口縁下位は、内外面とともに、斜位のハケ調整の後、横位のナデ調整がなされ、体部外面は、ヘラケズリにより整形され、内面は、横位のハケ調整の後、中位の張り出しがナデ調整を行っている。

458~479は、10世紀後半～11世紀代に比定される土師器の製品である。

458~469は、底面に糸切痕が残る甌である。いずれも、口径10~12cm、器高3.5cm前後、口縁径と底径の比は、2対1内外であり、口縁～体部の内外面は、梗體回転に伴う横位のナデ調整がされている。

470~472は、高台を持つもので、高台の高さ、容器部の深さが各々異なり、470は、高台甌（または、碗）、471は、脚高高台甌、472は、脚高高台甌と器種を分けられる。器表面の調整は、先述の甌と同様、内外面ともに横位のナデ調整である。同様の器形をした灰釉陶器の模倣と考えられるが、底部外面に回転糸切痕は、残されていない。

473は、耳皿である。底部が厚い、（元々が）径9cm程度の皿の向かい合う口縁を対にして直上に折り曲げている。底部外面は、ヘラ切りされている。

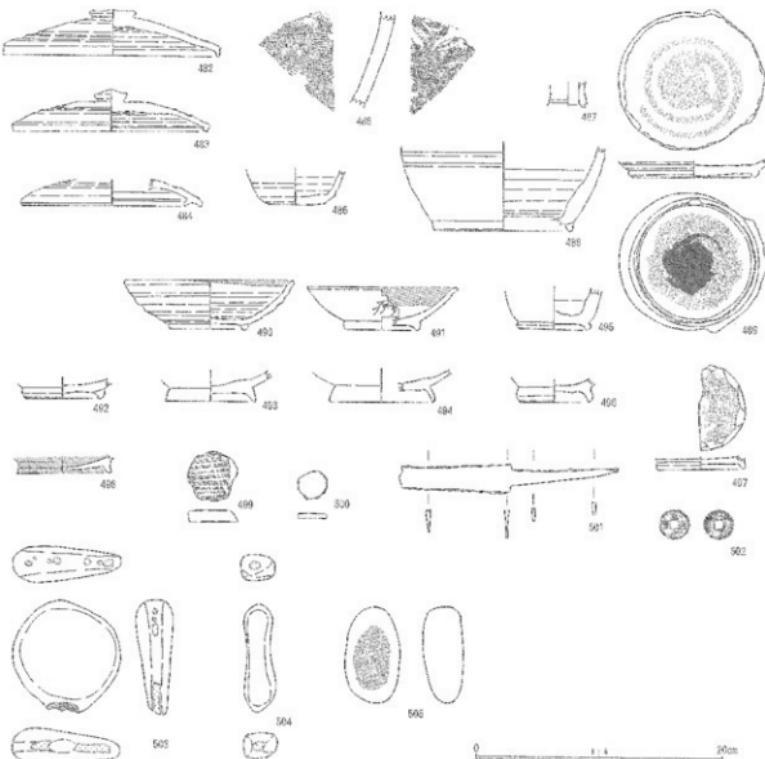
474は、柱状高台である。柱体部外面に斜位のヘラナデの痕が残る。口縁内外面及び柱体部内面は、横位のナデ調整がなされる。底部外面には、回転糸切痕が残る。

475は、いわゆる清郷型甌の口縁部である。残存部の器面調整は、内外面ともに横位のナデ調整である。口唇部に炭化物の付着が認められる。

476~479は、羽釜の羽部である。476に残存する口縁部の形状は、ほぼ直立している。

480・481は、中世に比定されるかわらけの皿である。

480は、体部と底部の間にやや突出した扁曲部を持つ器形で、底部外面は、細かいヘラケズリによって丸底状に整形されている。口縁部は、内外面ともに横位のナデ調整がなされる。見込み中央に横断す



第99図 2・3区遺跡出土遺物（土器4・金属製品・石製品）

るよう指ナデ痕が着けられることから、13世紀前半に比定される。

481の口縁～体部は、内外面ともに横位のナデ調整が行われる。底面外周には、回転糸切痕が残る。

#### 須恵器・灰釉陶器・陶器・金属製品・石製品（第99図 図版37）

482～489は、須恵器の製品である。

482～484は、杯蓋である。482は、扁平な宝珠形の縫部を持ち、天井部は、内外面ともに横位のヘラケズリで整形を行い、同方向のナデ調整が仕上げる。483は、宝珠形の縫部を持つ。484は、返り蓋の天井下位～縫部である。483・484ともに天井部は、内外面ともに横位のナデ調整が行われ、外面に自然種の付着が認められる。

484は、大甕縁の胸部である。外面には、叩き痕が残り、斜位のハケ調整が施される。内面には、横位のナデ調整がされる。

486は、無高台の杯または、壺の体（胴）下位～底部である。内外面ともに横位のナデ調整が施され、底面は、ヘラ切りである。二次焼成による煤の付着がある。

487は、瓶子の頸下位である。内外面に自然釉の付着が認められる。

488は、幸の胴下位～高台部である。内外面ともに横位のナデ彫整がされる。胴下位外面で横位のヘラケズリによる斂形が行われている。

489は、壺の底部を素材とした転用観である。高台の付根より上位の体部を折り取って、円形に整形している。内外面両側で、使用による摩滅面が発達しており、外側の中央に墨が付着している。

490～497は、灰釉陶器である。胎土の特徴より、490～494が旅指、495・496が助宗、497が宮口古窯廠の製品とみられる。

490～494・496・497は、高台杯（碗）で、各々底面には、回転糸切痕が残される。492の底面外面には、丸トテンが付いたままになっており、494・496には、朱墨が付着している。491の体部外面に墨書きが確認されるが、内容は、不明である。497は、高台付根より体部を折り取り整形した転用観で、内面側が摩滅している。

495は、壺の胴下位～高台部である。底面は、ヘラ切りされている。

498は、縁釉陶器の碗の体下位～高台部である。内外面ともに粒が掛る。

499・500は、陶器片の周辺を折り取り加工した、円盤である。499は、中世瀬戸系陶器の卸皿底部片を、500は、近世瀬戸美濃庄陶器で内外に鉄釉が掛けられた壺の底部を素材としている。

501は、鉄製の刀子である。

502は、近世銭貨の寛永通寶である。銭鋳より、いわゆる古寛永（初鋳1636年）にあてられる。

503は、肩平、504は、細長い円碟を素材とした敲打石である。各々、縁・端部に使用痕が発達しており、503の端部には、強い作業によって生じたとみられる剥離面がある。

505は、軽石円碟を素材とした石製品である。摩滅面が広く形成されている。

## 第IV章 まとめ

齊木原遺跡は、三島市南二日町に所在する御殿川中流の蛇行帯の東岸部に立地し、東西約240m、南北約200mの範囲に埋蔵文化財包蔵地が広がっている。過去、南北の縁辺部で三島市教育委員会が調査主体となった、遺跡範囲確定のための試掘や宅地造成工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代～古代の遺物の出土が報告されているが、いずれも旧河道部に限定された調査であった。

今回の調査対象地は、遺跡の西半において、蛇行する河川の上下流を直線的に繋ぐ流水路設定箇所であったため、元流路方向に対し直交する形で、河岸部を約160mに渡り横断する発掘が出来た反面、その幅は、10～20mに限定されており、同じ崖線上の遺構分布の確認範囲は、極めて狭いものとなった。よって、遺跡全体を俯瞰した遺構配置の変動については、普及出来ない。

### 第1節 古墳時代後期～奈良・平安時代の集落

遺構として確定された、古墳時代後期～奈良・平安時代の比定される住居跡21軒の帰属年代の内訳は、7世紀前半2軒、8世紀前半以前（7世紀末～8世紀前半・8世紀前半としたものを含む）11軒、8～9世紀1軒、10世紀前半2軒、10世紀後半以降1軒、特定不可4軒である。包含層遺物として取り上げられている土器の中には、10世紀後半～11世紀代に比定される土師器が多く含まれており、これと同じ年代に設定される住居は、竈部分のみの検出に止まっていることから、後の烟作に伴う削平、擾乱によって失われた、極端な深度が比較的浅かった平安中期以降の遺構の存在が窺える。

遺構内外の出土遺物の中に、当該地域の8世紀後半～9世紀代に比定される土器群を構成する鞍東型坏は、明確に認められず、これに並行する長胴壺、甲斐型坏も極めて少量である。よって、今回の調査対象区内の土地利用状況について、奈良時代後期～平安時代前期には、過疎的であったと言える。

微高地に営まれていた集落の年代の下限は、当該範囲に限れば、11世紀代と推定されるが、13世紀前半に比定されるかわらけの出土をみており、遺跡全体では、断続的に中世に下る可能性がある。

今回調査された古代の住居跡は、全て微高地南部の調査区（3区）に立地していた。いずれも方形ないし長方形の堅穴に竈が1基壁部に設置されるものであり、竈とそれが付属した遺物掘方の位置関係が明確な住居は、13軒あり、東壁に竈が設置された1軒（SH10）を除き、12軒は、北壁に竈が設置されている。当該地域の他の遺跡で多く認められている事例と同様、堅穴の内外に柱穴に相当する土坑が検出されていない。また、明確な周壁溝の掘込みも確認されなかった。

建物拡張を行ったとみられる住居が4軒ある。内3軒（SH11・13・16）は、東西の掘方の幅をほぼそのままにして、南側1方向を拡げ、ほかの1軒（SH9）は、均等に周辺4方向を拡張掘削している。SH16を除いて、抜張部底面の高さは、新しく設定された床面に合わせられており、その結果、旧住居掘方と拡張部掘方の立面上の重なりには、チラス状の段差が発生している。

竈が設置される反対側の拡張であっても、床面の上昇が生じた場合は、竈の作り換えが必要となることから、単純な部分的改築に止まらないことが予想される。生活面（床面）の上昇を居住者または、建設者が志向したと仮定した上で、南方向に拡張を行っている3軒の住居が、住居分布範囲の中で、比較的標高が低い南側に集中していることを考えると、立地的に水害被災後の復旧や事前の浸水対策を念頭にした工事であった可能性が指摘出来る。

年代・立地条件の差違によるものが否か不明であるが、3区北側の住居の竈3基（SH1・SH2・SH6）は、その構築において、マサ材・土器片を用いた煙道部の補強を行っている。

今回の調査で住居として最も古く位置付けられるSH15の方形をした遺構プランの一辺は、7mを超える比較的大きなものである。7世紀代の駿東・伊豆北部地域において、同様の規模の大きい堅穴建物については、西南町伊豆通信病院遺跡18号住居や三島市安久川崎原遺跡II号住居などの事例がある。

同じ年代に比定されるもう1軒の住居跡SH17の堅一辺の長さは、SH15の半分以下であり、SH15の南北4mに主軸方向をほぼ同じくして、見掛け上並んでいる。

青木原遺跡は、伊豆諏訪郡が置かれたとされる現三島市街中央部と田方郡衛比定地に挙げられる中島B遺跡上舞台地点の丁度中間地点に当たる。住居群の年代観は、いわゆる律令期を中心であるが、官衙に開拓する遺構（大堤の獨立社建築・区画施設）は、まったく検出されておらず、遺物も墨書きのある灰釉陶器が1点、須恵器・灰釉陶器の転用鏡、朱墨が付着した灰釉陶器片が数点、縦縫陶器が1点あるほか、帶金具の類は、出土していない。瓦は、旧河道内の漂着物と、部材として持ち込まれたとみられる単独物のみであり、威信財的なものとして、灰釉陶器を模倣したとみられる土師器の耳皿が1点挙げられる程度である。全般的な性格として、一般的な集落を越える要素は、見出せない。

南西の外れに位置するSH20は、規模こそ他の住居とはほぼ同じであるが、棚を持つ建物構造や、竈廐絶時の焼成室内への土師器裏片の入れ込み、仏具である須恵器瓦鉢や祭祀具としてのミニチュア土器を出土するなどの特徴性が認められる。

瓦鉢は、僧侶が所持する仏具であり、駿東・北伊豆地域では、宮士市東平遺跡（8世紀）、沼津市東畠毛遺跡（9世紀以降）、三島市伊豆国分寺跡代地点（10世紀中葉）西南町間宮川向遺跡（8世紀末～9世紀前葉）、伊豆の国市花坂島崎古窯（8世紀後半～9世紀前半）、清水町外原遺跡（9世紀前半）などでも出土している。

手捏ねのミニチュア土器は、古代では、喪祭などに用いられることが良く知られており、墓内での土器検出も何等かの祭祀行為と考えられ、1住居内で、仏教と在来信仰が同時存在していたことになる。その複合の事実から、この住居の居住者は、集落内の宗教行為を避け負った私度僧のような人物と推定され、他の集落生活者との生活様式の差違が住居の建物構造に反映したと考えられる。

## 第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓の遺物の埋没状況について

3区中央で検出された方形周溝墓の周溝に平面的に重複している遺物取り上げは、先述のとおり遺物包含1層の緻密な観察、検討を行わないまま実施したため、同じ周溝内においても、離れている遺物同士の・括弧性、前後関係の特定は、出来ていない。

上器と共に大量の拳～小児頭大の躰も出土しているが、この大きさの躰は、微高地上で自然に採取されるものではなく、川岸部より選ばれ、持ち込まれたと考えられるものである。

1・2号方形周溝墓から出土した土器の多くは、古墳時代前期大廓式期に比定されるが、1号方形周溝墓では、北東隅を中心とした遺物集中から若干外れて、他地域からの搬入品である弥生時代後期、箱清水式土器に比定される広口釜（81図294）、菊川式土器の特長を持つ複合口縁壺（88図353）が出土している。この2点の年代観は、集中部の土器に対し先行し、周溝の埋没または、土器の投棄が長期に渡っていたことを窺わせる。

現地調査及び本報告書の作成にあたっては、以下の方々に御指導・教示・助言を頂いた。ここに記して御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

浅野毅　芦川忠利　菊田宗　篠原和大　藤谷昌彦　山田康雄　山本憲一　渡井英尋

## 参考文献

- 芦川忠利 池谷初恵 1996 「西大久保・奈良指向跡」三島市教育委員会
- 芦川忠利 尾駄達義 1996 「長伏穴・畠田遺跡」三島市教育委員会
- 芦川忠利 (株) 東日 2006 「第2回 青木原遺跡第2地点」
- 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告X-1』 三島市教育委員会
- 芦川忠利 辻真人 池谷初恵 1995 「三島代官所・市ヶ原廐舎跡遺跡!」 三島市教育委員会
- 池谷初恵 1995 「第IX章 第3節 伊豆国における奈良平安時代の土器相 三島市芯」出遺跡を中心として』 『大堀川遺跡群』 三島市教育委員会
- 岩本 貴 1998 「御岡原流域遺跡群IV」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 勝又直人 2002 「静岡県における古代仏教遺物の移祀」 『研究紀要9』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 2005 「古代出土瓦鉢研究の現状と課題」 『研究紀要11』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 木ノ内義昭 2002 「第VI章 考察 第1節 猿須器流入以前～律令時代の土器相 一主として富士郡指定地の出土遺物からー」 『東平遺跡 第16地区(二日市施寺跡)』、第27地区発掘調査報告書 富士市教育委員会
- 梅生直彦 2005 「縄をもつ零穴建物跡の研究」 六一書房
- 佐野五十子 1996 「伊豆国」『国・一氣・七道の様相ー』 日本考古学会三重県実行委員会
- 佐野五十二 俊藤正人 1997 「道下遺跡」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白津 崇 1995 「古墳時代後期の旅落」 『古墳時代の集落』 古跡叢書 静岡県考古学会
- 杉浦幸男 1995 「御殿川流域遺跡群III」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 中嶋部夫 田村隆太郎 1998 「静岡縣」『豪族居館をめぐる諸問題』 東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会
- 鈴木敏中 2003 「第4章 真内寺院・吉田の諸相 第1節 伊豆・駿河東部」
- 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』 静岡県教育委員会
- 鈴木敏中 国本範之 池谷初恵 1990 「三品大社境内遺跡」 三島市教育委員会
- 鈴木敏中 国本範之 前嶋秀張 池谷初恵 1989 「安久遺跡」 三島市教育委員会
- 2004 「第1節 中島B遺跡上舞台地点」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告X』 三島市教育委員会
- 鈴木敏中 佐々木知子 2002 「第2節 青木B遺跡」 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告VI』 三島市教育委員会
- 2003 「箱根田遺跡」 三島市教育委員会
- 酒川裕市郎 1993 「穀束型の环」 『静岡県考古学研究14』 静岡県考古学会
- 長父重蔵 山内昭二 鈴木敏中ほか 1983 「中島下舞台遺跡」 三島市教育委員会
- 長野康敏 羽島雄子ほか 1984 「伊豆通信病院敷地内遺跡」 静岡県教育委員会
- 橋本敬之 1993 「御殿川流域遺跡群I」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1994 「御殿川流域遺跡群II」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 原 茂光 池谷初恵 2002 「史跡北条氏邸発掘調査報告 御所之内遺跡第13次発掘調査報告」 藩山町教育委員会
- 松原彰子 2005 「2 南部フォッサマグナ地帯 2-3 駿河湾沿岸」
- 町田洋 松田時彦 海津正論 小泉武栄編『日本の地形5 中部』 東京大学出版社
- 森政史 山田芳治 小金澤保雄 1994 「花坂島古跡発掘調査報告書」 伊豆長岡町教育委員会
- 山内昭二 鈴木敏中 2006 「第1節 向山古墳群1・2号墳」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告X-1』 三島市教育委員会
- 山本憲一 1995 「静岡県下の6~7Cの土器相」『東日本土器研究4』 京国土器研究会
- 渡井英喜 1996 「東駿河における布留式併行期の様相(前)ー土器編年との設定ー」
- 『静岡県考古学研究28』 静岡県考古学会
- 1997 「弥生・古墳時代編 丘出上遺物 上庄器編年」『海戸遺跡』 富士宮市教育委員会

## 付編 静岡県三島市青木原遺跡出土木材の樹種

小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県三島市南二日町の青木原（あおきばら）遺跡から出土した弥生時代後期～近世以降の木材95点の樹種を調べた。青木原遺跡は標高18mほどの扇状地～冲積平野に相当する位置にあり、御殿川の河川改修工事に伴って発掘されたものである。木製品等は主に河道跡から出土しており、その時代は弥生時代後期～古墳時代前期（27点）、古代・中世（3点）、中・近世（31点）、近世以降（34点）と主に4つの異なる時期のものである。また、それらの材は杭（35点）、板材・板状の材（14点）、木梁類（19点、うち漆塗9点）、由物や舟物の部材、建築部材など多岐にわたる。これら95点から以下の24の樹種が同定された（表1）。これら24樹種の識別の根拠となった形質について略記し、用材等について考察を試みた。

### 同定された樹種

#### 1 カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科

年輪界の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかである。早材、晩材とも仮道管は整然と並び、樹脂細胞はない。仮道管の内壁には顯著な2～3本ずつまとまらせん肥厚がある。放射組織は單列で背は低く、分野壁孔は小さなヒノキ型ないしトウヒ型で、一分野あたり2～4個ある。以上の形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イヌマキ、イスガヤ、イチイに似るが、前二者は年輪が不明瞭で樹脂細胞が均一に散在していること、イチイは仮道管内壁のらせん肥厚が2～3本ずつまとまるところなく、常に単独であること、等により区別される。

カヤは本州から九州にかけての暖温帯に広く分布する針葉樹で、材質が特に優れていることから建築材、器具材によく用いられ、特に仏像などの彫刻材によく用いられる。当遺跡出土材は中・近世の板状の加工木製品1点である。

#### 2 イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch. イヌガヤ科

大変室が硬く粘りがある針葉樹材で、年輪は極めて不明瞭、晩材と認められる部分はほんのわずかである。イヌマキ同様樹脂細胞が多く、年輪内に均一に分布している。樹脂細胞の水平壁は数珠状に肥厚する。仮道管内壁には顯著ならせん肥厚があるが、カヤのように2、3本ずつまとまるではなく、また、螺旋も水平に近い方向に巻く。放射組織は單列で背が低く、柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のトウヒ型で、一分野あたり1～2個ある。以上の形質から、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。

イヌガヤは本州から九州の暖温帯に分布する小高木で、変種のハイイヌガヤが本州から北海道の多雪地帯に分布する。材質が硬く粘りがあるので縄文時代から古代にかけて全国的に丸木弓に多用されるとともに杓子、匙などの木器にも用いられる。当遺跡出土材は中・近世の漆塗りの杓子で材質に見合った利用と言える。

#### 3 イヌマキ属 *Podocarpus* sp. マキ科

材が均質で年輪界のはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は大変緩やかで、晩材部がはっきりと認められない。樹脂細胞が多く、年輪内全体に均一に散在する。樹脂細胞にはスギ科やヒノキ科のもののように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることなく、横断面では接線方向に径が小さく、薄壁

表1. 阿賀川流域遺跡群・古木原遺跡 動植物目録一覧表

学名 英名 種類	種類	遺物名	時代	精査箇所	回定 資料 No.	種類	詳細	遺物名	時代	精査箇所番号
0650 キギ	根状	切り欠き断材	弥生後期	第18回 167	8702 アヌテロ	根	枯状	野生松脂	第17回 153	-古墳時期
0651 キギ	茎葉群	燃燒材料	弥生後期	第18回 166	8703 ヒノキ	燃燒材料	枯	弥生後期	第17回 151	-古墳時期
0652 キギ	角材群	加工角材	弥生後期	第18回 168	8704 キギ	根状	切り欠き断材	野生後期	第18回 169	-古墳時期
0653 キギ	根	根	近世以降	第 9回 26	8705 キギ	根状	燃燒材料	野生後期	第15回 170	-古墳時期
0654 シキミ	根	透徹山脈	第 6回 14		8706 アヌテロ	根	透徹	中・近世	第16回 135	-古墳時期
0655 シキミ	根	透徹山脈	第 9回 23		8707 キギ	根状	透徹	中・近世	第15回 126	-古墳時期
0656 シキミ	根	透徹山脈	第 9回 22		8708 ケヤキ	透徹	透徹	中・近世	第16回 137	-古墳時期
0657 シキミ	根	透徹山脈	第 8回 15		8709 キギ	根状	透徹不規則	中・近世	第15回 122	-古墳時期
0658 イスマ斗笠	根	根	近世以前	未確認	8710 カヤ	根状	透徹加工	中・近世	第12回 172	-古墳時期
0659 キギ	角材群	角材	近世以前	第17回 159		木製品				
0660 キシナ?	根	根	近世以前	未確認	8711 ヒノキ	根状	根状	中・近世	第15回 124	-古墳時期
0661 クリ	根	透徹	近世以前	第 6回 27	8712 ヒノキ	根状	根状	中・近世	第15回 123	-古墳時期
0662 アカマツ	根	透徹	近世以前	第 9回 26	8713 ヒノキ	根状	透徹	中・近世	第15回 127	-古墳時期
0663 ヒノキ属	根	透徹	近世以前	第 9回 25	8714 キギ	根状	透徹	中・近世	第15回 142	-古墳時期
0664 シキミ	根	透徹	近世以前	第 9回 22	8715 キギ	根状	透徹	中・近世	第16回 143	-古墳時期
0665 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 17	8716 キギ	根状	透徹	中・近世	第15回 134	-古墳時期
0666 クマシ節	根	透徹	近世以前	第 9回 21	8717 アヌテロ	透徹	透徹	中・近世	第15回 126	-古墳時期
0667 シキミ	根	透徹	近世以前	第 9回 18	8718 カラマツ	透徹	透徹	中・近世	第15回 131	-古墳時期
0668 シキミ	根	透徹	近世以前	第 9回 19	8719 ヒノキ	木製品	透徹	中・近世	第15回 127	-古墳時期
0669 イスマ斗笠	根	透徹	近世以前	第 9回 20	8720 カラマツ	木製品	透徹	中・近世	第15回 142	-古墳時期
0670 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 12	8721 カラマツ	木製品	透徹	中・近世	第16回 143	-古墳時期
0671 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 9	8722 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 145	-古墳時期
0672 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 8	8723 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 129	-古墳時期
0673 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 8	8724 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 132	-古墳時期
0674 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 7	8725 トウヒ属	木製品	透徹	中・近世	第15回 133	-古墳時期
0675 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 6	8726 トウヒ属	木製品	透徹	中・近世	第15回 142	-古墳時期
0676 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 3	8727 トウヒ属	木製品	透徹	中・近世	第15回 144	-古墳時期
0677 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 9回 1	8728 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 128	-古墳時期
0678 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 10	8729 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 145	-古墳時期
0679 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 9	8730 キギ	木製品	透徹	中・近世	第15回 126	-古墳時期
0680 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 8	8731 カラマツ	木製品	透徹	中・近世	第15回 146	-古墳時期
0681 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 7	8732 カラマツ	木製品	透徹	中・近世	第15回 149	-古墳時期
0682 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 6	8733 キギ	木製品	透徹	中・近世	第16回 150	-古墳時期
0683 シキミ?	根	透徹	近世以前	第 8回 5	8734 キギ	木製品	透徹	中・近世	第16回 159	-古墳時期
0684 シキミ?	板状	板状	弥生後期	第18回 175	8735 キギ	板状	透徹	中・近世	第17回 169	-古墳時期
0685 フナ風	木器	漆片	中・近世	第16回 135	8736 キギ	板状	透徹	中・近世	第15回 129	-古墳時期
0686 ハトノキ	木器	漆片	中・近世	第15回 135	8737 アヌテロ	板材	有孔器具	透徹	第17回 165	-古墳時期
0687 ケンボナシ属	木器	漆片	中・近世	第15回 141	8738 キギ	板状	漆片	野生後期	第17回 154	-古墳時期
0688 ケンボナシ属	木器	漆片	中・近世	第15回 160	8739 キギ	板状	漆片	野生後期	第15回 144	-古墳時期
0689 トチノキ	木器	漆片	中・近世	第16回 139	8740 キギ	板状	漆片	野生後期	第15回 128	-古墳時期
0690 シキミ?	木器	漆片	中・近世	第 6回 16	8741 カラマツ	木器部	下歯	中・近世	第16回 149	-古墳時期
0691 キギ	角材群	角材	弥生後期	第17回 157	8742 カラマツ	木器部	下歯	中・近世	第16回 147	-古墳時期
0692 ヒノキ属	板状	板状	弥生後期	第18回 175	8743 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 159	-古墳時期
0693 クリ	根	根	近世以前	第 9回 24	8744 キギ	木器部	下歯	中・近世	第15回 150	-古墳時期
0694 シキミ?	根	根	近世以前	第 6回 16	8745 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 147	-古墳時期
0695 シキミ?	根	根	近世以前	第17回 157	8746 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 159	-古墳時期
0696 ニノキ	板状	板状	中・近世	第18回 174	8747 キギ	木器部	下歯	中・近世	第17回 171	-古墳時期
0697 ムクロジ	角材群	角材	弥生後期	第17回 156	8748 キギ	木器部	下歯	中・近世	第15回 144	-古墳時期
0698 ツツジ属	根	根	近世以前	第 6回 28	8749 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 149	-古墳時期
0699 クマノミズキ属	根	根	近世以前	第 6回 13	8750 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 145	-古墳時期
0700 シキミ?	板状	板状	中・近世	第15回 173	8751 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 147	-古墳時期
0701 シキミ?	板状	板状	中・近世	第15回 174	8752 キギ	木器部	下歯	中・近世	第16回 159	-古墳時期
0702 ムクロジ	角材群	角材	弥生後期	第17回 156	8753 キギ	木器部	下歯	中・近世	第17回 169	-古墳時期
0703 ムクロジ	根状	漆片	弥生後期	第16回 176	8754 キギ	木器部	下歯	中・近世	第17回 170	-古墳時期
0704 キギ	部材	漆片	弥生後期	第17回 162	8755 キギ	木器部	片口	弥生後期	第15回 121	-古墳時期
0705 キギ	部材	漆片	弥生後期	第17回 151						

であることで仮道管と区別される。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い單列で、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、一分野あたり1～2個存在する。以上の形質から、マキ科のイタマキ属の材と同定した。

イタマキ属には関東地方南部の温暖地に生育するイタマキとさらに南方に分布するナギの2種があるが、その分布から当遺跡出土材はイタマキと考えられる。当遺跡出土材は弥生時代後期～古墳時代前期の棒状1点と近世以降の杭2点である。前者は丸木弓等との関係が考えられる。

#### 4 モミ属 *Abies* マツ科

垂直・水平両樹脂道をともに持たない年輪が明瞭な針葉樹材。仮道管は整然と並び、早材から晩材への移行は緩やかでスギに似る。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁に多くの单穿孔がみられる。分野壁孔は小型のスギ型で、一分野に2から4個。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

モミ属には多数の種があり、材構造では互いの樹種と区別は出来ないが、本州、四国、九州の暖温帯に広く分布するモミがもっとも普通なものである。モミ材は大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多いようで、当遺跡出土材は古代・中世の箸1点と、中・近世の板状の材1点でこれらもスギの代用と見られる。

#### 5 カラマツ *Larix kaempferi* (Lamb.) Sarg. マツ科

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直樹脂道をとりまくエビセリウム細胞とからなる針葉樹材。早材の終わりから晩材に垂直方向の樹脂道が散在し、放射組織には水平樹脂道がある。早材から晩材への移行は急で、ふつう1、2細胞で移行する。早材は径の大きな薄壁の仮道管からなり、壁の厚い晩材の仮道管とは対照的である。放射組織の上下縁には放射仮道管があり、孔口の大きな有縁壁孔対が見られる。分野壁孔はヒノキ型で小さく、一分野に2～4個。これらの形質からカラマツの材と同定した。

カラマツは本州中部の亜高山帯に分布する落葉針葉樹で、木材が商品として流通するようになってからの利用が認められる。材は耐朽性があり、建築部材、各種器具材に用いられる。当遺跡出土材は古代・中世の箸と中・近世の曲物側板各1点であるが、いずれも余り適した材の選択とは言い難い。

#### 6 トウヒ属 *Picea* マツ科

カラマツ同様、仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直樹脂道をとりまくエビセリウム細胞とからなる針葉樹材。早材の終わりから晩材に垂直方向の樹脂道が散在し、放射組織には水平樹脂道がある。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。早材の仮道管径は小型で、晩材とは壁厚の変化によって区別される。放射組織の上下縁には放射仮道管があり、孔口の狭い有縁壁孔対が見られ、しばしば孔口縁には突起があることからカラマツと区別される。分野壁孔はヒノキ型で小さく、一分野に2～5個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部にトウヒ属の樹木はトウヒ、バラモミ、ハリモミなど幾つかの種があるが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは冷温帯から亜高山帯にかけて生育することから、カラマツ同様、木材が商品として流通するようになってから利用されたとと考えられる。当遺跡出土材は中・近世の円盤2点で、曲物や桶などの底蓋板と思われる。そうだとすると質の良いものとは言えない。

#### 7 アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともに持つ。樹脂道の周辺には、壁の薄いエビセリウム細胞がある。早材から晩材への移行は緩やかで、年輪界は明瞭である。放射組織には、上下に放射仮道管があり、その水平壁は、鋸角な鋸歯状に肥厚している。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で普通一分野につき一つ存在する。以上の形質より、マツ科のアカマツの材と同定した。

アカマツは北海道南部から九州にかけての冷温帯から暖温帯に普通に生える針葉樹で、特に二次林に多い。材は重硬で樹脂が多く加工性は悪いが保存性はよく、建築材、器具材等広範な用途がある。特に水湿に強いことから上木用材によく用いられ、本遺跡出土材も近世以降の杭1点である。

#### 8 スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don スギ科

水平・垂直の両樹脂道をともに持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急あるいはやや急で年輪界は極めて明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。放射組織は、単列で放射柔組織のみからなる。分野壁孔は、大型のスギ型で一分野あたり通常2個存在している。以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギ材は青森県南部から九州屋久島まで広く分布し、大材が得やすく、建築材を始め、各種器具材に繩文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。当遺跡出土材は弥生時代後期～古墳時代前期の建築部材、板材など、中・近世の下駄や建築部材など22点と最も多い。

#### 9 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科

スギ同様、水平・垂直の両樹脂道をともに持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭だが、晩材部が少ないので色彩は大きく違わない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキヘトウヒ型。通常一分野に2個存在する。これらの形質から、ヒノキ科のヒノキの在と同定した。

ヒノキ材は遺跡出土材ではしばしば保存性が悪く、分野壁孔が明瞭に観察されないことがあり、年輪の詰んだスギやサワラなどとの区別が困難な時がある。ヒノキ属としたものがこれに該当する。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島まで分布し、特に中部地方の山地帯に多い。その材はわが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたもので、古代の畿内地方を中心とする大型の建築物の建築材や各種器具材、織工物、木簡や形代、豪華、曲物など、広く用いられている。当遺跡出土材は中・近世の曲物や箱物に関連すると思われる板材など10点である。

#### 10 アスナロ *Thujopsis dolebrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科

ヒノキに似た仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行はやや急で、偏平な細胞からなる晩材部の量は3～4細胞幅で少ない。樹脂細胞は晩材部にわずかに散在する。樹脂細胞の水平壁は厚く単壁孔を持つ。放射組織は単列で、ほとんどは2～4細胞高である。分野壁孔は小さく、また開孔部が狭いトウヒ型～ヒノキ型で1分野あたり2～4個みられる。早材部仮道管の直径が細いこと、分野壁孔が小さく開孔部が狭いことなどからヒノキから区別される。

アスナロ（変種のヒノキアスナロ＝ヒバ、アテも含む）は北海道南部から九州までの温帯に広く分布する針葉樹で、材は硬く、保存性がよい。本遺跡出土材は弥生時代後期～古墳時代前期の杭状や部材、中・近世の漆塗や曲物などの底板などである。

#### 10' ヒノキ科

保存が不十分で分野壁孔が十分に観察されないものをヒノキ科とした。スギからは樹脂細胞の水平壁

が数珠状に肥厚する事で区別される。

#### 11 クマシデ属クマシデ節 *Carpinus sect. Distegocarpus* カバノキ科

小型（直径約30～60 μm）で丸い管孔が単独あるいは数個放射方向に複合し、放射方向に波打って散在する散孔材で、管孔の直径は年輪の後半で徐々に減少する。木部柔組織は接線状。道管の穿孔は数本の横擋からなる階段状と單一の両方がある。道管相互の壁孔はやや大きく（直径約5 μm）、交互状で密に配列する。放射組織は同性にちかい異性で、2～3細胞幅である。これらの形質からクマシデ属クマシデ節の材と同定した。

クマシデ節にはクマシデとサワシバがあり、温帯の落葉樹林に広く見られる。いずれの材も硬く粘りがあり、柄物、各種器具材に利用される。本遺跡出土材は近世以降の杭材1点である。

#### 12 クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科

小型（直径約30～60 μm）でまるい管孔が、単独あるいは放射方向に数個複合し、それが集まって放射方向の帯をなして配列する放射孔材。道管の穿孔は單一で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。木部柔組織は接線状～短接線状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は同性で、1～3細胞幅のものと、大型の集合状のものとからなる。これらの形質からカバノキ科クマシデ属のイヌシデ節の材と同定した。

イヌシデ属にはイヌシデ、アカシデなどがあり、何れも暖帯温帯に広く分布する落葉広葉樹で、特に二次林に多い。いずれの材もやや硬く緻密で弾力があり、柄物などに用いられる。本遺跡出土材は近世以降の杭3点で、手近にある木を利用した結果と考えられる。

#### 13 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪の始めには大型（直径約200～350 μm）のやや放射方向にのびた丸い管孔が単独で1～3層に配列し、晩材部にかけて管孔は小型（直径約20～50 μm）で薄壁となり、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は接線状～短接線状に配列する。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状、あるいは柵状となる。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道南部から九州まで分布する落葉高木で、二次林に最も普遍的な種の一つである。材はやや硬く、割裂容易で、保存性にすぐれ、特に水湿に強い。大材が得られることもあって建築材、器具材、土木用材など実にさまざまな用途がある。当遺跡出土材は近世以降の杭2点である。

#### 14 スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科

年輪の最初に中程度の丸い道管が間隔を置いて主に1層に配列し、そこから順次徑を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多數集まって火炎状となる環孔材で、時にクリによく似る。導管の穿孔は單一、放射組織は単列同性である。これらの形質からスダジイの材と同定した。

スダジイは東北地方南部以南の主に沿岸地の照葉樹林を構成する主要樹種で、変種のイタジイ（コジイ）は材に集合放射組織が出ることでスダジイと区別される。材質はクリとは比べものにならないくらい劣り、当遺跡出土材も近世以降の杭1点のみである。

#### 15 ブナ属 *Fagus* Fagaceae

小型でやや角張った道管が、単独あるいは2個複合し、均一に散在する散孔材で、道管径は年輪の終わりに向かってかなり小さくなる。道管の穿孔は単一あるいは横擋が十数本からなる階段状である。放

射組織は平伏細胞と上下端のみ直立細胞の異性で、1~14細胞幅からなり、大きな放射組織が目立つ。道管と放射組織間の壁孔は大型のレンズ状である。これらの形質からブナ科ブナ属の材と同定した。

ブナ属には温帯に広く分布するブナと、主に太平洋側の温帯に分布するイヌブナがあるが、イヌブナの資源量は少ないこともあって、木材としての利用はほとんどがブナと考えられている。ブナ材は硬く緻密で割理性はよいが保存性に劣る、当遺跡出土材は中・近世の漆片1点で、これは樹種がブナ(属)であることから挽物碗の破片であるとかんがえることが出来る。

#### 16 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材である。道管の穿孔は單一、道管内壁にらせん肥厚はない。本部柔組織は接線状で比較的目立つ。放射組織は單列のものと複合放射組織があり、径面では特有の紋様をなす。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

アカガシ亜属(カシ類)はブナ科コナラ属のうち、常緑の樹種からなる亜属で、全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林を構成している。多数の種があり、材構造での種の識別は出来ていない。関東南部以南の弥生時代～古墳時代の木製農具はほとんどのこの材で出来ており、当遺跡出土材は弥生時代後期～古墳時代前期の鐵木製品と板状及び板材の破片の合計3点で、これらも全国的な傾向と一致すると言える。

#### 17 ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

年輪始めに大道管が1層に並ぶ環孔材で、晩材部には薄壁多角形の小道管が多数集まつた塊が分布する。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁には頗著ならせん肥厚がある。放射組織は3~6列の多列で背は低くほぼ同性、上下の縁に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県以南の暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、しばしば大木となる。材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、剣物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。特に漆器木地には绳文時代前期以降現在まで一貫して利用されてきている。当遺跡出土材は中・近世の漆器碗と下駄の2点である。

#### 18 シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. シキミ科

薄壁多角形の微細な道管が單独で年輪内に均一に分布する散孔材で、特に年輪始めにやや大きい道管が一列に並ぶ性質がある。道管の穿孔は横棒が多い階段状である。放射組織は1~3細胞幅で特に2列のものが多く、背は低く、典型的な異性で、多列部は平伏細胞、單列部は直立細胞からなり、多列部は單列部よりわずかに幅広いだけである。これらの形質からシキミ科のシキミの材と同定した。シキミ?としたものは、保存が不十分でシキミとは断定できないが、恐らくシキミであろうと判断したものである。

シキミは暖温帯の照葉樹林を特徴づける樹種の一つで、千葉県南部以西に分布する常緑低木～小高木である。材は堅く緻密で粘りがあり、割れにくく、小細工もの、柄物などに使われる。枝葉を仮前に供する特用があり、屋敷内や墓地等での植栽がよく見られる。当遺跡からはシキミ?を含めて近世以降の杭20点が出土した。

## 19 カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科

薄壁の角張った小道管がほぼ單独で密に散在する散孔材で、道管の直徑は年輪のおわりで緩やかに減少する。道管の穿孔は20~40本ほどの横棒からなる階段状で、内部にはチローシスが著しい。放射組織は異性で2細胞幅、1~4細胞高の單列部と数細胞高の多列部からなり、道管との隙間は対列状~階段状である。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

カツラは北海道から九州までの温帯に広く分布する落葉高木で、水辺に多く、時に大木となる。材は均質で軽軟、加工しやすいが保存性は劣る。建築材、各種器具材に広く用いられる。本遺跡出土材は中・近世の下駄1点で、材質に合った利用で、ホオノキの代用とも考えられる。

## 20 ムクロジ *Sapindus mukorossi* Geertn. ムクロジ科

年輪の始めに丸い大道管が1~3層あり、晚材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊をなす環孔材で、木部柔組織は周囲状及び独立帶状で、特に後者はしばしば極めて幅広くなり、晚材部でよく目立つ。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁には余り目立たないがらせん肥厚がある。柔組織は明確な階段状を示さず、放射組織は2~4細胞幅で背はあまり高くなく同性、接線面での輪郭がでこぼこして不整である。以上の形質からムクロジ科のムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東南部以南の暖帯に生育する落葉広葉樹であるが、多くは神社、お寺、屋敷林などにあって普通の山林に見かけることは少なく、日本に本来自生しているものではない可能性が考えられる。材は軽軟で肌目粗く、脆いのでたいした用途はない。むしろ、実を石鹼の代用（サボニンを含む）にしたり、種子を羽根つきの羽根の玉にしたりする。当遺跡出土材は弥生時代後期~古墳時代前期の板状と角棒状の木材2点である。

## 21 トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

単独あるいは数箇が放射方向に複合した薄壁で扁円形の小道管が均一に散在する散孔材で、年輪は目立たず、道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がかすかに見えることがある。放射組織は単列同性で階層状配列する。道管~放射組織間壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状、密に並ぶとヤナギ科の蜂の巣状の壁孔に似てくる。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯に広く分布する落葉高木で、しばしば巨木となる。種子は有毒のサボニンを含むがこれを晒して取り除けば優良なデンプンが多量に取れる。材は肌理細かく柔らかく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分に使われることがあるが、主に剣物、挽物、漆器木地などに縄文時代前期から非常によく利用されてきている。本遺跡出土材は中・近世の漆器2点である。

## 22 ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科

大型で厚壁のまるい管孔が、単独あるいは2~3個放射方向に複合して年輪界にそって1~3列配列し、その後、やや角張った管孔がゆるやかに径を減じながらまばらに散在し、晚材部では小型（直徑約20~50μm）で厚壁で丸い管孔が単独あるいはおもに放射方向に2~数箇複合してまばらに散在する環孔材である。道管の穿孔は單一、小道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状で、晚材では量が多くなり圓状~連合圓状に配列する。放射組織は異性で1~5細胞幅、1~3細胞高の單列部をもつ。これらの形質からクロウメモドキ科のケンボナシ属の材と同定した。

### 23 クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall. ミズキ科

丸い小道管が單独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪界は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は1から3細胞幅で典型的な異性、上下に暁列の翼部がある。これらの形質からミズキ科ミズキ属のうちの、クマノミズキあるいはヤマボウシの材と同定した。

クマノミズキは成長の早い落葉高木で、ヤマボウシはおおむね樹高10m、直径40cm以下の落葉小高木である。両種とも本州から九州にかけての暖帯～温帯に広く分布するが、クマノミズキは西日本に多く、ヤマボウシはやや冷涼な地方が多い。材質は硬くて重く、ヤマボウシは特に堅くて粘りがあり、柄物に重用される。当遺跡出土材は近世以降の杭が1点である。

### 24 ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科

繊細な道管がほぼ單独で年輪内に均一に分布する散孔材で、道管径は年輪内ではほとんど変わらない。道管の穿孔は階段状で、横棒の数はそれほど多くない。放射組織は異性で単列と3～5細胞幅程度の多列のものがあるが、多列のものは接縫面で見た時、偏った分布を示す。これらの形質からツツジ科ツツジ属の材と同定した。

ツツジ属には常緑のシャクナゲの仲間や落葉のミツバツツジの仲間など実に多数の種があるが種の識別は出来ていない。いずれも落葉低木～小高木で、材を特に利用することは余り無い。本遺跡出土材は近世以降の杭1点である。

#### 出土材の樹種組成

以上の同定結果を、資料番号順に表1に、時期及び用途別に表2に示した。遺物の出土遺構及び土層から、弥生時代後期～古墳時代前期、古代・中世、中・近世、近世以降の4つの時期に区分し、また、木材の器種や形態から角材棒（細長く、削取られた材）、建築材（桟子、柱材等）、杭、板状（板の形をしているもの、大きな板材では造築材など、薄い板材は舟物や箱物の部材であるかもしれない）、部材（整形された材で、組み物、指物などの部材と考えられるもの）、曲物等（曲物、桶などの側板や底、蓋材など）、漆器（椀あるいは、皿、折敷などの破片と思われるもので塗りりのあるもの）、木器類（下駄、箸、柄杓など）、その他（栓、木釘）に分けた。

弥生時代後期～古墳時代前期の材は27点あり、角材棒、板状、建築材で19点となり、そのうち12点がスギ材、他はカシ類が2点、ムクロジが2点、ヒノキ属・ヒノキ科が2点、イヌマキ属が1点である。スギ材が卓越するのは他の静岡県内のこの時期の遺跡と全く一致する。カシ類2点は板状で、農具の破片かもしれない。木器類はカシ類の銀未製品とスギの片口各1点で、これも登呂、山木遺跡などと一致する。

古代・中世の木器類3点とはいざれも箸で、ヒノキ、カラマツ、モミ属と、バラエティに富んだ樹種が使われているのには驚く。

中・近世の材は31点で、ヒノキが9点と最も多く、板状、舟物等の他、孔の開いた漆塗りの板と柄杓の柄がある。前者は舟物や答御度品の部材かもしれない。ヒノキに次いで多いのはスギの5点で、下駄が2点、木栓が1点あり、これも普通に見られる用途と言える。その他、アスナロが円板（曲物等の底板？）、漆碗に、トワヒ属2点がやはり円板に、そしてカラマツ属1点が曲物側板に使われており、多様な針葉樹がこれらの用途に使われていたことが分かる。今度は漆器の樹種という点から見ると、9点のうち、アスナロ、ヒノキの他、ケヤキ、ケンボナシ属、トチノキ、ブナがあり、現在と全く同じ用材と言える。下駄はスギの他はカツラとケヤキがあり、カツラは既に述べたようにホオノキの代用である

ことが考えられる。

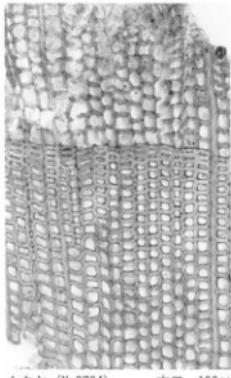
近世以降の木材は34点全てが杭材である。うち、20点がシキミ、クマシデ類のイヌシデ類が3点、クマシデ類が1点、イスマキ属が2点、スダジイ1点、クリ2点、その他アスナロ、ヒノキ属、アカマツ、クマノミズキ類、ツツジ属が各1点である。これを見ると、まず、シキミが多用され、これはいずれも直徑の小さい丸木の材で、他の材も多くは直徑の小さい丸木材の利用で、それは遺構自体が小規模なものであることを窺う。いずれも農家などの屋敷内やその周辺に植栽あるいは生息している樹木から枝を切り取って杭として打ち込んだ、手軽な利便であったように思われる。

以上、青木原遺跡の弥生時代から近世以降までわたる出土材の樹種を見たが、試料数が少ないと時期が幅広くしか決められないためはっきりとした傾向は出せないが、特徴的なのは、カラマツやトウヒ属など、生育地が奥地に限られるものが平地の遺跡にあったこと、また、アスナロの漆塗などはひょっとしたら石川県輪島での製作（能登の檜材を利用か？）も考えられることなど、木材及びその製品の広域の流通を窺わせる結果である。

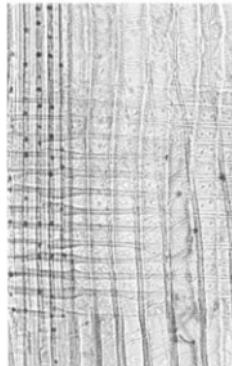
表2. 御殿川流域遺跡群・青木原遺跡出土木材の樹種組成

樹種	弥生後期～古墳前期					古代・中世 木器類					中・近世					近世以降					総計
	角材	板	板状	部材	木器類	小計	曲物等	漆塗	板状	部材	木器類	その他	小計	柱	梁	板	柱	梁	柱	梁	
スギ	6	4	3	4	1	19						1	1	2	1	3				22	
アカガシ葉櫟			2		1	3															3
アスナロ			1	1		2			1	1							2				5
ムクロジ	1		1			2															2
ヒノキ属			1			1										1	1				2
イスマキ属	1																				3
ヒノキ属			1			1															2
ヒノキ																					2
トウヒ属																					2
ケヤキ																					2
ケンボナシ属																					2
トチノキ																					2
カラマツ																					2
イヌガヤ																					1
カツラ																					1
カヤ																					1
ブナ属																					1
モミ属																					2
シキミ																					2
イヌシデ属																					20
クリ																					20
アカマツ																					5
クマシデ属																					2
クマノミズキ属																					2
ツツジ属																					1
スダジイ																					1
総計	7	5	1	7	5	21	27	3	7	9	7	1	5	2	31	34	95				

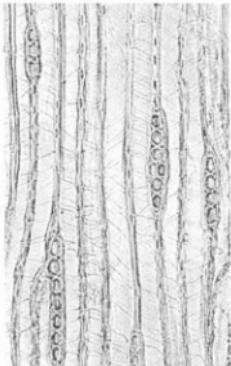
弥生後期～古墳前期？、シキミ？、ヒノキ科？はそれぞれ弥生後期～古墳前期、シキミ、ヒノキ科に含めた



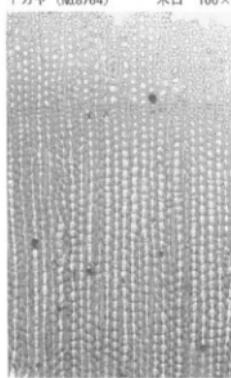
1 カヤ (No.8764) 木口 100×



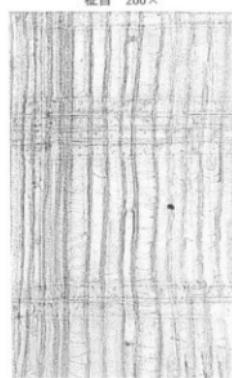
径目 200×



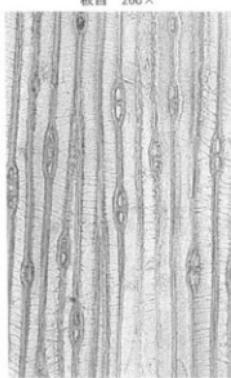
板目 200×



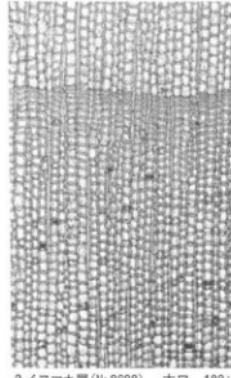
2 イヌガヤ (No.8794) 木口 100×



径目 200×



板目 200×



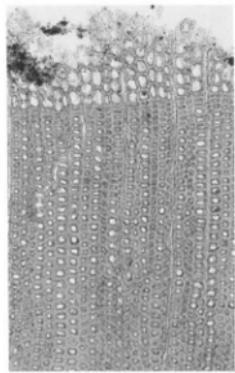
3 イヌマキ属 (No.8688) 木口 100×



径目 200×



板目 200×



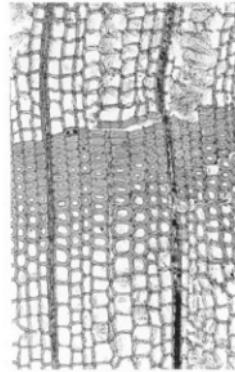
4 モミ属 (No.8791) 木口 100×



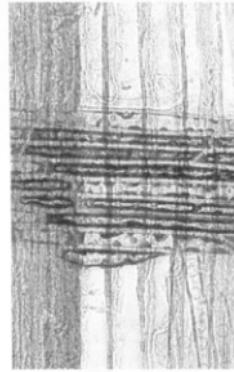
径目 200×



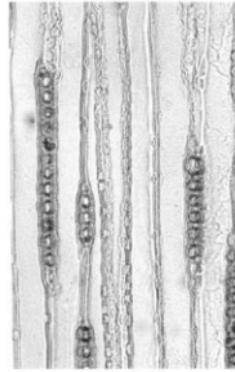
板目 200×



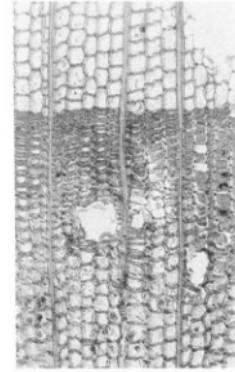
5 カラマツ (No.8792) 木口 100×



径目 200×



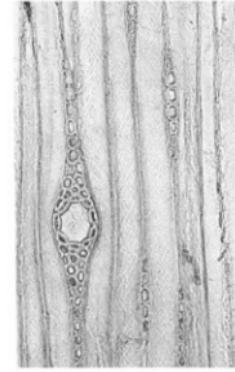
板目 200×



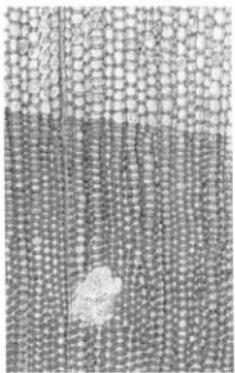
6 トウヒ属 (No.8797) 木口 100×



径目 200×



板目 200×



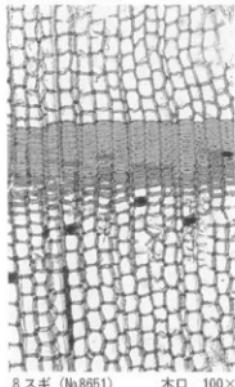
7 アカマツ (No.8662) 木口 100×



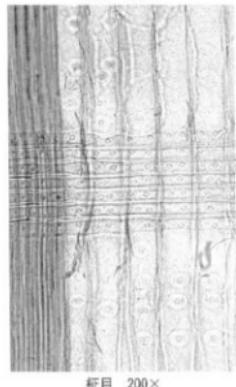
径目 200×



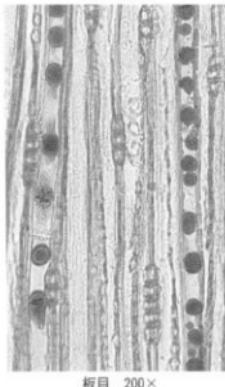
板目 200×



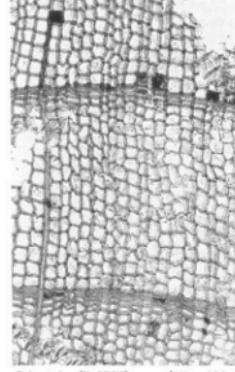
8 スギ (No.8651) 木口 100×



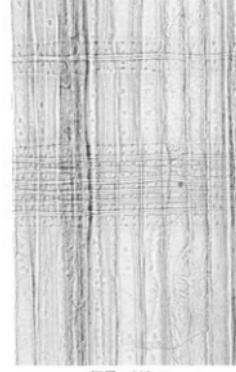
径目 200×



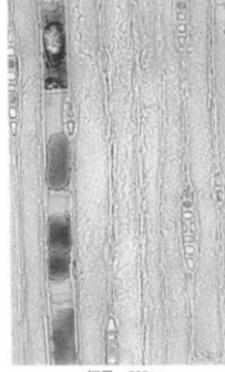
板目 200×



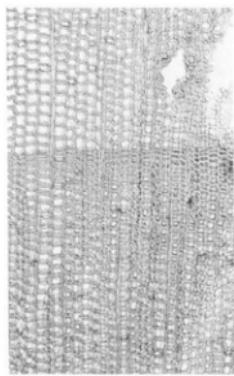
9 ヒノキ (No.8765) 木口 100×



径目 200×



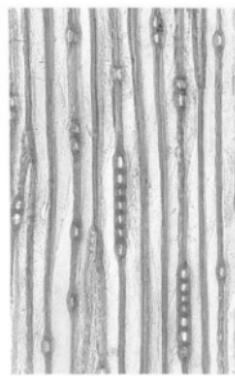
板目 200×



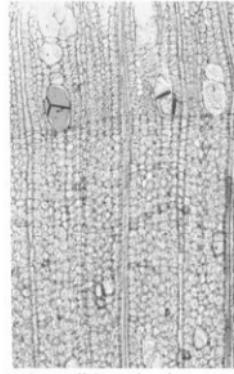
10アスナロ (No.8807) 木口 100×



柾目 200×



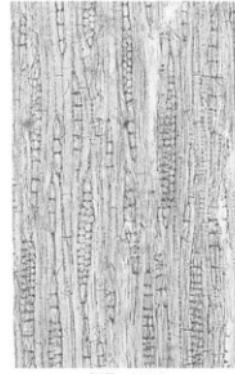
板目 200×



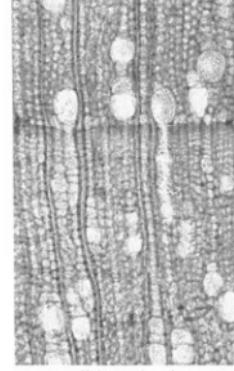
11クマシデ節 (No.8665) 木口 100×



柾目 200×



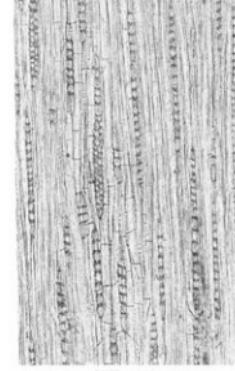
板目 100×



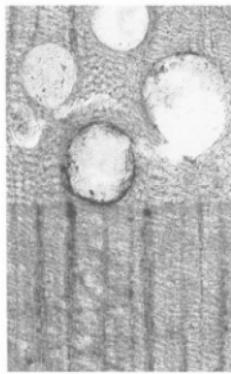
12イヌシデ節 (No.8679) 木口 100×



柾目 200×



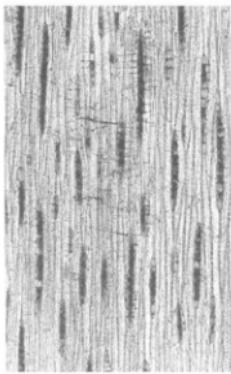
板目 100×



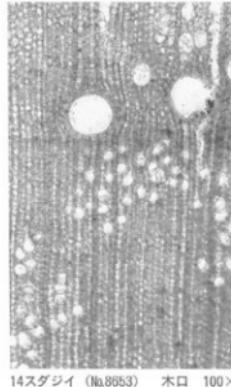
13クリ (No.8689) 木口 100×



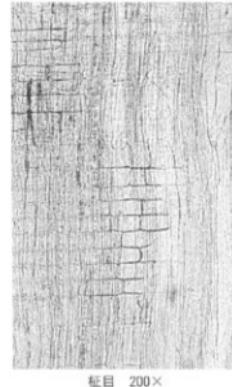
14スダジイ (No.8683) 板目 200×



15ブナ属 (No.8683) 板目 100×



13クリ (No.8689) 木口 100×



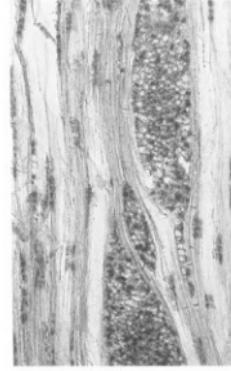
14スダジイ (No.8683) 板目 200×



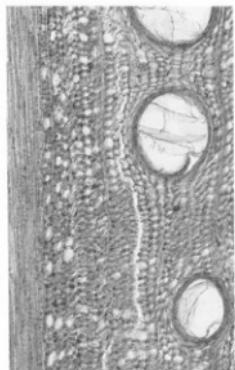
15ブナ属 (No.8683) 板目 100×



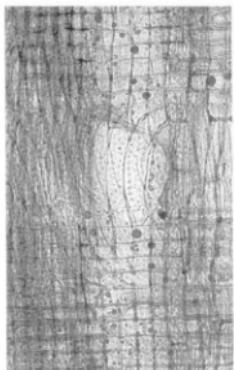
13クリ (No.8689) 板目 200×



15ブナ属 (No.8683) 板目 100×



16アカガシ亜属 (No.8809) 木口 100×



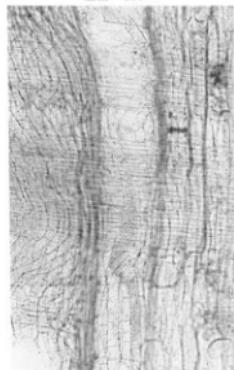
桿目 200×



板目 100×



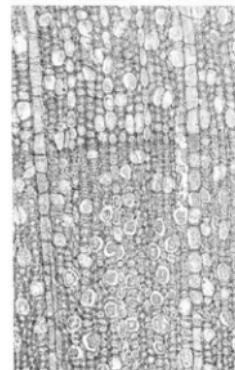
17ケヤキ (No.8802) 木口 100×



桿目 100×



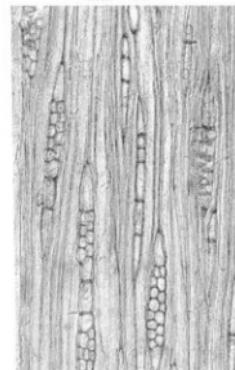
板目 100×



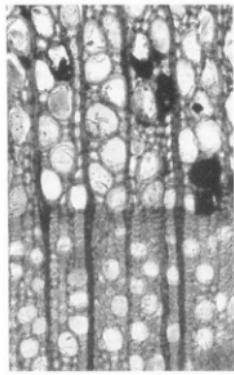
18シキミ (No.8657) 木口 100×



桿目 200×



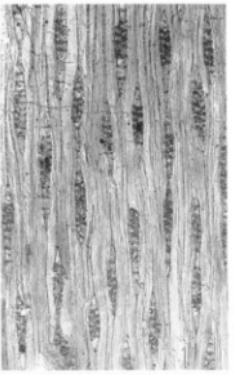
板目 100×



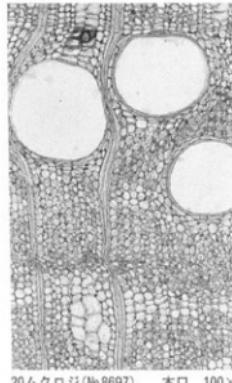
19カツラ (No.8801) 木口 100×



20ムクロジ (No.8697) 種目 100×



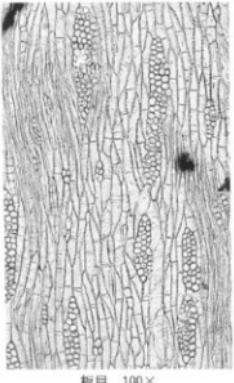
21トチノキ (No.8684) 板目 100×



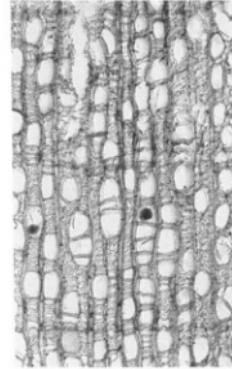
20ムクロジ (No.8697) 木口 100×



21トチノキ (No.8684) 種目 100×



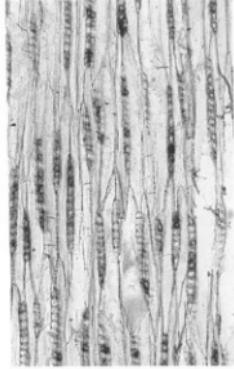
21トチノキ (No.8684) 板目 100×



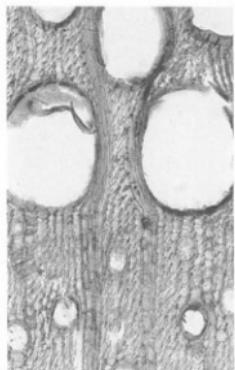
21トチノキ (No.8684) 木口 100×



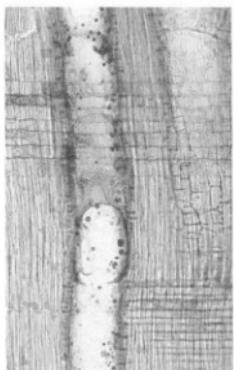
21トチノキ (No.8684) 種目 100×



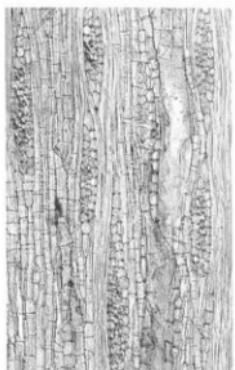
21トチノキ (No.8684) 板目 100×



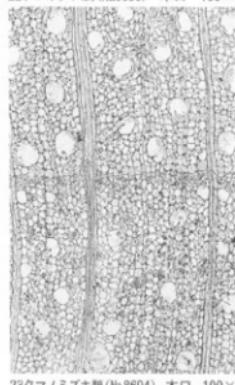
22ケンボナシ属(No.8886) 木口 100×



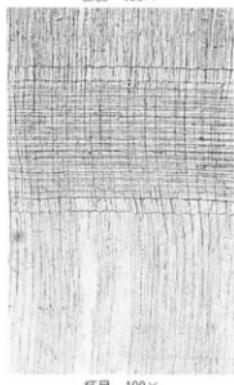
径目 100×



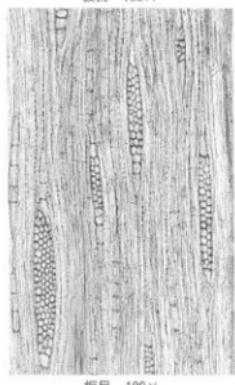
板目 100×



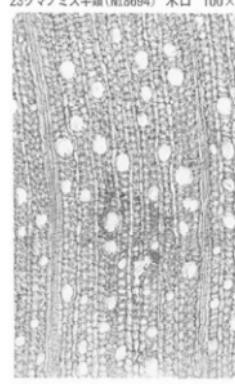
23クマノミスキ属(No.8694) 木口 100×



径目 100×



板目 100×



24ツツジ属(No.8693) 木口 100×



径目 200×



板目 100×

# 写 真 図 版

図版 1



1.1・2A区



2.1区（南側から撮影）

図版 2



1.2 A区



2.2 B・3区

図版 3



1.SK 5



2.SK 6



3.SK 8



4.SK 9



5.SK10



6.SK27

2区の土坑

図版4

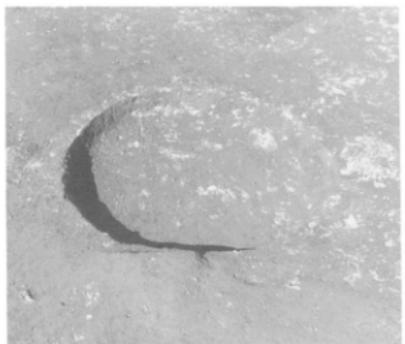


1.3区



2.3区

図版 5



1.SK12



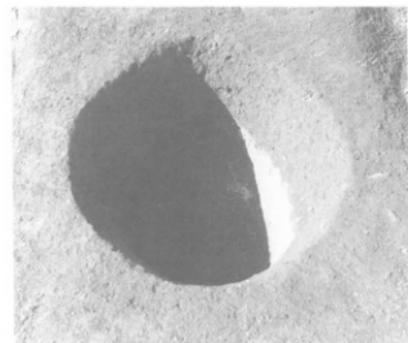
2.SK13



3.SK14



4.SK15



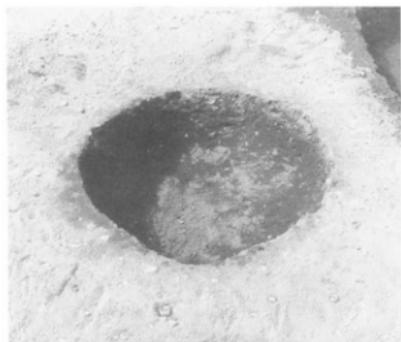
5.SK16



6.SK17

3区の土坑

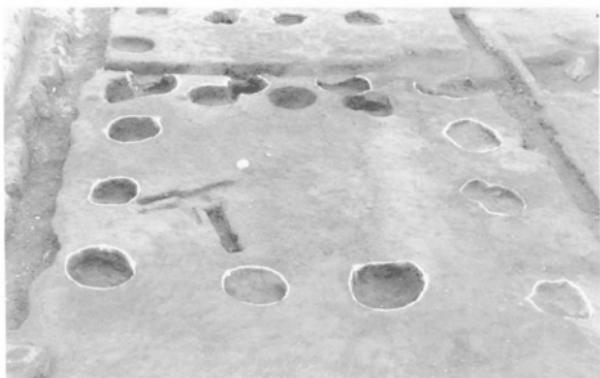
図版 6



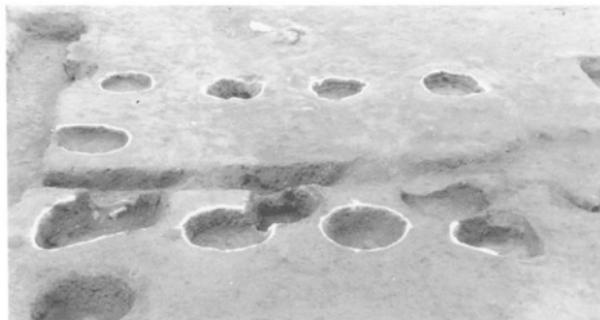
1.SK18



2.SK20



3.2号小土坑群南側建物想定



4.2号小土坑群北側建物想定

3区の土坑

図版 7



1.SH1電横断面



2.SH1電



3.SH1電壁道部構築材

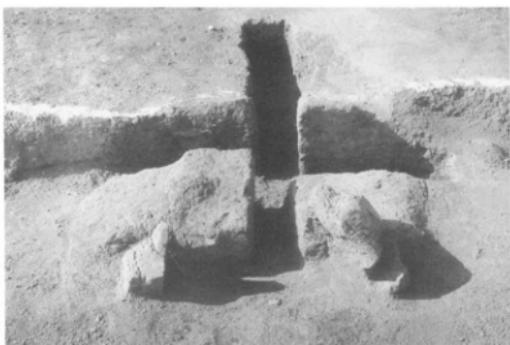


4.SH 5電



5.SH 8

図版 8



1.SH 8 竪



2.SH 9 新段階



3.SH 9 古段階

図版 9



1.SH 9 罐燃烧室内遺物出土状況



2.SH 9 罐袖石

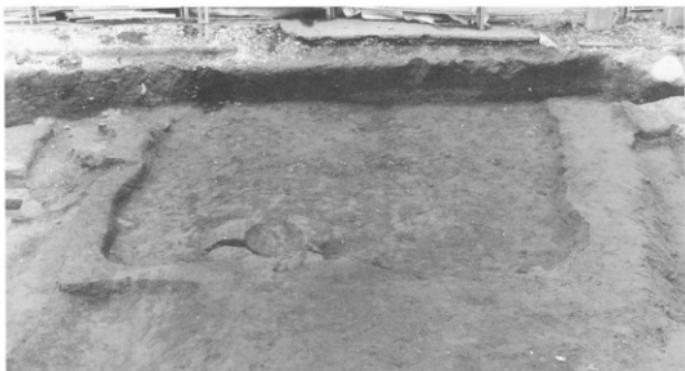


3.SH11古段階



4.SH11古段階

図版10



1.SH10



2.SH10電



3.SH12竈燃烧室内遺物出土状況



4.SH12竈

図版11



1.SH13竪



2.SH13竪



3.SH16



4.SH16竪

図版12



1.SH17竪



2.SH17竪



3.SH18



4.SH19



5.SH19

図版13



1.SH20



2.SH20竪燃烧室内遺物出土状況



3.SH20



4.SH21内出土刀子



5.SH21

図版14



1.3区方形周溝墓



2.1・2号方形周溝墓遺物出土状況



3.1号方形周溝墓北東隅部遺物出土状況



1.1号方形周溝墓北東隅部遺物出土状況

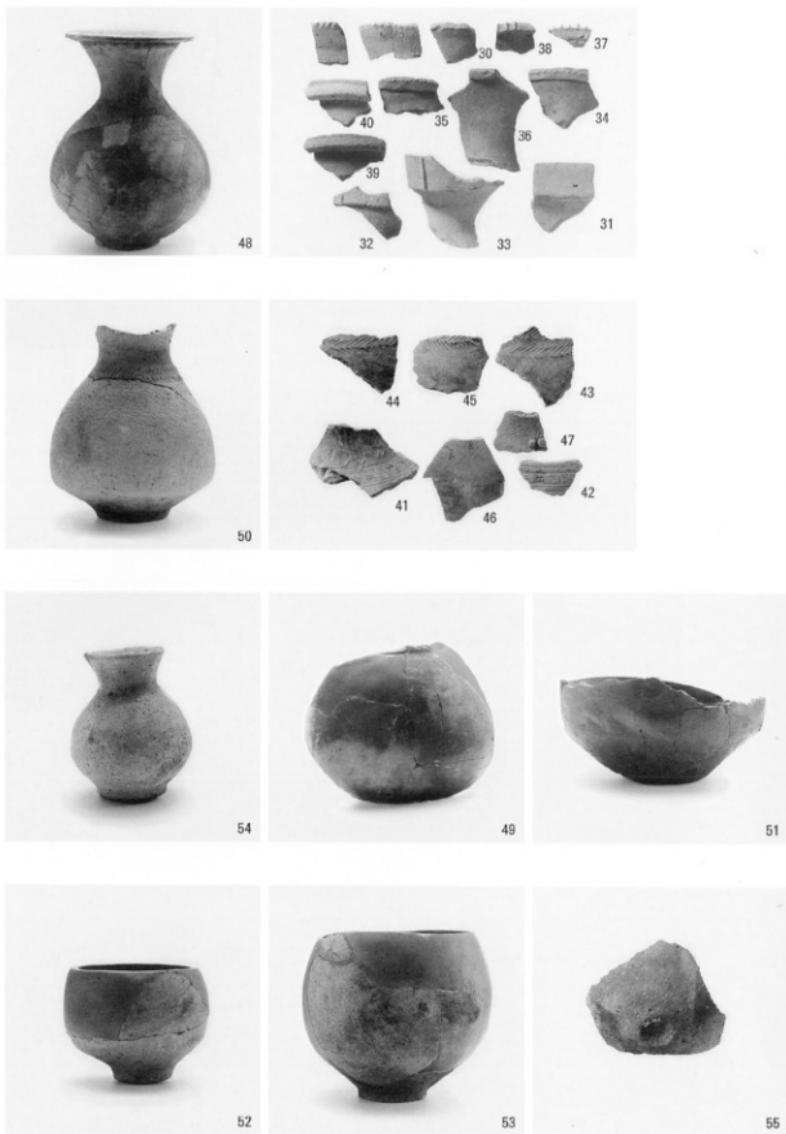


2.SR 1



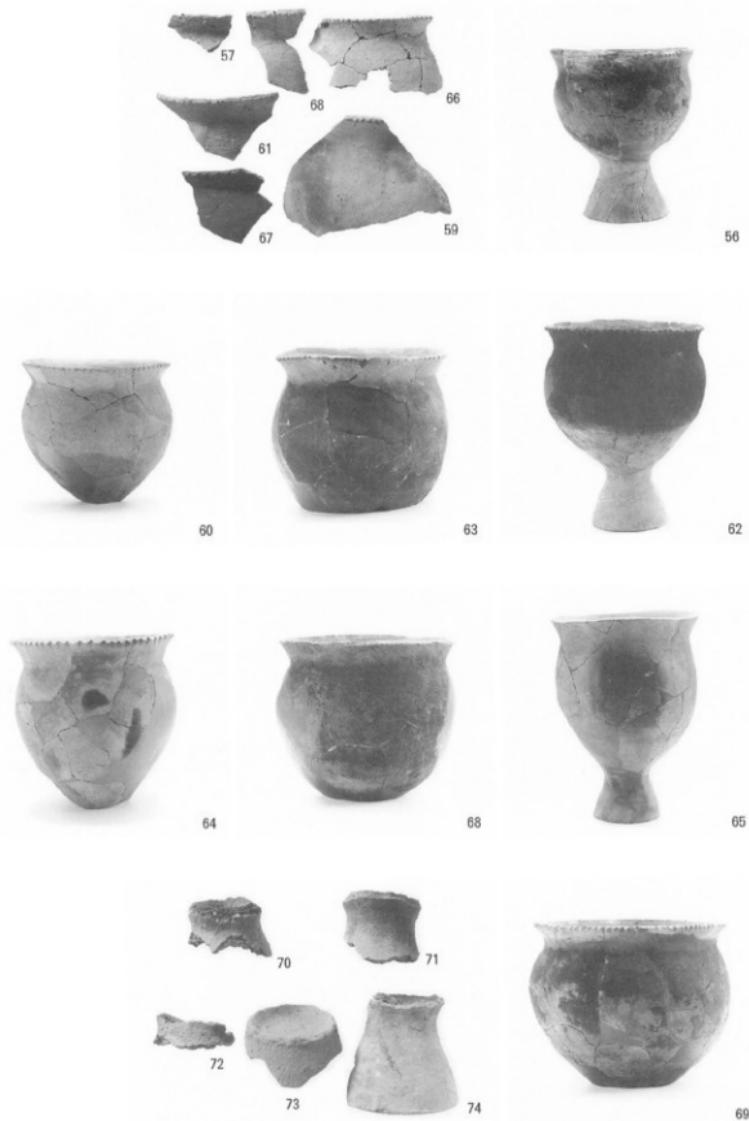
3.SR 1

図版16



1区旧河道の遺物（土器1）

図版17



1区旧河道の遺物（土器2）

図版18



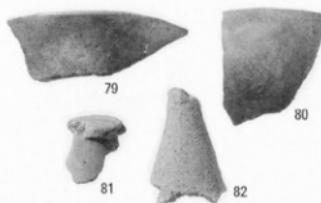
77



78



83



79

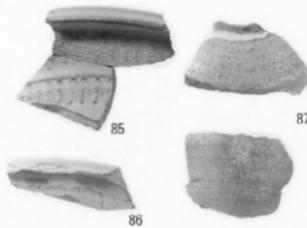
80

81

82



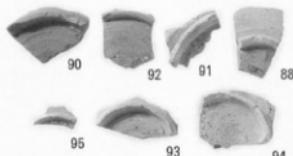
84



85

87

86



90

92

91

88

95

93

94



96



97



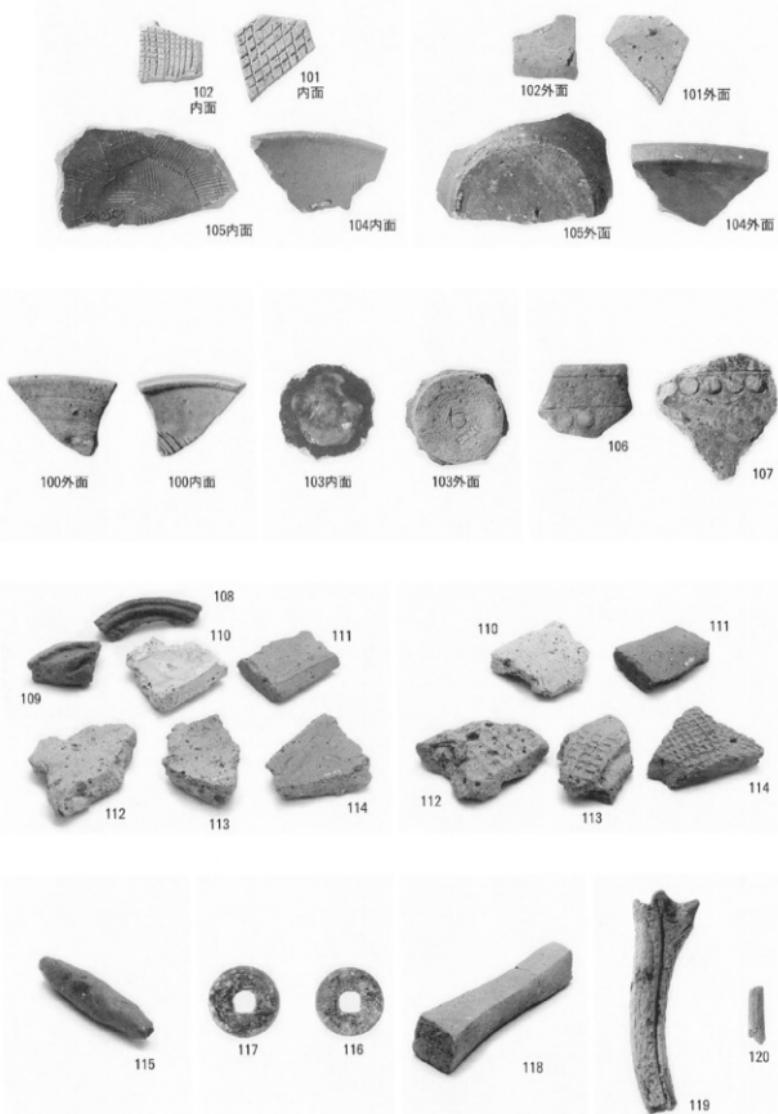
98



99

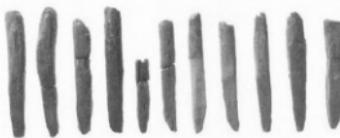
1区旧河道の遺物（土器3）

図版19



1区旧河道の遺物（土器4・瓦・土製品・金属製品・石製品・骨角製品）

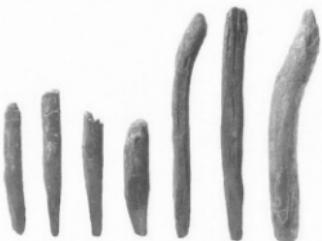
図版20



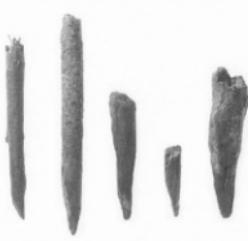
### 1.1号杭列構成杭①



## 2.1号杭列構成杭②



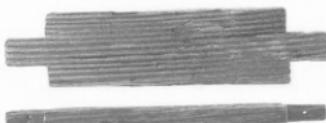
### 3.2号杭列構成杭



#### 4.3号杭列構成杭



121



122



124

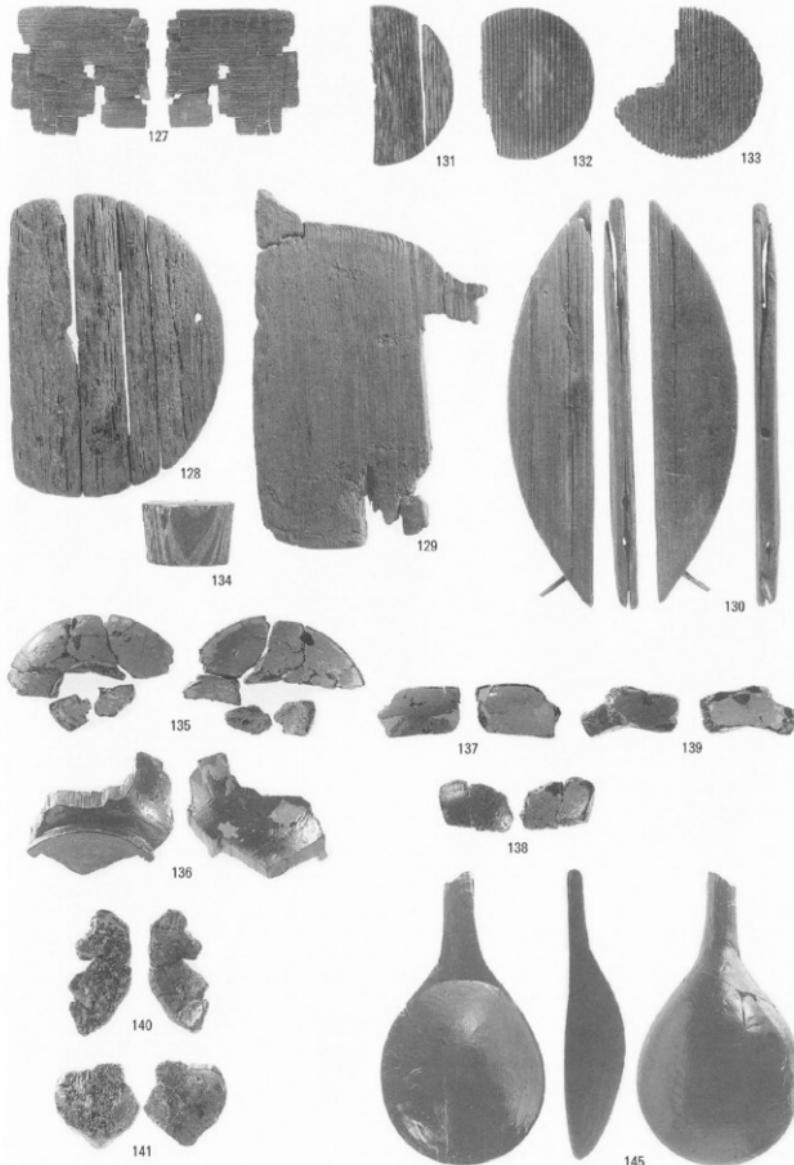


125



126

### 5.1 区旧河道の遺物（木製品1）



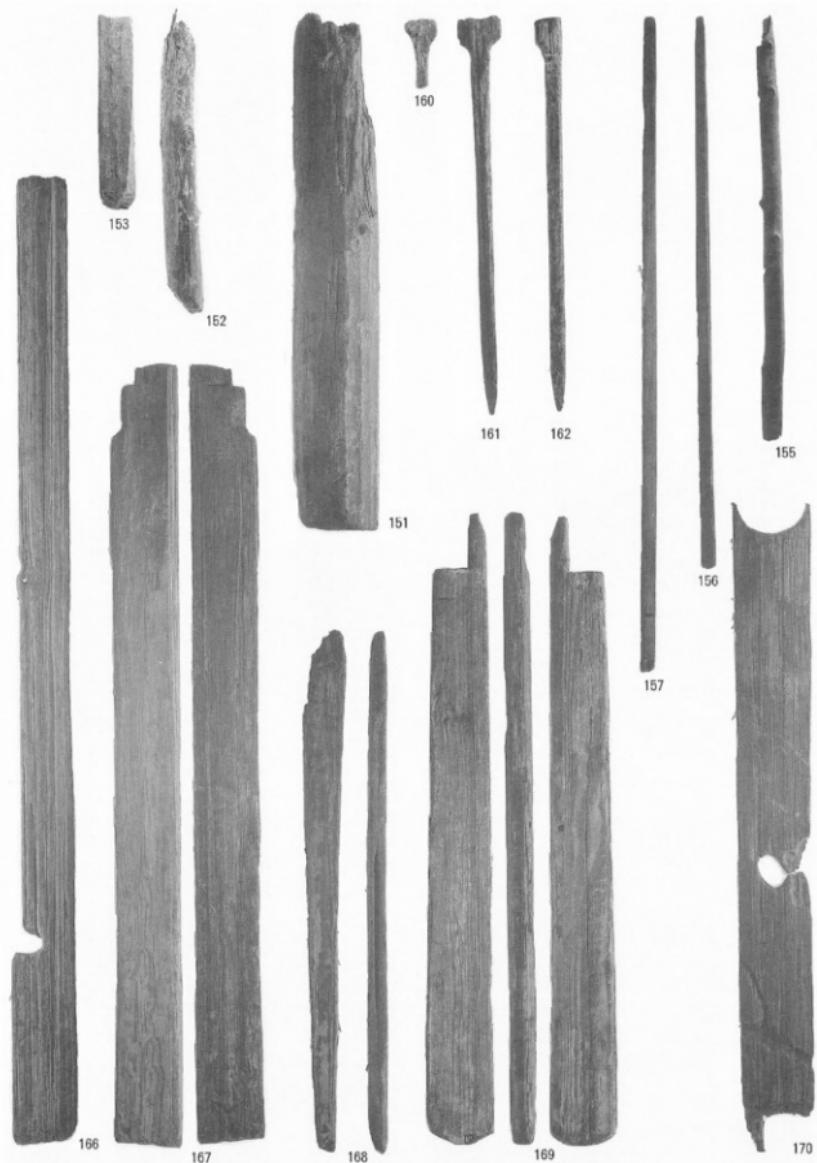
1区旧河道の遺物（木製品2）

図版22



1区旧河道の遺物（木製品2）

図版23



1区旧河道の遺物（木製品4）

図版24



1.SH1出土遺物



2.SH2出土遺物



3.SH3出土遺物



4.SH4出土遺物



5.SH6出土遺物①



6.SH6出土遺物②



1.SH7出土遺物



2.SH8出土遺物



3.SH9出土遺物①



4.SH9出土遺物②



5.SH10出土遺物①



6.SH10出土遺物②

図版26



1.SH11出土遺物①



2.SH11出土遺物②



3.SH11出土遺物③



4.SH12出土遺物①



5.SH12出土遺物②



6.SH12出土遺物③



7.SH12出土遺物④



1.SH13出土遺物①



2.SH15出土遺物

図版28



1.SH13出土遺物②



2.SH18出土遺物



3.SH16出土遺物①



4.SH16出土遺物②



5.SH17出土遺物



1.SH19出土遺物



2.SH21出土遺物



3.SH20出土遺物①



4.SH20出土遺物②



5.SK27出土遺物

図版30



2.1号方形周溝墓北溝東部出土遺物

1.1号方形周溝墓北溝西部出土遺物



3.1号方形周溝墓北溝中部出土遺物



1.1号方形周溝墓北東隅部出土遺物①



2.1号方形周溝墓北東隅部出土遺物②

図版32



1.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物①



2.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物②



1.1号方形周溝墓東溝北部出土遺物③



2.1号方形周溝墓東溝中部出土遺物

図版34



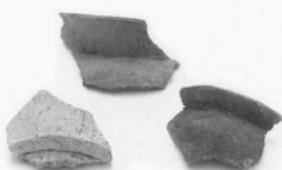
1.2号方形周溝墓西溝北部出土遺物



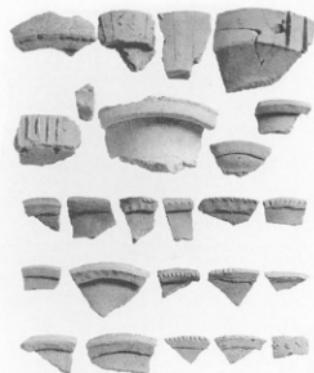
2.2号方形周溝墓西溝中部出土遺物①



3.2号方形周溝墓西溝中部出土遺物②



4.2号方形周溝墓南溝出土遺物



1.2・3区包含層出土弥生時代後期～古墳時代前期土器（壺口縁部）



2.同（壺頸～肩上位）



3.同（小型壺・壺頸）

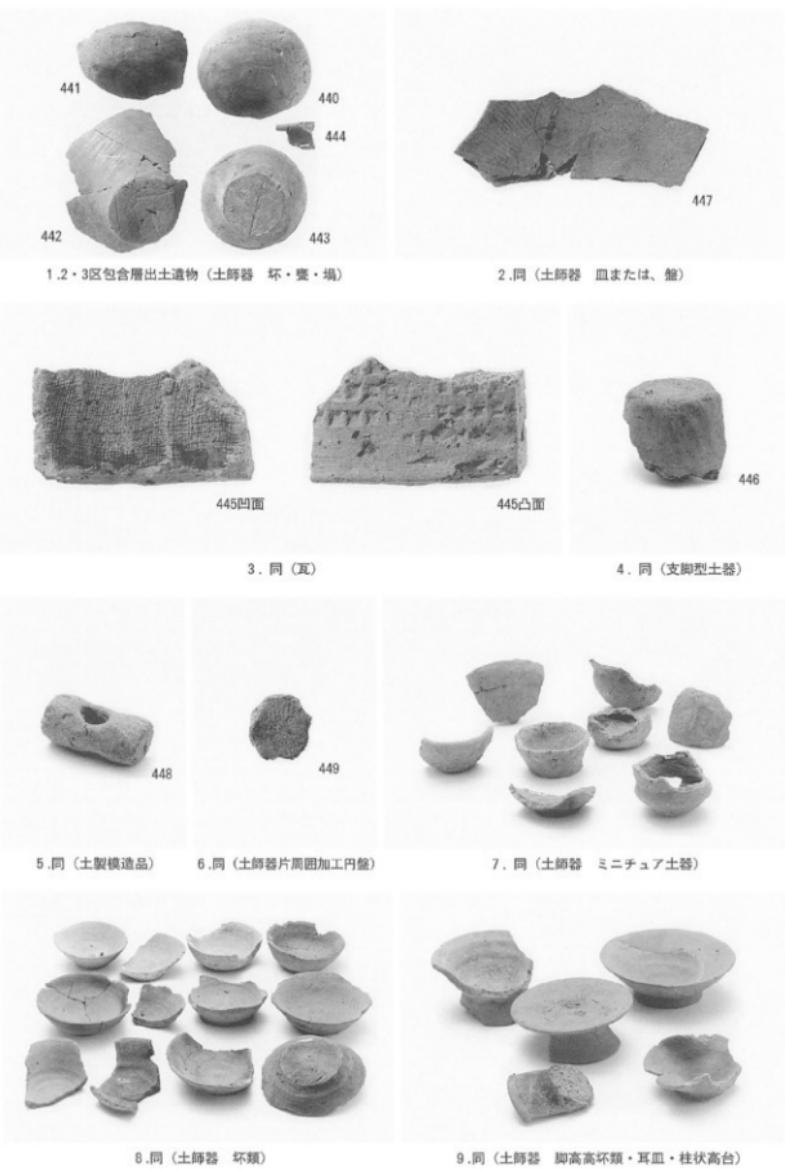


4.同（高杯・器台類）



5.同（壺・小型壺頸）

図版36





1. 2・3区包含層出土遺物（土師器 羽釜）



42

41

2. 同（かわらけ）



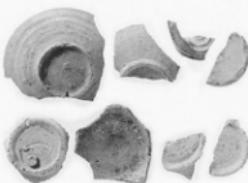
3. 同（須恵器）



498内面

498外面

4. 同（緑釉陶器）



5. 同（灰釉陶器）



499

500

6. 同（陶器片周囲加工円盤）



501

502

7. 同（金属製品 刀子・錢貨）



503

504

505

8. 同（石製品 磨・敲打石）

報告書抄録

ふりがな	あおきばらいせき						
書名	青木原遺跡						
副書名	平成9・10年度一級河川人にやさしい地域づくり河川整備事業 平成16・17・18年度一級河川御殿川芦川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究報告						
シリーズ番号	第172集						
著者名	岩名健太郎 小川とみ 鈴木三男						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL054-262-4261						
発行年月日	2007年3月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査種別
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(国土地理院図)			
あおきばら 青木原	しづおかけんみしりしきわら 静岡県三島市二日町	22206	366	35度 138度 6分 55分 23秒 25秒	1999/02~2000/0126 2005/09/06~2006/03/30	2642m <sup>2</sup>	一級河川 改修工事
所取調査名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
あおきばら 青木原遺跡	墓	弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝墓3基	土器			
		古墳時代中期	土坑1基	土師器			
	集落	古墳時代後期～奈良時代	住居跡13軒	須恵器 土師器			
		平安時代	住居跡3軒	灰陶陶器 土製器	ほか年代が不特定の住居跡軒樋		
	散布地	古代以降	小土坑群2				
		弥生時代後期～古墳時代前期	旧河道	土器 木製品 骨角器（鹿角加工品） 石器（敲打石）			
		古墳時代後期～平安時代		須恵器 土製器 瓦 灰陶陶器 漆柏油器 珍製品（刀子）			
	中世			陶器 かわらけ 瓦器 鍛鉄			
		近世以降	杭列3	土製品 錫貨			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第172集

青木原遺跡

平成9・10年度一般河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業  
平成15・17・18年度一般河川御殿川河川改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年3月20日発行

誌集発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒420-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054) 262-4261㈹

FAX (054) 262-4266

印刷所 御横本印刷所

〒422-8046 静岡県静岡市駿河区中島390

TEL (054) 266-3336

